

越谷市郷土研究会会報第九号

# 古志賀谷

平成九年六月刊

## 目 次

△卷頭言

## 「研究集録」

- ◆明治期・柏壁中の寄宿舎規則
- ◆「赤沼紀行」について
- ◆文書にみる寺家の食生活
- ◆天下の大姓
- ◆国学者平田篤胤の江戸退去
- ◆越谷市内の火の見やぐら

## 火の見やぐら調査グループ

- |                  |       |
|------------------|-------|
| 新方地区に散在する石仏類について | 加藤 幸一 |
| 二十三夜供養塔          | 高島 英一 |
| 消火ポンプ竜吐水         | 谷岡 隆夫 |
| 武藏地名考            | 酒井 達男 |

131 127 120 119

- |                |       |
|----------------|-------|
| ◆生死をわけた運命      | 鈴木 秀俊 |
| ◆越谷の水対策        | 一色 英子 |
| ◆子どもたちを育んだ八条用水 | 高橋 正輝 |
| ◆越谷で出会い影響を受けた人 | 平川 陽三 |
| ◆越谷で生き残った人     | 山梨 隆司 |
| ◆「連帯保証人」       | 水上 清  |
| ◆「特集」 谷中町きき書き  | 池田 仁  |
| ◆「会員アンケート」     | 青山 栄吉 |
| ◆「史跡めぐりに参加して」  |       |

83 81 76 74 71

表紙 金子 泰岑

103 95 85

- ・文化祭展示出品一覧表
- ・史跡めぐり一覧表
- ・研究発表会一覧表
- ・あとがき・編集委員
- ・役員名簿
- ・会則

- ・文化祭展示出品一覧表
- ・史跡めぐり一覧表
- ・研究発表会一覧表
- ・会員名簿・住所録

## 卷頭言

越谷市郷土研究会 会長

## 谷岡 隆夫

昭和四〇年三月に発足した当研究会は、郷土を愛する皆さん  
の熱意あるご支援により、今年三一年目を迎えた。  
現在会員は二〇〇名を越える規模となつた。

会の行事は史跡めぐり、研究発表会、古文書勉強会、展示参  
加、講師派遣等、幅広い活動が定着している。特に最近月一回  
ベースで行なつてゐる史跡めぐりは一四〇回を数えることとな  
つた。これらは、恒例の役員会の討議ばかりでなく、非公式の  
世話人会や反省会でも、夜遅くまで打ち合わせや準備が重ねら  
れてゐる成果と思う。行事の際には会員の積極的なご協力をい  
ただいている。史跡めぐりは交通整理からトイレの配慮、資料  
配布、会の旗・マイク持ちなどのご協力によつて支えられてい  
る。古文書勉強会では初步からの親しみ易い解説法が好評で、  
会員の出席率が良く、市外からも参加者が多い。

平成八年一月に文化活動の代表者と市長懇談会が開かれた。  
席上、郷土資料館の早期設置や文化財の保存について発言した。  
市長や列席の市役員の方々が郷土文化に関して、前向きの姿勢  
がみられ、意を強くしたところである。市民一体で郷土文化を  
考え、より良き遺産を後世に残したいものである。

わが市は文化都市宣言をしており、郷土文化に関心のある同  
志が、当会をふれあいの場として、また生涯学習の場として、  
利用されるのを我々は期待している。

会報の発行は今回で九号となつた。回を重ねることに、熱心  
な執筆者が増え、内容も充実の一途を辿つてゐるのは、喜ばし  
いことである。記事内容はプロの諸先輩のご指導も多かるうが、  
紙面から、アマラシイ一途な執筆の熱意を汲み取つて下されば  
幸いである。

# 明治期・柏壁中の寄宿舎規則

小島 誠

ルベカラズ

第七十九條 生徒ノ入舎ハ出願ノ順序ニ従ヒテ之ヲ許可ス

## 第二章 自習室寢室

第八十條 自習室ニアリテハ所定ノ時間ノ外音読ヲ禁ズ  
第八十一條 寄宿舎内ニハ必要アリト認ムベキ物品ノ外持入ル  
ベカラズ

私達の在学中は、校地の北側に、二棟の寄宿舎と西側に、寄宿用の食堂、飲食場、浴場があつて、数名の傭夫がいた。同級生が入学当初二十余名入舎。寄宿生の背景をなした、生徒守則を記する。

## 寄宿舎生徒心得

第一章 総則  
第二章 自習室寢室  
第三章 外出  
第四章 食事食堂  
第五章 疾病々室  
第六章 掃除浴室  
第七章 検査  
第八章 部長副部長

## 第一章 総則

第七十五條 寄宿生徒タルモノハ本校諸規則ヲ遵守スペキハ勿論常ニ舍監ノ監督ニ服従シテ能ク其本分ヲ守ルベシ  
第七十六條 寄宿生徒ニ欠員ヲ生シタル時ハ臨時ニ入舎ヲ許可シ又ハ學校長ヨリ特ニ入舎ヲ命ズルコトアルベシ  
第七十七條 寄宿舎内ニ於テハ晨起就ジョク湯浴外出等總テ規定ノ時間ニ依ルベキ者トス  
第七十八條 寄宿舎内ニ於テハ専ヲ静肅ヲ主トシ粗暴ノ挙動アシ

## 第二章 自習室寢室

第八十二條 寄宿舎内ニ於ケル座席及物品ノ配置ハ舍監ノ指図ニ従フベシ

第八十三條 故ナク他室ニ往来シ妾リニ小使ヲ使役スルコトヲ禁ズ

第八十四條 寝室ニ移ラントスルトキハ炉火燈火ヲ滅スベシ  
第八十五條 寝起後人員検査アラハ直ニ寝具ヲ収束シ室内ヲ掃除シ後チ盥嗽ニ就クベシ

第八十六條 昼間ハ妾リニ寝室ニ入ルベカラズ

第八十七條 来訪者ニハ必ス応接所ニテ面会スベシ  
但シ病室ニ在リテ面会セントスルモノハ舍監ノ許可ヲ受クベシ

## 第三章 外出

第八十八條 外出時間外ニ不得止事故アリテ臨時外出セント欲スルモノハ特ニ監舍ノ許可ヲ受クベシ  
第八十九條 校門ノ出入ニハ門鑑ヲ用フルモノトス  
第九十條 外出中発病其他不得止事故ニヨリ門限時ニ帰校スルコト能ハザルモノハ当日中ニ保証人連署ヲ以テ届出ツベ

第九十一條 親族病氣等ノ為ニ帰省セント欲スル者ハ保証人ノ連署ヲ以テ願出ツベシ

#### 第四章 食事食堂

第九十二條 食堂ニ入りテハ各自ノ定席ニ就クベシ

第九十三條 食事以外ニ於テ食堂ニ入り又ハ私ニ食物ヲ調理シ成ハ賄人ニ命ズルコト許サズ

第九十四條 食事ニ就キ賄人ニ不都合アリト認メタルトキハ其ノ手続ヲ經テ舍監ニ申出ツベシ

#### 第五章 疾病々室

第九十五條 病氣ニ罹リ医師ノ治療ヲ請フ者ハ舍監ニ届ケ出ツベシ

第九十六條 舎監ハ病氣ノ種類症候ニ依リテハ帰療ヲ命シ若クハ病室ニ就カシムルコトアルベシ

第九十七條 舎監ハ生徒ニ病氣アリト認ムルトキハ医師ニ診察ヲ請ハシムルコトアルベシ

第九十八條 病氣ノ為メ帰宅治療セント欲スルモノハ医師ノ診断書ヲ添ヘ保証人ノ連署ヲ以テ願出ツベシ

第九十九條 病氣ニヨリテ欠課シタルトキハ其ノ日ノ外出ヲ許サズ  
但シ受診等ノ為ニ外出セント欲スルモノハ舍監ノ見込ニヨリテ之ヲ許可スルコトアルベシ

第一百條 病室ニ於テ食事ヲナサントスル者ハ舍監ノ許可ヲ受クベシ

#### 第六章 掃除浴室

第一百一條 身体及居室ハ常ニ清潔修整ナラシメ以テ健康ト秩序トヲ維持スベシ

第一百二條 自習室寝室内外ノ掃除ハ毎朝之ヲ行フベシ

第一百三條 每週土曜日自習室寝室内外ノ大掃除ヲナシ舍監ノ検閲ヲ受クベシ

第一百四條 検閲ノ上掃除ノ不行届ヲ認ムルトキハ更ニ之ヲ命スルコトアルベシ

第一百五條 浴室ニアリテハ喧騒ナル挙動ヲナシ又ハ見苦シキ行為アル可ラズ

#### 第七章 檢査

第一百六條 檢査ヲ分テ左ノ三種トス

一 人員検査

二 清潔検査

三 物品検査

第一百七條 人員検査ハ毎日晨起就寝ノ際現在員ニ就キ其ノ人員ヲ検査スルモノトス

第一百八條 清潔検査ハ寄宿舎内外及衣類等ニ就キ潔不潔ヲ臨時ニ検査スルモノトス

第一百九條 物品検査ハ生徒ノ所有品貸与品ニ就キ其ノ品類員數並ニ損否等ヲ臨時ニ検査スルモノトス

第一百十條 舎内ノ整理ヲ計ランガ為メ寄宿生徒ヲ數部ニ分ケ

#### 第八章 部長副部長

每部ニ部長及副部長各一人ヲ置ク

第一百十一條 部長副部長ハ學校長生徒中ヨリ選抜シテ之ヲ命ス  
第一百十二條 部長副部長ハ舍監ヲ督ノ下ニ左ノ事項ヲ掌ル

一、舍内ノ整理

一、部員ノ監督

一、命令ノ伝達

一、部員ノ願届類ノ通達

第一百十三條 部長ハ部員二代リテ總テノ検査ヲ受ケ人員検査ノトキハ部員ヲ整列セシムベシ

第一百十四條 部長ハ寄宿舎内ニ闇スル事ニツキ舍監ノ諮問ニ対シ意見ヲ申告スベシ

第一百十五條 副部長ハ部長ノ職務ヲ輔ケ部長差間アルトキハ之ニ代ハルモノトス

以 上

表題に柏中寄宿生と書いたが、実は、当時は浦和、熊谷、川越のいづれにも、寄宿舎があり、その守則は、全部共通のものであった。

次の賄方との契約は、柏壁中学校独自のものである。

寄宿生徒賄方二閏スル同

南埼玉郡柏壁町百七拾弐番地

飲食店営業

島 田 某

当校寄宿生徒食事並燈油、湯浴ノ賄方、前記ノ者ニ、受負ハセ度様別紙命令書案、相添此段相伺候也

明治三十一年十一月二十一日

第四中學校長 木 寺 柳次郎

寄宿生徒賄方受負命令案

一、本校ノ規則命令ニシテ、賄方ニ闇スル箇条ハ堅ク遵守スヘキ事

但規定シアラサル条項ト雖モ命令アリタルトキハ、受負人及雇人共々遵守スヘキ事

一、食事ハ生徒一人、一日金拾四錢、湯浴及燈油ハ、一人一日（夏期間二錢、冬期間一錢）ノ割合ヲ以テ、毎月末舍監ノ手ヲ経テ、生徒ヨリ支払フヘキ事

但期限中時価ノ低落アリタルトキハ、値下ケヲ命スルコトアルヘキ事

一、一人ニテ、一ヶ月中三日以上引続キ食事ヲセサルモノアルトキハ、其ノ代価ヲ差引クヘキ事

一、食物ハ、其ノ品質ヲ吟味シ、毎回一汁、若シクハ、一菜・香ノ物添トシ、菜物ハ、毎日一回ハ、魚類、若シクハ、肉類ヲ用イ、前日迄ニ、一日以上ノ献立表ヲ舍監ニ差出シ、変更新ノ指図アリタルトキハ、改正致スヘキ事

一、伝染病、若シクハ、流行病アルニ際シ、食品ノ制限ヲウケタルトキハ、遵守致スヘキ事

一、飯米ハ、見本ヲ差出シ置キ、常ニ一定ノ準拠トナスヘキ事  
一、湯浴ハ十月ヨリ、翌年五月マテハ、三日二二回、六月ヨリ九月マテハ毎日トス

一、賄方受負保証金トシテ、金八拾円ヲ本校ニ預ケ置クヘキ事

担保証金ハ、公債証書ヲ以テ代フルコトヲ得

一、命令条項ニ違反シタル行為アリタルトキハ保証金ヲ、没収スヘキ事

スヘキ事

一、賄方ニ閑シ、不都合アリタル場合ニハ、支払フヘキ金額ノ一部若クハ、全部ニ対シ、一時差押ヲナスコトアルヘキ事

一、期限中ト雖モ命令取消ヲ申渡サレタルトキハ、直ニ、跡方整理引払可致事

一、期限中自己ノ都合ニ依リ、賄方ヲ辞セントスルトキハ、一ヶ月前ニ申出許可ヲ受クヘキ事

一、病氣其他旅行等ニ依リ、三日以上不在スルトキハ、相当ノ代理人相互届出スヘキ事

一、校有ノ器具・建物ニシテ、賄方不注意ヨリ破損シタルトキハ、指揮ニ依リ、速ニ新調若シクハ修理スヘキ事

一、賄方雇人ニ閑シテハ、一切ノ責任ヲ負ヒ尚左ノ事項ニ責任ヲ有スヘキ事

学校管理者ニ於テ雇人ヲ、不適当ト認メタル場合ニハ直ニ解雇可致事

学校管理者、若シクハ寄宿生徒保証人ヨリ賄方雇人ニ対シ、学校ニ閑セシ事実ヨリ生セシ、私訴提起ノ場合ニハ連帶責任ヲ有スル事

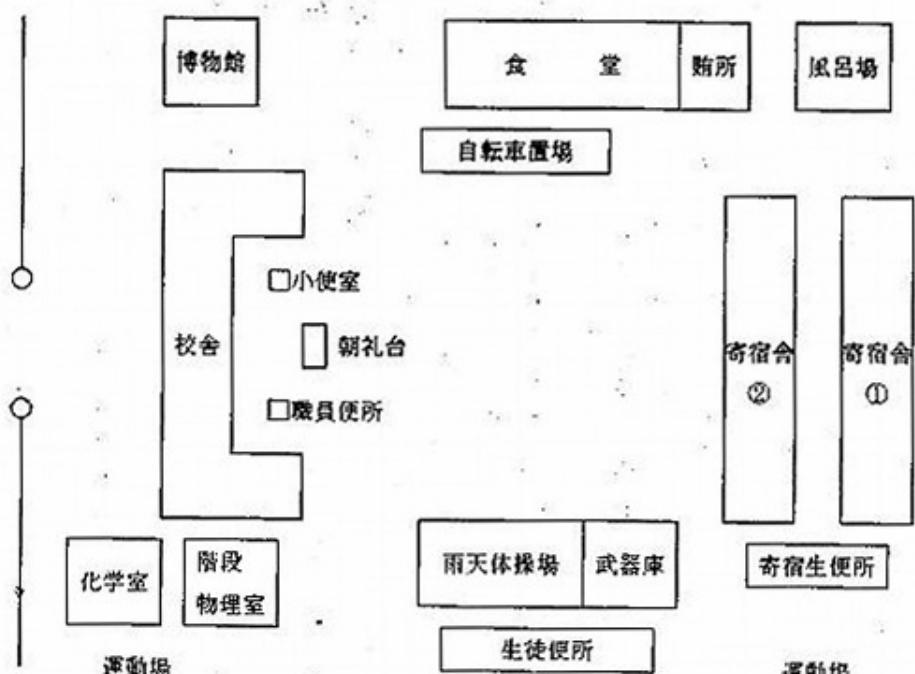
一、火災等ノ場合ニ於テ、賄方不注意ヨリ生セシ損害ハ必然其ノ責ヲスヘキ事

一、此ノ命令書ヲ受領シタルトキ保証人二名連署ヲ以テ、以上ノ命令条項ヲ悉皆記載シタル受書ヲ可差出事

一、保証人ハ、本校所在地一里以内ニ住シテ、土地又ハ家屋ヲ

有スル丁年以上ノ、男戸主タルヘキ事

以上



柏壁中学校・校舎配置図

## 「赤沼紀行」について

鈴木 秀俊

「赤沼紀行」は、大宮市高昇に鎮座する武藏一の宮氷川神社

宮司西角井家から県立文書館に保存を委託された、古文書の中の一編である。筆者の角井主膳茂臣は、水川三社（勇体社・女体社・姫王子社）、三神主（岩井家・東角井家・西角井家）の一人、内倉家断絶により創立した西角井家物部（角井）重臣から六代目の当主であった。文章は国文體で書かれ、一部に難解な古語があるが、文化九年（一八一二）当時の地方文化、農民の氣風、文化への憧れが活写されていて興味深い。

この時代の世相は、文化文政時代といわれ、徳川十一代將軍家斉治下の文化・文政年間（一八〇四—一八二九）を中心として、幕府の綱紀は弛み風俗頽廃し、江戸市民は遊楽を事としたが、町人芸術は爛熟の極に達し、小説（山東京伝・式亭三馬・滝沢馬琴）、戯曲（鶴屋南北）、俳諧（小林一茶）、浮世絵（喜多川歌麿・東洲齋写楽・葛飾北斎）、西洋画（司馬江漢）、文人画（谷文兆）などすぐれた作家を輩出した。また地方文化も盛んとなつた。（広辞苑より）

「赤沼紀行」を略述すると、文化九年旧暦四月六日、水川神社神主角井主膳は葛飾郡赤沼村（現春日部市赤沼・豊野町）に招かれ旅立つた。途中砂原村（越谷市砂原）の野口保高宅と大

沢町の会田弥五左衛門宅に立寄つて友情を温めた。

翌日、赤沼村に着くと大勢の村民に歓迎され、十七人が主膳の門人になつた。これは本居宣長の国学による影響であろうか。主膳は熱心な門人達に神道の教えを伝授したあと催された盛大な歓迎会に驚いた。帰り際に「赤沼村の人々、我国の道に熱心でつたなき私を招き、一人二人の饗応にあきたらズ」と感激して記している。

主膳は同年八月に一回、祈禱を依頼されて赤沼村とその隣村の大川戸村（松伏町）を訪れている。赤沼村に統いて四月二十三日、川田谷村（桶川市）を訪れ、二十五日に帰着したが、その間の人々との交流で見聞したこと、とくに連歌師正阿との話が詳しく記され、当時の風流人の一端が窺い知られる。

卯月晦日の歌合には、冷泉家の小野安藝守の名があるので、その立会いのもとに催された、と推察される。四名の歌人の作品が書かれているが、筆頭の野口保高以外は角井家の人達なので、保高の和歌の評価はかなり高かったものと思われる。

附記、過日私は野口保高の資料を求めて砂原へ行き、地元の人々に教えて野口耕一氏を訪ねた。大正八年生れの耕一氏の話によると、保高家は耕一氏の本家で、その邸は砂原久伊豆神社の近くにあり耕一家の宅地もその一部であつた。幕末頃不幸が続いて絶家になつたという。すぐれた歌人でありながら他の文献に見られないのは残念である。

会田弥五左衛門については「大沢猫の爪」に「会田次郎右衛門屋敷、同弥五左衛門代々年寄り役勤め來り候云々」とあるが、その他のことは不明である。

次に紹介するのは「赤沼紀行」の解説文である。

文化九年卯月六日

赤沼紀行

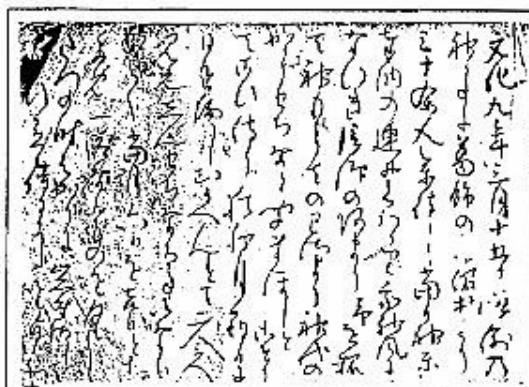
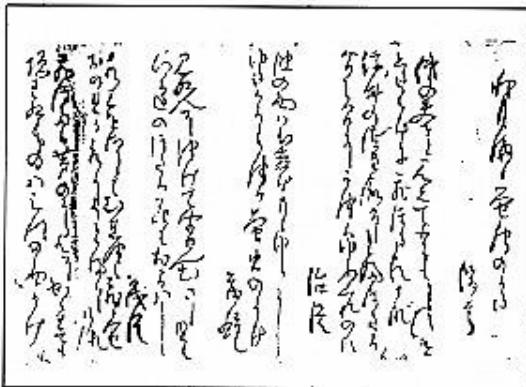
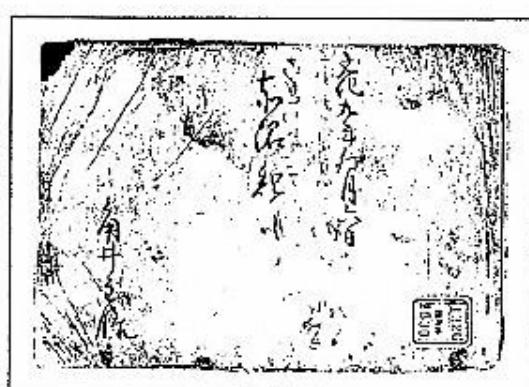
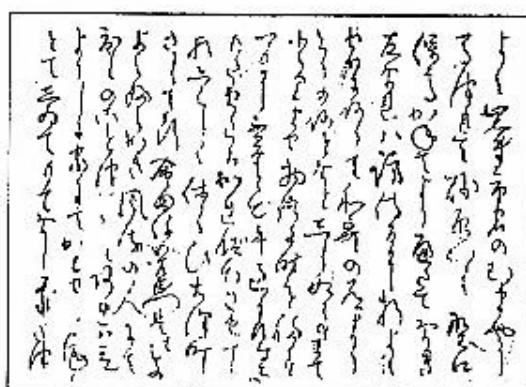
角井 主膳

文化九年（一八一二）三月十五日、恒例の神事に萬飾の赤沼村より三十餘人參詣し、当日、神樂奉納の連にくわわり我が神

風になびき、信仰のあまり予を招きて、神もうでのわざより神代のかうせつなど聞かまほしと、こぞりて乞い侍り、猶、卯月朔日（旧暦四月一日）に日を約しむかえんとて、二人三人見えしんせちなる事いなびがたく、当月六日を吉日とさだめ、一清なるものを具し、たつの時ばかりに岩付（岩槻）さしてたび立ち侍るに、いと日和よく岩槻市宿のむまや（駅）に馬繼ぎて。

砂原むら野口保高、かねてよりへだてなき友なれば、訪ね侍るに折よく宿にありて、和歌の道よりとりのあと（文字、筆跡のこと）など、知らぬ事までとりませ物語に時を移す。間に盃など出、午過ぎる頃なれば、もたせたるかれ飯（餉）一旅行の時携帶した干した飯）出させて、猶しばらく休らひ、大沢町さして行く。

会田弥五左衛門、是ものよみ、ふみかき風流の人にて、度々のことづけなどあれば立ちよりしに、家にてかもせし酒とてしいてもなし、我たづえたるぬなは（食用の水草—じゅんさいの古名）など取り出して、清談時を移し夕ぐれになり、たをるほどに酔いながらも、たび立たんとしけれど、あるじ夫婦して留めるまに、しらず打ち臥し、七日朝かれいなどた



べ、馬継ぎ（乗りかえで）赤沼村さして行くに。

まくり村（間久里）といえる道にて、此の事を起したる鳴田吉兵衛に行きあい、鳴田申せしは、きのふまで日々まちけれども音信もなく、ちかごろの事にはあるまじとて、今日は江戸に出侍る。されども、参り候ともさしつかえざるよし申すゆへ、別れて己の刻ばかりに彼の家につきぬ。

先ごろよりせわせし八郎左衛門並に当村名主伴健次郎見舞に参る。岩井市右衛門見え申しけるは、あるじ留主に候へば、関根伝左衛門方へまねきたきよし、岩井をあないとしゆきける。途中まで石川氏、金子むかいに出。

もうけありて門入の人々には、

石川健次（郎）

石川政豊

金子八郎左衛門

川鍋太郎右衛門

関根李右衛門

関根伝左衛門

関根久八

関根武左衛門

染谷定右衛門

岩井市右衛門

日向和哉

岩井愛蔵

関根茂左衛門

田中小兵衛

八月二十四日門入

石根新右衛門

石根龜次郎

西三月より  
鳴田鳴蔵

いつもしらねき（熱心）人々にて、まづ次第入りをよみて、一清をもてつたへけるに覚えければ、口伝の事、ときのへわざの伝授は明日申すまに、夕ぐれになり、風呂より出けれ

ば一清云く、只々時事を聞き侍る、またなり侍らんと聞耳をそば立て侍り居けるに、七日の夕月清らかにさしのぼり、今こそと思へどなのらざれば、

おもはずも月にとはるる旅の宿に

まちあかぬ間に鳴け郭公

口すさみしまに夕供など出、杯度々にてそこのなく、国道（神道）の事物がたり、夜ふけて臥せりぬ。

八日、あしたよりよくはれ、門人の人々とまりてもてなすもあり、夜あけると、とく来るもあり。式の書ものもやうやくに出来て、己の時ばかりより神事にかかり、伝授済みて見事なる鯉とり出て、ほうなど勧まれ、やむ事なく切りちらし、一杯あとあと酔尽し。

茂左衛門といへるものよく神酒あけ、また大川戸村（現松伏町大川戸）喜三郎といへる年ごろのもの、殊の外に我国道にしらぬくて、神酒たづさへ參り、雜談時を移しそ中臣の講釈みなみな乞けるに、よいとも心得がたからんと、まづ神代のまき、岩戸のまへまでをよみしてきかせけれ。おのののとうとひよう見えるけるゆへ、中臣の題号より三段まで、あらあらしくはなしきさせ、夕ぐれになりやみぬ。

また、杯出す、しんせちにもてなすさまは、御代官の毛見（毛見に）出たるにまさりなん覚え、いとおかしくも侍る。またふところのかきちらし、あまたかきちらし、夕供給で風呂に入りやすみぬ。

（注）毛見—検見ともい、年貢徵收の一方法、定免に対し坪苅を行つて稻の収穫量を検査し、豊凶などを考慮して年

貢を決定すること。

九日、此度の門人の頭矩善、予が起るをまちて、護身神法伝授を再度乞、神代のくさぐさ雜談し、門人追々見えはなしぬ。かつしかの赤沼むらの人々、我国の道にしらねく、つたなきやつがれ（私）をまねき、ひとりふたりの饗応にあきたらず、別れを惜しみ、門人の人々大枝むら（春日部市大枝）までおくり、けふは 　。（奥かい）。（大枝より岩槻を経て大宮に帰る）

同八月七日、赤沼村八郎左衛門、大川戸村喜三郎同道出村、留主へ参り喜三郎縁者、同村六左衛門狂氣並に赤沼村門人定右衛門妻病氣、兩人祈禱相願い留主にて神符遣わし候。

同十七日、定右衛門叔父多藏、此方にて祈禱相願い、二十二日参るべしと挨拶に及び、当日甚左衛門案内、赤沼村の向在へ

参り途中出迎へ、渡しを渡り天王へ参詣。伝左衛門方へ立寄り種々馳走、門人残らず同道、夕景大川戸村六左衛門方へ着し一宿、健次（郎）始め両三人同宿す。

翌二十三日、門人一同にて一万遍執行、□ころ出立、伝左衛門方伴の病氣祈禱願い、右方へ一宿。二十四日千度□相勧め病人もよろしく、昼時門人送り夜に入り帰宿。

同じく卯月二十三日、清右衛門を真し川田谷村（桶川市川田谷）に行く。高柳新十郎といへる名ぬし三教一致の大通を悟り侍るよしにて、去年の秋兩度また我を訪ひ、その後も度々道のこととひたく、招きたきよしことづけあり、また、そのむら荒井左知馬といへる伯家（神祇伯を世襲した家）より免跡。のち

大工棟梁の口入にて渋谷數馬めし抱へしゆへもあり、左知馬きのふの夜とまり、あないとしていざないあり、まづ左知馬方につきぬ。数馬はその日新十郎方にありしに、彼らの方より差遣わしければ、新十郎嬉し□□りにて早々参り呉れよとの事にて、みなみな召しつれ、当村の鎮守諏訪大明神にもうで、夫より八幡原といへる所、高柳新十郎方に着く。

夜に入るまであるじと雅談時を移し、亥の刻ばかりに此家の先客白川夜舟といへるものは、もとは官士なりしより、今は騎西町辺に世を遙れ連歌を楽しむよし、かねて新十郎としたしく度々訪れるよし。また、きくたいという俳諧師、是も西尾家より出たるものよし。また中丸村（大宮市南中丸）名主加藤源次郎といへるものしる人になり、その夜は物がたりもなくふせりぬ。

二十四日、雨いとふぶり、あるじはじめ昨夜の人々と、かれはなしつのり、また当村天沼専左衛門そのつれ三・四人、我国道のことなど問い合わせよしとみえ、未の刻ばかりに雨晴ければ帰らんとしけるに、あるじはじめ人々しいてとめるゆへ、とまるべきよしになり雅俳の雜談ますますつのり、あるじ三教の事よみたるよし三首の歌を見せけれども、おもはしからずともいいがたく、鏡によせて三教をよみたるあるじの大道を、甘心し侍りていましが。

くもりなきますみのかがみかけて見よ

今も神代のむかしなりけり

茂臣

かぎりなきこまもろこしの道までも  
かけしかがみをこころして見よ

ほとけたる心をてらすかがみこそ

うらなく見えて影とてなし

三首よみて見せ侍るに、聞えがたきやまた悟らざるにや、あ  
るじたのしともいへず。

是よりますます雑談となり、夜に入りあるじ用事出来て座を立ちし跡にて、彼の夜舟といへるものは七十を越えたる老翁にて、今は常源流の連歌師にて正阿と呼びけるに、我國道もよく弁え、うしみつのころまで二人にてはなし侍りて申すに、淺草駒形堂の向はしからし横町にすみ侍る正木正助千幹といへるもの、三代集の風をよくよみ得たるよし、當時古学をとなうるもの見ふれて、よみてなるよし。千もとがよみ歌自筆のたんざくを正阿くれ侍る。春の虫の題にて

はかなくもおのが羽風にちる花を

ともぞや蝶のうちむつるらん

柳營の御会にかかる天満天神の画讚は、御坊主衆の家につた  
へ、毎年十一月に上へ御貸申せしを、ゆへあり上へ御預け願い、  
貢として御徒士に取立て武内庄十郎とて今に其の家あるよし。

龜井戸天神は、宰府（九州太宰府菅原道眞公）の御愛樹の枝

かた折れけるを安楽寺の弟切りて、是にて天神の像を見ながら、少しもたがわざるようにつくり侍りしに、靈夢兄弟にあり、笈負て東に下り立花出雲守下屋敷内、今の龜井戸にて安置し、其の頃本座ひらけ鎮守となるよし。ゆへに支配頭もなく寺社奉行直支配。宗旨は天台にて妻帶内食禄を無にするよし。正阿は古其の通りと申し、むつまじく所々にての咄し、我もゆかしく昔をききてはなし侍る。

正阿ゆかりのものは騎西町脇、正能村名主青木半右衛門、同人弟上清久村（久喜市上清久）戸ヶ崎喜左衛門、是は先日牛重村（騎西町）連にて当社へ太々神樂納めしよし。騎西町定四郎、種足村（騎西町）仁左衛門などみな知る人のよし。

甲州都留郡上吉田、壁谷由太夫正重云く。富士の神事古代より伝わりたるは、毎年七月二十一日祭のうた筋に、諏訪の宮御花やま□□神さそ神げにもそうろう。このことわかりかね、正阿にとふとて正阿また我に見あたる事もあり等ととふ。いかにも古雅なり、せんさくすべしと答ぶ。

その夜はまた、あるじと座をひかざる里人側人あまり多く、いろいろとひてうるさく待るゆへ

○

とかきてなぞなぞを出し

みなみなにひたいにしわをよせさせ、考えさせければ、側はみなたいくつして立ちぬ。あるじが三教一致を破らんも興なく、また夫に服すべきにもあらざれば、わざとなぞときなかさてやみぬ。

二十五日曉のころより月さえて、正阿と臥しながらかたりぬ。菊たいも目さめ狂（興）をそへ、起きてゆあみなどし、朝餉すみてあるじにいとまをつけ、辰のひとつばかりに立ちて下川田谷村（桶川市）狐塚高橋甚左衛門方へ行く。

是は我同門額田の河野権兵衛縁者にて、今は冷泉（御子左家）の藤原定家の流れを伝えた和歌の師範家の一の御門人なり、うたよみ侍るよし。すぐれず臥せ居るとて金即いたしもてなし、

是もうたに心をよせ、我よみしうた乞たきよし、短冊出しひたすら乞ゆへ、いなみがたく二首認め遣わし、いろいろもてなし

あり、またもいいて乞なりなりける。平助といふもの方へ立寄り、此村に頼みのむき申置く。荒井左知馬は、しんせちにはじめより我につきそへ側談のことども心そへ、此門の前よりわかれぬ。数馬ともにいとま遣わし待る。

夫より平方村（上尾市）清兵衛といへる名主、先年太々神樂

奉納、我国道にもしうしなれば立寄り訪ね待り、是より指扇（大宮市内）に出、帰り順のよし。

秋葉の神前を□通り、茶店に足を休め食事などして誰彼に宿に帰りぬ。留主中無事。

此度の心願の事もあらたかに、ととのふるべきよしなれば、物がたりきかせぬ。

卯月晦日萤狩のうた

梯の夫おしゃけつをと見えてともしびを

上たばかりに飛ぶほたるかな

浮草の清き流れにとぶほたる  
なみ間にうつる夕ぐれの頃

治臣

波の面は玉數ばかりももゆらに  
ゆたかにうつる螢火のかげ

見ぬ人につげて聞かせんむさし野の

河辺のほたる花もおよばじ

茂臣

水上をさしてむれつつ飛ぶほたる

おのれが影にうとまるるけれ

飛ぶほたる芦のうらてにかくれても

隠れぬものはみづの面影

赤沼村 島田吉兵衛口入

石川茂之丞

小普請 石川大三郎

本所横阿弥

本役付 塚田佐十郎

高橋喜平次  
町付 金場銀七

葛見権兵衛

下谷車坂下御徒士  
升賀翁

黒田伴次郎実父

右は彼同門

福富貴自在徳得 萬寿の

繁昌に普く免し□あらせたまへや

□子代□□御守

冷泉家の読人小野安藝守

# 文書にみる寺家の食生活について

者に冷酒を出す。

七日 (七種) 七種粥お祝い。

九日 (月次会) 初念佛講で冷酒を出す。  
\*講は毎月九日。

十六日 (初閻魔) 閻魔大王莊嚴。

廿四日 (御忌) 法然の忌日で法要。料理を出す。

二月午日 (初午) 小豆飯・菜けんちん・菜からしあえで祝う。

十五日 (涅槃会) 涅槃絵をかけ法要。村人から草餅上がる。

中旬 (彼岸)

廿四日 (鎮守祭礼) 法樂する。赤飯・煮染・酒で祝う。

三月三日 (上巳節句) 村人から切餅・うどん・ひし餅上がる。

寺院は真の意味の宗教的機能がうすれていくのである。  
そのようななか、近隣在方のみを信仰圏とする農村集落の寺家ではどのような食生活が営まれていたのか、年中行事と食の関わり方、日常の食生活について嘉永期以後の『白龍山日記録』より探つてみる。

白龍山林西寺は『新編武藏風土記稿』によると、平方村に位置し、淨土宗知恩院末で二十五石の御朱印を受け、末寺十二ヶ寺を持つ寺格の高い寺である。

○年中行事と晴れ食・行事食

日記録の中より毎年恒例により行われるものを持ち出した。  
暦は陰暦のまま、字句は原文にそつて使う。

春

正月元旦 (初勤行) 本堂・講堂で初勤行。諸神を押し居間で祝儀、お茶をいただく。雑煮御供養。参詣

六月中旬 (暑中伺) 参詣者から餅・素麺・菓子・野菜上

がる。

五月五日 (端午節句) 村人から切餅・ひし餅・小麦まんぢゅう上がる。

夏

四月八日 (灌仏会) 花御堂を作り、誕生仏に甘茶を注ぐ。

村人から草餅・餡餅・うどん上がる。

十五日 (結夏) 僧徒の修行のため法要。惣菜(竹の子けんちん)で斎をする。

がる。

下旬 (墓穀集) 麦・錢で集める。

廿八日 (解夏) 夏安居の終わりで法要。素麺・うどんで斎をする。

秋

七月七日 (七夕節句) 村人から餅・小麦まんぢゅう上がる。

十三日 (盂蘭盆会) 参詣者に酒・煮染 (牛蒡の重詰) 出す。

十四日 (棚経) 村人から切餅・あん餅・牡丹餅・小麦まんぢゅう上がる。

十五日 (施餓鬼会) 参詣者に白飯・酒・料理を出す。

九月九日 (重陽節句) 村人から赤飯上がる。

廿四日 (日待) 村人が念佛する。飯・野菜・酒で会食。村人から日待餅上がる。

冬

十月十四日 (御十夜) 御十夜につき法要。参詣者に小豆粥と煮染を出す。

下旬 (墓穀集) 粗・玄米・錢で集める。

十一月上旬 (寒伺) 参詣者から小豆・そば粉・さとう・菓子上がる。

十三日 (煤取)

廿五日 (餅搗) 搗きたての餅とさとうで汁子餅を作り、餅搗に来た人に酒と共に振る舞う。

餅搗に来た人に酒と共に振る舞う。

下旬 (節分) 豆打をする。

\*年により日が変わる。

以上の行事のほか授戒会・五重相伝・百万遍・飛射・法事・葬・開帳などの仏教行事や相撲興行・花見などの娯楽にも寺院は利用され、村人と深く関わっている。

#### ○寺家の食生活

農村部に位置する林西寺は、田は小作に出している。畠作は、自給自足で作られ、余剰は現金に換えられる。農作業は、下男・日雇・僧などにより、農事暦どおり営まれる。

春…牛蒡種まき・里芋種まき・藍種烟作り  
夏…藍植・菜種引・大豆まき・奥日大豆まき・小豆まき・茄子苗・木瓜苗・えんどう豆苗など植付・烟草取・菜種打・からし種打・小麦刈・菜種二番打

秋…藍刈・藍干・藍打・小麦打・大豆引・大豆打・藍二番刈・藍二番打・菜種まき支度・岡穂稻こき・からし種まき・畑うなひ・荏種刈・荏種打・挽割支度・みそ用小麦搗・糲ふかし

冬…小麦まき・菜植・菜間引・岡穂白挽・牛蒡堀・みそ作り・大根引・沢庵漬け・うどん粉挽・そば粉挽・里芋園い・米搗

以上の農作業を、気象、収穫量、土地利用、換金作物などを考慮にいれ、その年々に適当に組み合わせている。例えば、大豆引きの跡に菜種まきの支度をして菜種をまいたり、一時期麦畑に藍作りをし、二番刈りまで収穫したりしている。

これらの農作業から得られる食品のほか、現金購入した食

品・星上品・贈答品の食品が寺家の食生活を支えている。

基本食は、飯（粒食）・ごねもの（粉食）・餅でそれぞれ日常食・晴れ食に用いる。

食事の回数は、朝食・夕食に「昼食」「中食」の記述より、三回食が定着している。

食事の形態は、「飯・漬け物」「飯・汁・漬け物」「飯・汁」・「菜・漬け物」で、飯がごねもの（うどん・そば類）になつたりする。そして、それに酒がつくと接待用になる。酒がつくと酒核（酒の肴）が一～二品つく時もある。本膳形式では、「飯・汁・平・酒核（坪・硯蓋）」菓子二種が最上の晴れ食である。

飯……日常食は、米と挽割麦の様飯（カテメン）でその割合は定かではないが、米搗きの量から一人一日一・五合、二合の割と推測され、主食量を五・六合とすると麦七米三の割合であろうか。畠作地帯は麦を多く、米策地帯は米を多く入れるのが普通であるが、収穫量により混ぜ具合はさまざまである。

麦飯……麦のみの飯で、薬食いの目的で病人食として用いる。病気見舞いに、麦飯にとろろ汁をかけたものを用いる。江戸では、麦飯はまずく好まれず、海苔やとろろ汁をかけ用い。これは趣味的な食としてである。

茶飯……江戸期、茶飯とよぶものは四種ほどある。寺では接待用として、「茶飯と豆腐汁」「茶飯と酒」などの利用頻度が多い。多分、煎茶の煎じ汁に塩を少し加え、白米を炊いたものであろう。

白飯……白米だけの飯で接待用として使う。

こもくめし……江戸期、こもくめしは一種ほどある。「こもくめし」とあるところから、野菜類を米に合わせ炊いたものだろう。寺では接待用として用いる。

酢子……野菜の五目煮を酢飯に混ぜ合わせたものだろう。「すし」の記述はこれだけで、晴れ食にも出てこないのは酢が貴重であったからであろう。

赤飯……糯米を小豆の煮汁につけておき、蒸して作る。行事食に用いる。割合は、米五升に小豆一升五合、米七升に小豆二升である。『黑白精味集』によると、米一斗に小豆二升五合とあり、『和漢三才図会』によると、米一斗に小豆三升とする。小豆に薬効があるとか、赤い色は邪氣を払い厄除の力を持つとか信じられ赤飯を作るのであるが、おいしさの点から言えば糯米の多い方がよく、赤飯といえども小豆の多い様飯として米を省略している。混ぜ具合は、世間並みである。

小豆飯……粳米と小豆で作る。赤飯より手軽に出来るため、軽い行事食として用いる。

小豆粥……粳米五升に小豆一～二升入れ、粥にする。行事食として御十夜に用いる。

七種粥……青菜を入れ、塩で味をつけた粥であろう。

大角豆飯……粳米に大角豆を入れ作る。大角豆は、小豆よりも大きくて皮が破れずきれいに炊けるためよく用いる。

餅……餅は、最高の晴れ食で行事日や祝い日に必ず搗き、神仏に供える。正月・御忌・開山忌には、三・四升取りの備餅や鏡餅を作る。正月用の餅つきに来た者には、砂糖のきい

た汁子餅を振る舞い、普請上げや農作業仕上げには牡丹餅を出す。又村人は、祝日・農休日には餅をつき寺に呈上する。餅の呈上品が一番多い。

分類すると、

材料別	形態別	行事別
草餅	ひし餅	木綿坊餅
あん餅	切餅	日待餅
あんびん餅	牡丹餅	カビタリ餅
汁子餅	鏡餅	落餅
		寒餅
		備餅

\*あんびん餅・「あんびん」は「餡餅」の宋音で禪寺より起つた。あんびん餅は、餡餅餅となる。中の餡は塩餡である。

\*木綿坊餅・四月八日木綿種の蒔き時に作った餅。

\*日待餅・九月廿四日日待念仏の時の供養餅。

\*カビタリ餅・川浸り餅で十二月一日川の難を避けるためにつく餅。

\*落餅・一月の飛射の頃の餅。

大麦……麦搗きをして挽割にし、米に混ぜる。又蒸して

乾かし、炒つて粉にし、「こがし」として用いる。

小麦……粉にして「うどん」に用いる。又みそ用糀にする。うどんは、加工に手間取るために駆走として晴れ食に利用する。接待用として三月から九月頃まで使う。解夏の供養に欠か

せぬ食品である。

そば……そば粉を挽き手製のそばを作り、冬の接待用に使う。村人は正月にそばを作り、寺に呈上する。そばは救荒食として広く栽培されていた。

素麺……暑中伺いの品として上がり、解夏の供養に用いる。

汁……みそ汁・豆腐汁・とろろ汁・けんちん汁・すましの記述がある。みそ汁が日常食で、具は自家製野菜類である。豆腐を使う時は、接待用で豆腐汁と書いてある。とろろ汁は貴重な一品で、見舞い品や呈上品として届く。けんちん汁は禪寺より起こり仏事に欠かせぬ汁で、野菜・豆腐・あげ等を味噌や醤油で味を付けている。

調味料……味噌は自家製で、七月頃純用の小麦を搗き、糲を蒸かし、六日位するとあらまし花がつく。これを保存し、収穫した大豆と合わせ味噌を搾ぐ。糀四斗餘大豆四斗五升で三樽半の味噌を作る。みそ汁・みそ漬けとして使用する。この味噌は、小麦と大豆で作った辛口の「野田たまり」系で、「たまり」も採っていたものだろう。白味噌の利用もある。砂糖は、幕末になると国産砂糖がかなり普及するが、貴重品で「さとう買い求める」の記述がある。白砂糖の上物の三益・雪白など呈上品として上がる。醤油は買い求めたり、呈上品や味噌の「つまり」を使つていたものと思われる。酢・塩・胡麻・だし等の使用も文献からわかる。

野菜……野菜は、寺家の食事には欠かせぬ食品で、多くの蔬菜・さといも・大根・牛蒡を作っている。又村人が届ける

野菜類も多い。寺家で口にしている野菜類は、牛蒡・孟宗竹・蓮根・長芋（きね芋）・大角豆・金時豆・椎茸・白瓜・芋茎・百合根・茄子・生姜・冬瓜・さつまいも・奥白大豆・大豆・初茸・茗荷・小豆・うど・せり・くわい・木瓜・山菜・自然薯等である。又、初物を愛する風潮が田舎にも広まつており、「初物さきげ」「初たけのこ」「新しいも」と記述してある。漬物は、沢庵漬けとして大根二百本を漬ける。

果物……畑に柿の木を持つていて、それ以外、枇杷・柿・ぶどう・栗・梨子など木菓子の呈上品も多い。

菓子……村人は、農休日や祝日や小麦収穫後など小麦まんぢゅうを作り寺に呈上する。特に、僧が点心として普及させ、寺菓子として欠かせぬ羊羹や饅頭の利用が多い。他に、蒸菓子（餅菓子）・干菓子（落雁）・南蛮菓子（金平糖）等も利用する。化政期の頃より砂糖の普及と共に、菓子の発達はめざましいものがあり、仏前の供物として又、接待用菓菓子として多く用いられた。

その他……海苔・海藻品・白玉・庄内麸・野菜の味噌漬け・豆腐・こんにゃく・あげなど呈上品として寺に上がる。

茶……禪宗の僧の普及による茶を喫する習慣は、茶道や元旦に大福茶（硬茶に梅干一つを入れたもの。江戸後期になると番茶に梅干に変わる）を飲む風習になる。この寺家も正月用の番茶を買って、元旦に茶を喫する。茶飯や喫茶のため煎茶や番茶を利用する。多くの茶が寺に呈上品・贈答品として上がる。寺の畠の畔に茶の木を植えて自家用とする。

酒……寺では晴れの飲料である酒の利用が多く、行事

や接待に必ず用いる。一人当たり一合～三合位、冷酒を用意する。種類は、清酒（諸白）・甘酒（一夜酒）・焼酎（雑穀で作った酒）・美淋（本直し）である。酒と食べ物の組み合わせは、「飯と酒」「素麺と酒」「うどんと酒」「豆腐と酒」「酒核二種と酒」「酒核三種と茶飯と酒」饗應となると、「酒核三種と素麺と茶飯と酒」となる。古くは酒の添えものは飯で、時を経て添えものは海菜・山菜になり「酒菜（さかな）」という。それが「肴」「魚」に変化していく。寺では動物性のものを忌み嫌っていたので「酒の肴」とせず「酒核」としたのであろう。元来僧家の酒の肴は、梅干（塩梅）で梅には核（さね・たね）があり、酒の肴を酒核とよんだのであろう。肴核は、「さかな」と「くだもの」で御馳走の意味である。よって核二種といふのが、「梅干と沢庵」とか「梅干と煮豆」とか「豆腐ときんぴら」となる。文書の中の献立には「取肴」「酒の肴」など一般的に使われる言葉が一度も出て来ず、すべて「酒核」「核」で記されている。因みに、明治十二年の献立にも「肴」の字は出で来ない。そこで、他の二ヶ寺の安政期の文書の中の献立を調べてみると、食品は植物性食品を使っているが「酒の肴」「取肴」の文字がみられる。以上の点から、動物性食品を忌み嫌い「肴」という文字さえ使わないということとは、この寺の古さや格式の高さが推察できる。

以上、文書の中より使用食品を拾い出し検討してみた。

この寺は農村部にあり、宿（柏壁）より遠いため商品流通が困難で、宿近くの寺とは食生活に多少の差がある。しかし、化政期から普及する江戸名物の山本山の海苔・今坂の餅菓子・両

国園の茶・亀甲万の醤油・流山の美淋・吉原湯など、田舎にも入り込んでいる。又、江戸で流行つていた切手（商品券）商法もこの地であつたことが「豆腐切手七丁」という記述で知れ、寺が商品流通の最前線にいたことがわかる。

当時一般村人の食生活は、精進日（仏寺関係日）以外かなり自由で、鯉・えび・するめ・むきみ（飛射の献立より）等、神饌として用い、御下がりを口にしていたと思われる。一方、寺家では動物性食品は一切とらず、栄養的補給は豆類で満たして

いた。そのため豆の種類は、大角豆・大豆・奥白大豆・小豆・金時豆・隱元豆・豌豆など多く、味噌・煮豆・炒豆・餡・焼き込み・豆加工品などに利用している。特に、煮豆は座禪豆（佃煮風煮豆）として重詰や酒核に、豆腐やあげは、「コク」や「うまみ」を利用した汁や煮物に馳走として用いている。動物性蛋白質の不足する食生活の中で豆類の摂取は、蛋白質・脂質・ミネラルの補給源として理にかなっているのである。

又、沢庵漬や味噌漬は、野菜の固形分から濃縮された栄養素や、また糖や麩から移行するビタミンや有機酸を利用するため、寺家の食事には欠かすことが出来ない。

調理方法は、煮る・和えるが主で変化に乏しく、寺院より普及した煮染が晴れ食で、煮染める材料の多さが馳走となつてゐる。

生物を放生せよと唱えている。降つて中世になると、禅宗の移入で肉食排除の精進食が料理体系の一つに発達していくなか、フロイスは『日欧文化比較』の中で「僧家は外面には肉も魚も食べていないと公言しているが陰では食べている」と書いている。近世になると、在家仏教の普及とともに殺生禁断が徹底され、仏事に関して精進食が普及確立し、寺家はその範となるのである。

以上のような歴史的背景のもとで、宿より遠い農村圏の寺家は、寺本来の仕事以外、農家同様に自給自足で農作物の出来に一喜一憂する生活を送つてている。

食生活の内容は、一般民衆は「うまいものは食う」という嗜好で、動物性食品も口にする比較的自由な生活をしているが、寺家では戒律的強制のもとで、植物性食品の精進食のみ食している。しかし、人の出入りの多さから、貴重な食品や珍しい食品など食材の多様さは、一般民衆より豊かである。

また年中行事をとおしての食は、信仰や祈願的意味を中心にして、娛樂的因素と共に「人」の結集を強め融和をはかる意義があつたのである。

#### 参考文献

- \* 越谷市史 \* 春日部市史 \* 「歴史の中の米と肉」 原田信  
さて、日本史の中で仏教普及とともに、天武期の六七五年殺生肉食を禁じ、六七六年諸国に命じて放生させたのをはじめ肉食禁忌が広がつて行く。大乗仏教では、食肉戒と不救存亡戒で肉を食せば生命を断ち、殺生は自己の存在を否定するので
- \* 『和菓子の系譜』 中村孝也 \* 『祝いの食文化』 松下幸子 \* 『日本食物史』 足立 \* 『宗教歳時記』 五來重
- \* 『本朝食鑑』・『守貞漫稿』・『名飯部類』他多数

## 巷談「天下の大姓」

高橋 正輝

### 一、大姓と高橋族

私の苗字は「高橋である——」といって、別に自慢にするほど珍らしい氏姓でもない。まわりを見れば必ず見受けられるありふれたもので、「鈴木、佐藤」と並んで我が國の「天下の大姓」と称せられています。特に南関東の千葉、埼玉では鈴木氏と一、二位を争っています。私などが学校以来苗字で呼ばれるより、名前か、あだ名で呼ばれていました。今日でもお役所や病院で受付待ちをしている時、「苗字」で呼ばれると必ず四、五人の同姓の人々が立ち上り、お互に顔を見合せる事が度々です。

先日、A新聞のコラム欄に、「三田佳子さん（本姓高橋）の『遠き落日』の完成発表会での出来事がのつていました。開会直前で舞台の袖で時間待ちをしている時、遅ってきた監督さんに挨拶をして戻ろうとした御主人が、慣れない舞台の照明の光に方向を見失なって、マゴマゴしているのを見かねた三田さん、思わず胸にマイクがついているのを忘れて、「高橋サンこちら」と呼んでしまいました。一瞬ザワめいていた会場が静かになると共に、満員の客席のあちこちから、百数十人の人々が一斉に立ち上がって、三田さんに注目をしました。びっくりした三

田さん、思はず肩をつぼめて「ウフフー」と子しわらいをした様子に、喜んだ同姓族の「高橋サン」の大合唱に、緊張した場内は大爆笑。和やかな空気が流れ、お蔭で野口英世の母を演ずる熟演に久しぶりに、周りの人を気にすることなく涙を流すことが出来ました。この記事を読んで天下の大姓も満更でもないものだと改めて感じた次第です。

### 二、稻荷山鉄劍銘と上祖大彦命

話は変りますが、今日、北の三内丸山遺跡や、南の吉野ヶ里遺跡の発掘で空前の縄文文化の第三次考古学ブームが花開いて、現地は勿論、デパートの展覧会場でも連日万余の人々が押し寄せます。有様ですが、熱し易く、さめ易い日本人の特性で、戰後皇國史観から解放されて、東西の学会を二分して論争した「魏志倭人伝」邪馬台国第一考古学ブームや、二十年前に発見された古代王朝の華やかさを現出させ、全国民を感激させた、高松塚古墳や、実在性が問われていた太の安麻呂墓碑、更に二十世紀最大の発見とさわがれた「さきたま古墳稻荷山出土の辛亥銘鐵劍」で代表される古代史第二次考古学ブームなどは、学会の人々以外は口にする人もいない寂しい有様です。

さて日本最古の百十五文字が刻まれた金石文ですが、今、もう一度思い出して下さい。銘文は古代文字で刀の表裏に金象嵌で刻まれ、銘文を訓み下し文にすると、

辛亥の年七月中、記す。乎獲居臣（オワケオミ）上祖（かみつおや）、名意富比境（オホヒコ）。其兒、多加利足尼（タカラリストクネ）。其兒、名弓已加利獲居（テヨカリワケ）。其兒、

名多加波次獲居（タカハシワケ）。其兒、名多沙鬼獲居（タサキワケ）。其兒、名半豆比（ハテヒ）。

裏

其兒、名加差波余（カサハヤ）。其兒、名平獲居臣（オワケオミ）。世々杖刀人の首と為り、奉事し來り今に至る。獲加多支歎大王（ワカタケルオオキミ）の寺（やかた）、斯鬼（しき）の宮に在る時、吾、天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根原を記す也。

〔表〕

嘉成等七月中記乎獲居亘上祖名意

富比堵其兒多加利足尼真兒名立

巴加利獲居其兒名多加利獲居

其兒名多沙鬼獲居其兒名半豆比

〔裏〕

其兒名加差波余其兒名乎獲居亘世ニ為

杖刀人首奉東未至今獲加多支歎大

玉寺在斯鬼宮時吾左治天下令

作此百練利刀記吾奉東鬼也

私の注目するのは、前文中に記された乎獲居が先祖と記した七代の名前です。上祖意富比歎は良いとして、四代目の多加波次獲居です。稻荷山古墳の造成が五世紀から六世紀とすると、年代的に少し無理がありますが、学者の考證では在住地名称ではという説がありますので、それをとると「乎獲居臣」を始めとして、古墳に眠る主たちは、我が高橋族と血縁集団にあると想像しますと、何となく親みを感じます。

上祖意富比堵は、古事記、日本書紀に依りますと、孝元天皇

（第八代紀元前二〇八）の孝元七年の条に天皇ウツシコノ女の命を后とし、第一子大彦命、第二子稚大日命（九代の開化天皇）第三子彦太忍命を生ましむ、大彦命は「阿部、膳、阿閉臣、狹々城山君、筑紫の國造、越の國造、伊賀の國造、七氏の上祖也」とあります。更に崇神紀卷六（十代前九七〇前二九）十年九月九日天皇勅して四道將軍を定め、大彦命をして北陸に、長子武渟川命を東海に遣はし、印綬を授けて將軍とし、東国を征たしむべく十月朔日発向せしむとあります。これに依りますと、大彦命親子は、それぞれの道に住む豪族を従えて関東地方を平定するため各地を転戦した様で、これが景行紀の「日本武尊」伝説の原型となつたと思われます。古事記では、北の国境で親子が再会した地を、会津と名付けたと記されています。

征服した各地方には、一族を配置して支配した様で、東国の大豪族は大彦命を武神として尊敬し、自己の上祖として名のることを家の誇としたようです。中でも東国総（ふさ）国に第三子大稻起命が住み孫の六雁命の代では、関東の大半を手中にします。現在千葉千倉の高屋神社に祀られ、鯉料理の神事開きが有

稻荷山古墳出土鉄劍の銘文

名です。

### 三、始祖六雁命と膳大伴部

高橋族の始祖とされている六雁命は、大彦命の孫にあたり紀に登場してくるのは巻七景行紀（七一～百三十）の五十三年四月の条に、天皇吾小碓命（日本武尊）の平げし東國を巡らしむとして伊勢より東海に入り十月上総の国から海路淡の水門に渡らせ給ふ。磐鹿六雁命（イワカリムツカリ）、白蛤の胎作を供膳、天皇これを賞め、命の今までの功を嘉し膳大伴部を賜ふ。

また古事記では、大彦命の孫、磐鹿六雁命よく房總の地を治め力を得て、東国之地秩父、武藏を合せ十二ヶ国を平定し、諸国の産物、人奴を献上す。天皇その功をめで、諸国造の子一人を枕子とするを許す。天皇東国幸の時、諸國造共を随えて供奉す。上総浮島の宮（市川幕張？）にて、遠き秩父、武藏の国造を呼び寄せ供膳す。天皇、命に物部の連が掌する伴部より膳大伴部をとりて賜へり。また大伴の連のはきし大刀をとりて、命に授くとあり、六雁命は、膳氏となつて内膳司長官として大和国十市郡（奈良県橿原市膳天町と大和国添上郡高橋（天理市櫟町）を賜領した。また膳大伴部は宮廷の食事を調理する膳夫を資養すると共に必要とする産物を貢納するために全国に設置された部で、中央膳氏の指揮下にあつた。特に志摩、參河、遠江、駿河、甲斐、相模、武藏、房總、常陸の東国と石見、筑前、筑後、豊前、豊後、肥後の西國は、中央膳氏の直轄地とされていた。亦軍事指揮権も与えられて、近衛師団長としての任にもついていた。豊富な収入と各地に散在する多くの部民を擁し、急速に

新興貴族としての地位を得たものと思われます。稻荷山のオワケの臣が杖刀人首（親衛隊の隊長）として奉仕したこと、良く理解できます。

膳氏の台頭を記した「日本書紀」の項を拾い出して見ると、仁德紀（二九〇～三九九）に、膳氏の名が初めて登場し更に、履中紀三年（四〇二）の条に、膳臣余磯、花見の宴を司どりて天皇、后と舟遊の際、獻じた酒盃に桜の花びらが浮かぶを、天皇大いによろこび、膳余磯を若桜部と称し賞をあたえた。亦、堆略紀（四五六～四七九）八年甲辰（四六四）「任那、新羅を助けるため、膳臣班鳩を派す。高麗軍を奇襲により破り勝利す。安閑紀（五三一～五三九）四月、天皇東国に珍らしき真珠ありと聞き、「内膳卿」膳大麻呂に勅して獻上せしむ。大麻呂上総の伊甚国造に下命するも、国造稚若子の直、珠を惜しみて命に服さず、大麻呂怒りて国造ほかを捕えて誅すると共に伊甚国を廃し、皇后宮の領とす。（千葉県勝浦、夷隅郡）尚同地方には国造級の古墳は一ヶ所しか現在なし。尚都司として、春日部の黒主壳直を命ず、諸国の国造恐れ謹む。」と記されています。その外面白いものでは、欽明天皇六年（五四五）三月の条には膳臣巴提使（ハテヒ）（稻荷山銘文中の半弓比（ハテヒ）か？）遣百濟使となつて、任國中、同国内で人食虎が出没し、人々が恐れているの知り、たまたま幼児を喰へて山中に去るのを、雪中に残りし足跡をたどりて発見し、恐ることなく、虎に向ひ、左手で口を開き舌をつかみ、右手の刀でこれを殺し、皮をはいで持ち帰つたと後年の加藤清正も逃げだしそうな記事もある。其の外外交官としても同天皇三十一年（五七〇）膳臣大伴が饗

高麗使として越の国へ、また推古朝十八年（六一〇）迎任那客  
莊馬之長となつた膳臣傾子（聖德太子の妃となつた膳菩岐々美  
郎女（ホギキミのイラツメの父）を最後に悲運に向つて行きま  
す。

#### 四、上宮王家と膳氏

上宮王家とは聖德太子一家のことですが、聖德の尊称は八世  
紀後半に増名されたもので、書記には用明天皇と穴穂部の間人  
皇后との第一子で、キリストと共に馬小屋に生誕が縁があり、  
厩戸の豊聰耳皇子と呼びます。幼くして稀に見る英明で天皇に  
愛され、宮殿の南上の丘に大殿を建てられ居住せしめられたの  
で、上宮の皇子と呼ばれたのが始まりです。太子の悲運は父用  
明帝と十二才で死別し、更に穴穂部皇子、崇峻天皇の死と肉親  
に縁が薄く母后間人皇后の悲しい出来事に依り、天皇位につく  
ことが出来ず、伯母推古天皇の皇太子攝政で一生を終ります。  
一方太子は佛法を尊び理想国家建設に力を尽しますが、推古帝  
と蘇我氏、そして古代氏族の頑迷には大変困ったと思います。  
しかも心をいやすべき家庭は、政略結婚で、実家の誇を背に氣  
位の高い妃と一緒にでは悩み深い日常であつたと同情します。  
上宮法王帝説や太子伝暦に依ると、太子には四人の妃が記され  
ています。

第一妃に、膳臣傾子（カタブコ）の娘、菩岐々美（ホギキミ）

長女春米女王（山背大兄王子妃）外七子を生む

第二妃に、蘇茂馬子の娘、刀自古郎女（トジコノイラツメ）

長子山背大兄王（異母妹春米女王と結婚）外三子。

第三妃に、尾張王の娘、橘大郎女（推古天皇の孫）

白髮王外一子

外に正妃として推古天皇の皇女貞鯛皇女（カイダコ）

この方は太子より大分年上で、早く亡くなります。

これで見ると身分の低い妃が先に記してあるのが異常に思わ  
れます。膳妃は、太子が恋した女性で、當時の身分制のやかま  
しい時、群臣の反対を押して正式に妃としたという今の皇室以  
上の出来事であった様です。太子伝記では、膳妃少莊の時、紺  
の衣服を着、高橋の丘に遊ぶ、太子橘の宮居より還り給ふ時御  
覽になり、召して妃となし給ふ。世の人「せりつみ妃と称す」  
太子が他の妃と異つて、一緒に生活をしていた位ですから膳  
妃は美しいだけではなく、かしこく、外交官の父のお蔭で、国  
際感覚をもつた、新しい考え方をもつ人で、太子との話が合つて  
いたのかも知れません。また中級貴族であつた為か心優しく、  
世間から身を隠してひっそりと中宮寺で暮している母后間人皇  
后とも大変打解けて仲の良い関係であった事も、孝心の厚い太  
子にとって心安まることであつたのでしょうか。推古天皇十八年  
十月の「伝略」の条には、「吾得汝者我之幸也。我死之日同穴  
共埋」といわれると妃は「殿下思深、庸妾侍寢、當千秋万歳、  
如磐石如大岳、朝夕供奉妾福足矣」と答えたと記され、相愛の  
深さは同穴約した事で示されている。しかもこの事がやがて推  
古二十九年十二月二十二日、間人母后が、太子と膳妃に看られ  
て、亡くなりります。太子は自ら柩を負つて葬りますが、三十年  
二月二十一日、膳妃は、看病づかれと、病で亡くなりますが、続  
いて、翌二十二日太子も同じ床で亡くなってしまいます。山背

大兄王子や、子供の手で「磯長の御陵に、中央に母后間人皇后、右に太子、左に膳妃と三体ならんで葬られています。

政治の中心であった太子の死に依って、政局は激動し、推古天皇も三年後崩御されると、天皇位をめぐつてのあらそいが始まっています。この荒波の中に上宮王家も呑みこまれてしまいます。

## 五、高橋氏の登場

太子亡きあとその統領となるのは、いうまでもなく蘇我氏の血を引く山背大兄の王子である。そしてその妃は「法王帝説」によると、膳ホギキミ妃の長女春米女王だとある。つまり異腹の兄妹で結婚したわけである。当時は性に対しても異なりゆるやかで同母兄妹でなければ許されていた。この夫婦は當時珍らしく、一夫一婦で、仲が良く子女七人を生んだと「補欠記」に書かれている。しかし好事魔多しの諺どおり、皇位争いが因で蘇我の人鹿の野望による反逆によって、一族二十三王女全員が班鳩宮で自殺してしまう悲劇となります。膳氏も主家の姻族として、一度は秦氏と共に皇子に東国旗上げを上申しますが、皇子の父太子の仏法の教えに依る争いの無を守る心の固い意志に、膳氏一族も上官王家に殉じ、全員火中に消えて行きました。

ここで膳大伴部の部民達も、宗家を失い、蘇我氏や他豪族に吸収されるか、一般土民となって散つて行きます。其後歴史の中に再登場してくるのは、天智天皇の死に依つて起る大友の皇子と天智帝の皇弟大海人皇子との「壬申の乱」になります。この戦には、大和に散つていた膳氏の遺族が、高橋の里に身をひ

そめていた、膳摩漏を統領として、兵力の少きを歎いていた大海人皇子の許に参じ、天武朝確立の礎となる功をたてます。天武天皇より、膳の臣の位と膳大伴部の復活を賜ります。更に天武十一年、膳臣摩漏病を得て七月十七日卒する時、天皇悲しみて、壬申の功を以つて「大紫の位と封を贈られました。」やがて大化革新の総仕上の官制の確立で、創氏八姓が作られ天武十三年（六八四）勅によって、各臣姓の者、五十三氏がそれぞれの地位に任せられますが、特に膳臣国益に対し「真人天皇（謚名天武）十三年「改ニ膳臣一賜ニ高橋朝臣」と勅される光栄に浴します。これ以後膳臣一族及び全国の膳大伴部の部民は、高橋の姓に改姓し今日の様な天下の大姓の原因となつたものと思われます。しかし内膳奉膳司に復したもの、失職中に任せられていた安曇氏が奉膳の引き継ぎをせず（神事や諸儀式の供膳）そのため数十年に亘つて争います。最後には天皇の審判決によって、高橋朝臣が勝ち、これを不服とした安曇宿禰は職務を放棄し出仕せず天皇の怒りにふれ佐渡ヶ島に流罪となり一族は信州の領地に追放される処分を受けます。これで高橋氏は内膳奉膳の地位を独占します。現在古代氏姓の原典とされている、嵯峨天皇弘仁五年に作られた「新撰姓氏録」（八一四年）の中に高橋氏文として延暦八年奉上の家記と安曇氏との争いが記されています。それによると靈龜二年（七一六）十二月の神今食の日に典膳奉膳の司高橋朝臣乎具須比（オグスピ）が前奉膳の安曇宿禰と争論し、宝亀六年（七七五）高橋朝臣波麻呂と安曇の宿禰広吉と争つて、遂に、延暦八年（七八九）朝廷は両家に家記を提出させ、「日本書記」と照合の上、高橋氏が長

官であり、安曇氏はその下にある事を裁定、安曇の繼友勅裁に「背き之罰す」しかし榮華は短く時代の流れは、大化前代と異なり律令の施行に依り軍事内政とも藤原氏の独占となり、議定に列する事も出来ず、宮廷の内臣としての地位となつて、歴史の中に埋没してしまいます。しかし、全国に住む、一族や、部民達は、高橋氏を誇りとして、各地に定住したのが表題の「天下の大姓」として現在に及んでいるのではないでしょうか。

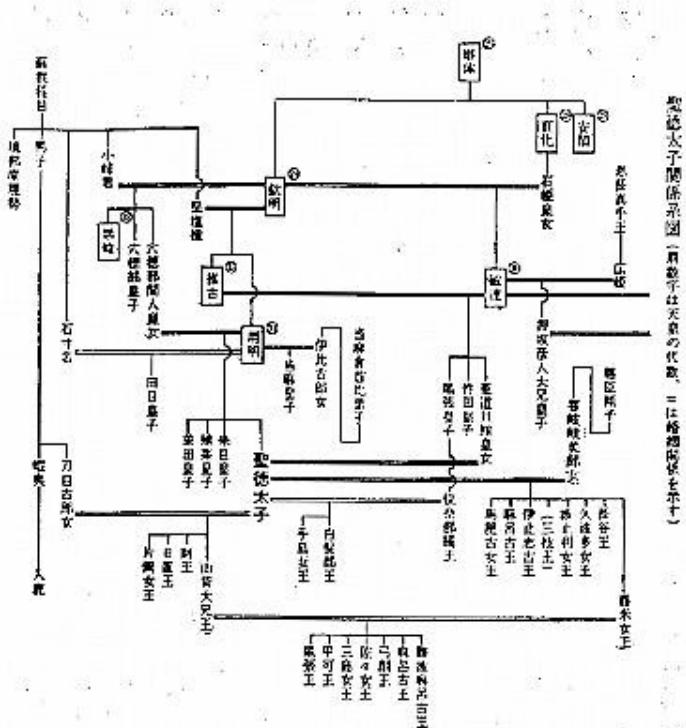
注一、関東に於ける高橋氏の本流は膳臣流であり、北関東地方では物部氏流と称されているが、物部氏の祖の妹が考元天皇の后となつて大彦命を生み、その孫の六雁の命が、血族として物部氏の膳大伴部を賜つたのであり、特に異流とは考えられない。また神官流として、水川神社の宮司西角井氏が、成務朝の時の武藏国造となつた。エタモヒの命の子孫として高橋氏を称した系図を持っているが、考古学者の調査で八世紀頃の条が混同して誤りが多く、後年の偽作ではないか?と疑問視されている。

注二、間人の皇后の名は同年代に二つあり、其の一は聖徳太子の母穴穂部の間人皇后で其の二是孝徳帝の后間人皇后（中大兄皇子後の天智天皇の同母妹）である。日本書記では特に此の二方を間人と称したのは、暗にその当時の性のタブーを破つたことを非難したもので、穴穂部の皇后は、用明天皇亡き後、異緒子、聖徳太子の庶兄田目皇子との間に子をなした為當時としては世間から非難され、特に從姉妹であるライバルの推古帝（敏達天皇妃）が、このスキャンダルを許さなかつた（自分の子竹田の皇子を次期天皇位につかせたい心から、しかし同皇子は若くして亡くなつた為甥の聖徳太子を頼みにした）また孝徳天皇

の后である間人皇后は、同母兄中兄の大兄皇子との深い関係が問題視され（孝徳天皇の難波宮から兄大兄皇子と一緒に夫を捨てて奈良に帰ります）。孝徳天皇はこれを歎いて亡くなります。なかつげず、皇太子として長くなつたとされています。

當時は、叔父と姪、伯母と甥、異母兄妹の間の結婚は許されていた。但し同母兄妹や子との結婚はタブーであつた。

講談師、見てきたように嘘を言い、故事虚実相交え乍らの長講一席、お耳障りの条御許し頂きまして、「エ——お後が宜しいようで——」。九拜



# 国学者平田篤胤の江戸退去

(一) 篤胤江戸退去の経緯

## 平川陽三

あらすじ

篤胤は二〇歳の時『正月の八日に家を出た者は再び帰らず』との諺に倣い、秋田を後にし江戸へ出て、精進を重ね当代屈指の国学者と称されるようになつた。

六六歳の正月元旦、秋田藩に『篤胤儀、國許へ差し遣わせ』との幕命が下されたことを知らされ、学者としての活動の地江戸を追われ、著述を禁止された篤胤は秋田へ戻る。

『江戸退去』は、曾ての親友伴信友及び同門「錦屋」一門であるが、反篤胤派の巨頭村田春門らの讒訴に因るものであると信友、春門を懲りし六八歳の生涯を終える。

国学と平田篤胤

国学である。国学者本居宣長は、ものごとに真心をもつて接すれば「もののあわれ」をしがができる。この「もののあわれ」のような日本の美しさが日本の古き道の価値基準である。

神々と天皇もそういう基準の上で賛美される。革命による天朝交替という儒教的な基準を持ち込んではならないのである。この宣長の日本の美しさの賛美を、極めて政治主義的に發展させたのが平田篤胤である。



平田篤胤肖像

(平田篤胤氏蔵)

天保十二年（西暦一八四一年）正月十一日、篤胤おりせ夫妻は、まだ、お屠蘇氣分のさめやらぬ江戸を追われるよう後に後に入った。篤胤六六歳、おりせは五〇歳を迎えていた。

二〇歳の時、『正月の八日家を出た者は再び帰らず』という諺に倣い、銭五〇〇文を持って佐竹藩を脱藩し、艱難辛苦今当代屈指の国学者といわれ、門人も四八二人を数えるようになつた篤胤にとつては、無念の旅立ちであつた。

おりせにとつても、最初の妻（織瀬）を亡くし、二度目の妻（お岩）とは別れ、子供を抱えた四三歳の貧乏学者篤胤の許に嫁ぎ、内助を重ね、やつと得た江戸の安定した生活を捨てて見知らぬ土地秋田に赴かなければならぬは、心細いことであつた。

事の次第は、暮れもおし迫った前年の十二月末日、佐竹藩留守居役が、幕府老中に呼ばれ

平田大角（篤胤の号）

右の者早々國許へ差し遣わせらるべく候事なる書き付けを手交され、口頭で「右大角儀、これまで著述書數多くこれある由、以来差止め申さるべき事」と告げられた。そしてこの幕命は、翌正月の元旦、篤胤に告げられ、慌ただしい秋出への旅立ちとなつた。

× × ×

戦前の研究書では、篤胤江戸退去の理由を、しばしば（たとえば山田孝雄『平田篤胤』）国学、殊に平田学の方向を反徳川体制と規定し、これと王政復古・明治維新をストレートに結びつけ、彼の著述と講説が江戸幕府の安全を脅かしたからであるとされているが、……事実は……。

（二）篤胤の生い立ち

篤胤は、安永五年（一七七六）、出羽国（秋田県）秋田郡久保田（現在の秋田市）で生まれた。幼名は正吉、父は秋田藩祿高百石大番組頭大和田清兵衛祚胤、その第四子である。先に述べたように、二〇歳のとき脱藩して江戸に出た。

後年、義子鐵船宛ての書状で「そもそも我等身の上を幼少より思惟するに、生まれ落つるより父母の手に育てられず、二〇になる正月の八日に、かねて五〇〇文こしらいおきたる銭をもつて、書き置きして欠席し江戸へ出たが、寄る辺なく、とんだ

難儀せしことは、かねて話の通り也」と述べているが、篤胤が何故、江戸へ出府をしなければならなかつたのか、その事情については定かでない。

江戸へ出た篤胤がどのような生活をしていたかについては『大堅君御代略記』（以下『略記』）という。に次のように述べられている。

「ただ正義博学の良師を得んとして、諸所遊学して試み給い或るいは学事のため使われ、或は細口のために人に雇われ、又主取りもしてうち過ごし給えること、およそ四、五年、その間の辛苦艱難、云うべきようになかりきと、後に御自ら語り給えり、外に記録なき故に、その御履歴委しく知ることあたわづ」  
「このような苦しい生活が続いた後、寛政十二年（一八〇〇）篤胤二五歳の時、備中松山藩主板倉周防守に見い出され、家臣江戸定府祿高五〇石平田藤兵衛篤穂の養嗣子となり、江戸において生活の安定をやつと得ることができた。  
そして翌年享和元年最初の妻織瀬と結婚した。

（三）篤胤の夫人と子供

一番目の夫人織瀬は、駿河沼津藩水野忠友の家臣石橋宇右衛門常房の娘、文化九年（一八一二）、結婚以来十一年三歳で、貧困の暮らしの中で病死した。情熱的な篤胤がこの人をいかに愛したかは、この年書きあげた『靈の真樹』で、自分はどこで死んでも、魂は必ず師宣長のところに、「今年先立てる妻を」伴つていくといい、さらにそれに付記して、「かくい

うをあやしむ人の有べかむれど、あわれ此の女よ、予が道の学びを助成せる巧のこゝろありて、その勞より病発りて死ぬればかくの如くはいうなり」と述べていることから知られる。

二番目の夫人お岩は易者橋爪四郎の妹で、文政元年（一八一八）に結婚したが四ヵ月程で離婚している。

三番目の夫人として、篤胤は越谷の「とうふや」の娘を門人山崎篤利の世話を迎えている。文政元年十一月十八日、お岩と離婚した直後である。山崎篤利は越谷の富商で、この女性の親代わりを務めた。この結婚を境に篤利の援助で、平田家の経済は著しく改善された。また篤胤の著書の出版についても、篤利は大いに貢献していると伝えられている。

ここで気になるのは、この夫人が篤胤との結婚後「おりせ」と呼ばれていることである。夫人は寛政四年ころの生まれといわれ、結婚前の名は不詳である。この夫人が「おりせ」と名づけられたのは、篤胤の求め（博徒清水次郎長は、亡くなつた先妻の名で後妻を呼んだそうだが……）からであろうか、利発者であつたといわれているこの夫人が「織瀬」でなく「おりせ」と名づけてくれと求めたからであろうか。

おりせは、終生の伴侣として篤胤に仕えたが、没年は不明である。

織瀬との間の子「千枝」は、篤胤にとつて、唯一の子である。彼女は後に「おてう」と改名し、文政七年に碧川篤真（篤胤と改む）を婿養子として迎える。晩年母の名を継いで織瀬と改め明治二年（一八八八）三月、八四歳で没した。

なお篤胤と織瀬の間には、千枝の外に男の子二人いたが、いずれも早世している。

#### （四）篤胤と本居宣長との出会い

篤胤は最初の妻織瀬と結婚した享和元年（一八〇一）（宣長この年の九月に死去）ころ、宣長の著書を読み深い感動を覚え古道の学に志したようである。「略記」の享和元年の項に「今年初めて歸屋大人の著書を見て、大きに古学（古道の学）の志を起し、同七月松坂に名簿を捧げ給う」と記されている。

篤胤がはじめて宣長の名を知り古学に入ったのは、享和三年であるともいわれている。この根拠としては、文化四年（一八〇七）三月十六日付け、出羽国神職大友直枝あての篤胤自筆書簡に「自分は宣長死去の翌々年に、はじめて本居宣長の名を知り古典の学（古学）に入った」と記されていることがあげられている。

篤胤は、公開の場では、享和元年に宣長の著書を読み古道の学に入つたといい、品川で宣長に対面した夢をみたり夢中入門」といい、これを絵に描かせて、春庭に送つて譲を求めている。いずれにしても篤胤は、宣長の著書に接して触発され、それに傾倒し、自身を宣長の教え（注）を受け継ぐものと考え、宣長と自身の間には幽契のつながりがあると信じたようである。「靈の真柱」で次のよう述べている。

「さて、この身死りたらん後に、わが魂の往方は、疾く定めおかげり、そは何處にというに亡骸は何處の土になりぬるとも魂は

翁の許にゆかん、今年先立てる要をも供ひ、直ちに翔りものにして、翁の御前に侍り居り、世に居るほどは息らん歌の教えを承け賜わり、春は翁の植えおかしゝ花をともども見楽しみ夏は青山、秋は黄葉も月も見ん、冬は雪見て長閑やかに、常永久に侍らなん」。

このように、篠原が宣長の門人たることは、靈的な眞実、彼の信念であつた。しかし現世における篠原と宣長の対面はなかつた。



「宣長と篠原の夢中対面の図」上部の質は本居宣長のもの。(東大史料編纂所蔵)

(注)

宣長のいう道は、記紀二典に記された神代のもろもろの事跡の上にそなわる事実であり、儒教や仏教でいう教え、規範とは異なる。それ故にこそ、道は真心によるならば、自然に知られるものであるとともに、また真心に帰らなければ知ることが出来ないのである。

× × × × ×  
がくもんして道をまずしらしむるならば、漢意をきよ  
くのぞきさるべし(『玉勝間』)。

× × × ×

後世人の心から漢意を取り去つたものが、人の真心であり、もののあわれを知る心である。この心に立ち返つて、すなはち後世の説にかかわることなく、直に記紀二典(ただし紀は唐籍にならつて漢文で書かれたものであるから、いにしえからの伝説のままに書かれた記こそが道を知る第一の古典である)についてみると、きいにしえの道が知られるというのである。

この学問が古典である。

このような手続を通して知ることができる宣長が知つた道とは何か。

× × × ×

そもそも此の道はいかなる道ぞと尋ねるに、天地のおづからの道にもあらず、人の作れる道にもあらず、此の道はしも、可畏きや高御産瀬日神の御靈によりて、禊祖伊邪那岐大神・伊邪那美大神の始めたまいて、天照大御神の受けたまいたまちたまい、伝え賜う道なり、故て

以つて神の道とは申すぞかし（『直隸鑑』）。

### （五）儒教・仏教と宣長の国学

日本史の各時代の中では、江戸時代は儒教が最も盛んであつた。徳川幕府が儒教を体制教学として採用していたからである。しかし江戸時代後期、儒教と現実社会のずれ、儒教と日本の伝統のずれが意識されるようになつた。この儒教に対する抵抗として、国学が出てくる。日本固有の学問という意味である。その中身には二つの流れがある。

一つは、大和言葉の学問である。日本では、文字としてまず漢字が使われたため、純粹の大和言葉の復原が難しくなつていて、『古事記』などの古典から注意深く純粹な日本語を取り出し、体系化することはできないだろうか。こう考え、その研究を進めて、その仕事を完成させたのが、本居宣長の『古事記伝』である。



本居宣長画像

いま一つの流れは眞の日本的価値とは、何かを問いつめていく方法である。これは復古神道と結びついた。

わが国で価値判断の基準になつてゐる思想は、大きく分けて三つある。儒・仏・神である。この三つが複雑に混じり合つて

いる。

儒教は、元来が中国の学問であり、中国社会の中から生み出されたという特性を持つてゐる。

仏教はインドを離れて、信仰としては、神道より仏教の方が日本庶民の生活に深く溶け込んでいる。その証拠に、神仏習合は本地垂迹説となつてゐる。仏が本地で神々は垂迹なのである。すなわち民衆を救うために、仏が仮に神の姿をして、この世に現出しているというのだから、仏の方が神より位が上である。

この関係を逆転させようとしたのが、復古神道である。

日本古來の信仰は神道であるから、神仏習合以前の神道を取り戻さなければならないと主張する。この場合よりどころとなるのは『古事記』である。本居宣長の『古事記伝』は重要な役割を果たす。『古事記伝』は言葉の研究であると同時に強烈な日本精神鼓舞の書物である。

本居宣長に先行する国学者として、賀茂真淵がいる。

真淵は神官の家に生まれて歌道を志し、歌から言葉の問題を通じて国学に新境地を開いた人である。そして歌の弟子でなく国学の弟子だといふのは、真淵が伊勢参りの途中、松坂に立ち寄つた際、一晩語り明かしただけの宣長である。

宣長は真淵が『万葉集』でやつていた言葉の研究を、『古事記』でもつと大がかりにおこなつた。

宣長は、伊勢の商人の家に生まれたが、生家が没落したので京都で医者の修業をした。松坂に戻ると医者のかたわら国学の研究に勤み、書斎を「鉛屋」と名付けた。

宣長の研究の根柢には、日本の古きものの美しさに対する絶対的な信仰がある。「ものがあわれ」のような日本的美しさが価値基準である。神々と天皇も、そういう基準の上で賛美される。革命による天朝交替という宗教的な基準を持ち込んではならないのである。

宣長の日本的な美しさの贊美を、きわめて政治主義的に発展させたのが平田篤胤である。

#### (六) 国学者篤胤の足跡

篤胤は享和三年、儒学者太宰春台が『弁道書』をもつて「眞の道は、堯舜の道であり、天下国家はこの聖人の道をおいては一日も治まらぬこと、聖人の道が伝わらぬ以前は、わが国には道がなかつた」と論じたことに対し、これに反論して『呵妄舌』を著わした。これは篤胤にとってはじめての著作である。この中で、篤胤は次のような史観を述べている。皇國は天地初發の時から、儒仏の教えの渡来以前から、穂やかに治まっていたが、その事がすなわち眞の道が具わっていたということである。この道は他の儒仏の道のように人作りのそれではなく、天地初發において皇神たちによってはじめられた事実をいう。瓊杵尊の天國の際の神勅にいわれているようにこの国は永遠に皇孫→天皇が支配統治すべきことを根本とする

のであつて、わが国ではこの本質に従つて今にいたるまで君臣の別が明確に保たれていることが、眞の道の存した明証である。神道とはこの道をいうのであつて、それ故に聖人の教え・道をしきりに説く儒教の祖国中国と比較すれば、皇国及び皇国の優れていることはいうまでもない。その道の本質から当然考えられるように、統治の制度(後世の官職に当たるもの)は神代以来存していたのであるから、聖德太子がこれを制作したというわけでなく、ただ漢風に文飾したというだけである。

中國では「神」という言葉は現象の靈妙なるを説明するときに用いられるにすぎないが、神道で神というのは記紀の神代卷にみえる諸々の神々、実在の神をいうのであり、この神々の御所<sup>所</sup>は靈妙不可思議であるから、ただ畏れ敬つてうけとるはかないのである。これ天地の初發以来のことは、今としてはただだ古伝によつてしか知ることはできない。そうして正しい伝説は皇國にのみ伝わつたのであるから、それ以外の方法一例えば人間のこちたき(「煩わしい」というような意)智慧を本する儒教の窮理一によつては当然知ることができない。だから儒教でいう天道・天命なども、わが国における実在の祖神の託言・命令とはちがつて、仮りに上帝・皇天などと称して号令を出し民心を一定せしめ、罪ある者を伐ち、または逆臣どもが君を弑して國を奪いとるためには、愚民を欺くための空言である。篤胤としては、この書を著わしたことによつて、国学者として世に立つ自信を得たのであろう。翌文化元年、彼は「眞言乃屋」と号して、弟子をとつて講義を開いている。

その後学者として篤胤は、研究と著作に勤み『神鬼論』

『古道大意』、『俗神道大意』、『漢学大意（西籍概論）』、『仏道大意（出定笑語）』、『医道大意（志都の石屋）』、『歌道大意』、『雲の真柱』、『悟道弁』、『三大考弁々』、『古史成文』、『古史徵』等々を著わしたが、宣長の言葉の研究面を必ずしも受け継がず、むしろ日本至上主義の面を極限にまで發展させ、天地創造神話により日本が世界万國の祖國だという解釈を引き出し、日本と他国とを、尊嚴の差、善惡の差でとらえ、日本絶対優越論を唱えた。

篤胤の国学は、篤胤の死後、幕末の尊王攘夷運動を支える巨大な支柱となつた。

なお篤胤の著作活動は、『略記』によれば、その数は著述の書、凡百余部、巻数千巻に近かるべし」とある。

#### （七）篤胤と儒学者・『鈴屋』一門

##### 儒学者の篤胤観

##### 幕府の諮詢に対する林述斎の答申

儒学者藤田東湖が、会沢正志斎宛てた書簡

（天保五年三月二九日付け）

天保五年ころ、「平田国学は儒道・佛道・神道をそしり独自の見解をおしたてて、世人を欺くものである」と幕府に申し出た者があり、幕府はこのことについて、林大学頭に諮詢したことがある。

これに対する回答は天保五年六月になされ、その中で述斎は次のように述べている。

「一体大角身分は板倉阿波守家来にて、暇を取り、阿波守を立ち去り、當時尾張殿の威勢をかり、人を欺き手段と相聞こえ申し候」。

「但し尾張殿扶助致し置かれ候ては、何んとなく公儀へも響き合い、それに依りて心得違い、いよいよ欺かれ候者もこの後多く出来申すべし儀に付、尾張殿家老へ、扶持取り放ち申し付けられて然るべき旨の御座候は々（注）、年來大角巧み候深意も遠い、世上にても、自ら取用候者薄らぎ、世の妨げ人の害と相成るべきほどの事も出来間敷と存じ奉り候」。

「其著述は一時を欺き候迄にて、後年に至り候ては、誰有りて看跋仕り候者もこれ無く、遂には反故と相成り申すべし事頗然に御座候あいだ、絶版の御沙汰には及ぶ申す間敷哉に御座候」

（注）篤胤は、天保五年一月一〇日、尾張藩から給せられていた三扶持を召し上げられた。

「平田大角なる者は奇男子に御座候。野生も近来往来仕り候處、其怪妄浮説にはこまり申し候へども氣概には感服仕り候……三大考（注）を元にいたし附会の説をまじめに弁じるはあきれ申し候えども、神道を天下に明にせんと欲し、今以つて日夜力学者述の繕は千巻に踰候気根凡人には御座無く候、去り乍ら奇僻の見は最早牢固として破るべからず候、憾むべし」

(注) 三大考 服部中庸の著作

記紀の天地開闢説についての宣長の解釈をこえて新説を主張したものである。ここで、中庸は

『古事記』の記載によつて開闢のはじめの混沌たる原質から日・泉(月)・地が次第に形成されていった経過(はじめは一つのものであつたが、次第に三つの部分に区分されていき、ついに三つの部分に分離する)およびそれら太陽・地球・月の運行、さらにそれ

ぞの主催者が天照大御神・月読命・皇御孫尊であることなどを、一〇箇の図解によつて説明している。

このなかで部分的に注意すべきことは、月読命は須佐之男命であると断定したことや、其の研究の結果

へ地は円く空に浮かび、日月は其の上下にめぐる)から、わが古伝にいうところと同じであるとして西洋の学問に親近感を示し、地動説を肯定している。

宣長の養嗣子本居大平は『三大考』を師の説と異なるとして、『三大考弁』なる書をもつて非難攻撃した。これに対し鷲胤は、『三大考弁々』なる書をもつて『三大考』を肯定して応戦した。

鷲胤は、天保五年十一月、藤田東湖に内願書を送つて

どくに神祇式の取調べにつき、「御史館御出入り、右御用仰せ付けられ下し置かれ候はば、多年丹誠仕り候規模相頗れ、本懷此の上なく有難き仕合せ存じ奉るべく候」と、史館に採用されたいと申し出、さらに翌年正月、屋代弘賢の名義で鷲胤推挙の口上書を東湖に送つたが、水戸藩側から返事はなく

同六年十月、再び、屋代の名ではじめに鷲胤を取り次いだ水戸家の用人鶴殿平七あてに願書を出したが返事に接せず、このことは無効に終つてゐる。

これら的事実からもわかるように、体制教学の儒学者からは「鷲胤の著作は後世だれ一人からも頼みられないだろう」また「學問に対する彼の真摯な態度惜しむべし、されど彼の奇僻詭弁には困つたものだ」と黙殺されていたようだ。

#### 『鈴屋』一門の鷲胤親

鷲胤は文政六年七月二二日から十一月十九日まで、上京をかねて関西旅行をしている。

上京した鷲胤に対する『鈴屋』一門は服部中庸の『三大考』及び『三大考』を敷衍したものといわれている鷲胤の『盡の真柱』をめぐつて、一門の中で論争があつたという経緯もあり鷲胤を賞揚するものと排斥するものとの二派に分かれていた。

親鷲胤派の代表は服部中庸であり、反鷲胤派の代表は京都の城戸千鶴、また後に老中水野忠邦に迎えられ、国学・歌文の師となり、鷲胤江戸追放について、重要な役割をはたすことになる大坂の一柳(村田)春門らであった。

二派は、それぞれ意見を宗家の本居大平に送つていて

親鷲胤派の中庸は、大平宛の書簡の中で、鷲胤と対面した感想を述べ、また鷲胤上京に対する鈴門の動向を報じている。「……大江戸の平田鷲胤上京と申し参り候に付き初めて対面仕り、初めて大道の議論に及び候處、その弁舌流れるが如く

世の中広しと云えども、その高才万人に勝れ、大人（宣長）亡き後かくの如き人物未だ見聞に及ばず、先師のお弟子大兄春庭翁をはじめ五百余人これあり候えども、篤胤に及ぶべき一人も御座無く候」。

「扱て篤胤事、京都鐸の屋に集まる蠅声蟲の子等は、その才学の高きを妬み憎しみ、自己の不才短学を包て一人も出でずこの頭取は千楯也」。

反篤胤派の千楯は、大平宛の書簡の中で、篤胤の人柄と篤胤の夢中入門について、次のように述べている。

「彼の人は学大いに出来候人にて当時の学者也、その學問の趣は故大人の見識とは大いに相違の處ある趣也、實に我国の古言の趣を得ぬ人也、諸書を我ものにして自由に理屈を付けるは得たる人也、さればそれを實にとりて見ればいかに考うれども皆虚也」。

「先ず最初の夢中に門人成りしと申され候一事にても、小子は不得心に御座候、本人の口より申され候故、嘘やら誠やら相分かり申さず、實に夢中故大人許容ありし事ならば、小子にも故

大人より夢中に平田は御弟子に相違なき趣告げさせ給う迄は、小子は同門とは決して承知仕らず候」。

この関西旅行の折、篤胤は、宣長の養嗣子本居大平も訪ねている。

篤胤と大平の間には、服部中庸の『三大者』について意見を異にし、論戦したといふ経緯があつたが、大平が温厚な人柄であつたこともあり、篤胤は暖かく迎えられ、大平から宣長の肖像画と、宣長が生前同じ木から三つ造つたといわれている

靈牌のうちの一つを贈られている。

篤胤は靈牌を贈られたことについて、「元より三つ造り置き給えりしは、（宣長と）幽契ありし事にや、とぞ思わるゝか」と語つてゐる。

この靈牌は笏の形をしたもので、他の二つは宣長の靈代として春庭、大平の許にそれぞれ置かれているものである。

また文化十年篤胤が宣長の門人と称して『盡の真柱』を世に出した際、鈴門内部に動搖が起り、諸國の門人から意見や問い合わせが大平の許に寄せられたが、これに対し大平は「故翁没後に春庭門人（注）となりたる男なり」「激しくつとむる人にて、たのもしく御座候、中には又よき事も御座候」と答え學問の上では意見を異にする篤胤を、形式的にも、内容的にも『鈴屋』一門として認め、全面的に排斥するような態度をとつていなかつた。

（注）文化二年六月本居春庭に入門。これは篤胤が師と仰ぐ宣長が没しているので、春庭に入門手続を取つたものと考へられる。

このように本居宗家の大平の篤胤に対する態度は、好意的で中立であつたが、『鈴屋』一門の篤胤に対する評価は、毀誉褒貶甚だ激しく、中庸のごとく激賞する者もあれば、千楯のごとく、夢中入門などと無根拠に宣長門人と称して、こじつけと非合理的な論説を本居学の名の下に宣伝する大山師と激しく非難する者相半じていた。

## (八) 篤胤追放当時の社会情勢

「非合理なこじつけをいう奴、黙殺して放置しておいてもよ

いのだが、幕府の御威光にさしさわることもあるうか」と  
儒学者からはいささか持て余され、鈴門の反篤胤派からは  
「非合理な論説を、本居学の名の下に宣伝する大山師」と  
詰められている篤胤が、徳川幕府の安全を脅かすほどの影響力の  
ある人物とみられていたとは考えられない。では当時、幕府の  
治世が、据らぐおそれのある社会情勢であつたのだろうか。

文化・文政から天保初期の時代には、徳川家齊が十一代将軍  
または大御所として政治の実権を把握していたが、田沼時代の  
賄賂政治が尾を引き、政治が腐敗していた。  
また危殆に瀕していた幕府財政を立て直すということから  
改銅による益金を得るため、貿易改銅がしばしばおこなわれたが  
この貨幣改銅は、株仲間の寡占体制による価格操作と相俟つて  
物価を上昇させ、庶民の生活を脅かすことにもなつた。

農村では博徒が増え博打が流行した。

文政十三年（一八三〇）三月阿波に始まつた「おかげ参り」  
は、西は九州、東は関東に広がつた。百万以上の人人が、一説  
には四百数十万人といふ人が女はお歎きを落とし、派手な男装  
で「おかげでさ、するりとな、ぬけたとき」と唱えながら  
狂乱の列を作り、若のみ者今まで家をとびだし、仕事を放り  
出し各所で施行の恵みをうけながら伊勢を目指した。

このおかげ参りは、後に起つた大凶作と無縁ではないといわ  
れているが、天保四年（一八三三）から七年にかけて起きた  
幕府が救済した者は前後七拾余万人に達し、一揆・打ち壊しが  
都市部を中心諸方に発生した。

（注）天保七年（一八三六）五月の大坂の米価は、一石に

つき銀八〇匁であったが、九月には一四〇匁になり

天保八年（一八三七）正月の初相場は一五九匁という

高値であった。

天保八年（一八三七）二月十九日の朝、大阪の天溝の一角に  
砲声がとどろき火の手があがり、火は天溝の一帯を焼け尽くし  
船場に移つた。大砲を放ち、火をつけたのは、大坂東奉行所元  
与力大塙平八郎であつた。

「四海困窮致し候はゞ、天禄ながくたゞん、小人に國家を治  
めしめば災害並び至ると、……昔の聖人御誠おかれ候……然る  
に：上たる人驕奢とて奢り極め、……政事に携わり候諸役人ども  
賄賂を公に授受とて贈り貰いいたし、……知行所の民百姓共へ  
過分の用金申し付け、これまで年貢諸役の甚しき苦む上え  
右の通り無駄の儀を申し渡し、……四海の困窮と相成り候に付  
……人々の怨氣天に通じ年々地震火災、山も崩れ、水も溢るより  
外色々々の天災流行、終に五穀飢饉に相成り候、これ皆天より  
深く御誠の有難きお告げに候へども一向上たる人々心も付ず  
……只下を惱し金米を取りたてる手段ばかりうちかかり、実  
に以つて小百姓共の難儀を吾等如きもの草の陰より常々察し  
悲しみ候……」

この檄文で知られる大塙平八郎の乱は、平八郎の洗心洞の  
門人を中心として三百〇〇人。潟池等の豪商の店に打ち入り

奪つた金銀を路上に撒き、困窮した町民等に与えた。しかし乱は、大坂城兵の出動によつて鎮圧され、三月二六日隠れ家が襲われ、平八郎、義子の格之進父子は自刃し、乱は終結した。

平八郎の行為は、町人等の支持を受けた。凶作による飢饉と幕藩政治に対する不満が全国津々浦々を覆つていた。越後の柏崎でも、米価が急騰したため、平田篤胤の弟子生田万が大塩一党を自称して、五人の同志と共に、五月三〇日決起し富豪を襲い金銀を奪い、民百姓に与えたが、捕り方に追いつめられその日に自殺する事件が起きている。

大塩の乱と同年、アメリカ商船モリソン号が江戸湾に来航し浦賀で砲撃を受け、撃退される事件が起きた。

モリソン号は日本漂民の送還と通商開始の交渉が目的であつた。この事件をのべて、渡辺華山（慎機識）、高野長英（戊戌夢物語）が、幕府の鎖国政策を批判し、処罰されるといふ「蛮社の獄」が起きている。

このように幕府の政治経済にとつては、内憂外患交々至り、その改革は焦眉の急、喫緊の課題であつた。

天保十二年閏正月大御所家斉の死をチャンスとして、老中水野忠邦はその年の五月、「たとえ御城下衰退を極め、今日の家職あい立ちがたく商人ども離散仕り候とも、いささかも頓着せず……」の決意のもとに天保の改革に乗り出すのであるが、篤胤が江戸を迫られたのは、まさにその年の正月であつた。

篤胤は、何故幕府から好ましからざる人物として、江戸退去を命ぜられたのであろうか。

これについて篤胤は、天保十三年七月六日付けの鉄瓶宛の書簡で「……又水越（水野越前守忠邦）へ、讒せる奴は、一柳（村田春門）と伴奴（伴信友）なること疑いなし、これ又種々

#### （九）尺座設置と篤胤追放



水野忠邦肖像

思ひ合わざることと共にあり」と述べていることから伴信友・村田善門が篤胤の失脚をはかつたと、篤胤自身は考えていた。

当時、量・衡には一定の制があり、金銀衡升の座もあるのに尺度についてはそれがなく、曲尺、鯨尺、呉服尺、享保尺などまちまちであった。麗代弘賢は基準尺を決定し、この基準によつて尺座を設ける必要があると考えた。またこの座を新たに設立すれば、幕府へ冥加金を差し出しても、五万両程の利益が上がるとも考へ、その基礎となる研究を篤胤に依頼したのである。その依頼に応えて、篤胤は『皇国度制考』、『赤県度制考』を著わした。

× × × ×

狩谷攝菴が『本朝度量權衡疏』で、日本の尺度はすべて中国の制を元としたもので、上古には存在しなかつたと述べたことに対し、篤胤はこれに反論し、わが国の制度は上古から存在していると論説したものである。

#### 『赤県度制考』

(未定稿)

太古以来の中国の尺度の歴史的沿革について述べたものであるが、元来中国の尺度は、太昊伏羲氏・大國主神が自己の身長を基準として、日本の上古の尺度を伝えたものだと論じている。

× × × ×

篤胤は何かの折、度制・尺座の企てを伴信友に語った。伴信友は宣長没後の門人として認められた本居派の国学者で

同時代人たる平田篤胤の学風とは対照的に、宣長学の文献学的側面を継承し、国史・国文の精密な考証をした。

主な著書は『続日本紀考証』『史籍年表』『比古媛衣』などすべて三〇〇巻におよんでいる。

篤胤は本居大平の紹介で信友を知り、信友の学識と人柄に心服し、自分は信友の弟になりたいとまでいい、文化十一年(あるいは十二年)三月十三日付の信友宛の書簡で、あなたは私と初めて会つたときから「不測にも、魂合せ、君の心付きたまうことは、予もほのぼとの心付き、予が思立つる事は、君はとく心付きたまうなど、實にあやしく、……これ極めて幽き契のなくては、かく魂合うまじく候也」と書いている。

また篤胤の自家の窮状を訴えた信友あての手紙などを見ると篤胤が信友に対し如何に親近感を抱いていたかがわかる。

しかし文政二年(一八一九)『古史徵』出版に当つて、篤胤は無断で未公開の信友の説を「信友曰く」として採用したことで、両者の間に不信が芽生え、篤胤は信友について、「此人は人にやあると熟く見れば否ぬ毛ものぞ人の皮著る」との歌を詠み、また信友の門人山岸鳴亭の聞き書きによれば、信友もこのことにふれて「篤翁博識多才は实に御残念に思召され候へ共何分慢心は恐るべしべしと仰せにて、風上に置くべき人物にあらず」と語っていたほどの不仲になつていて。しかし二人の交際は続けられていたが、文政十二年(一八二九)十月二日信友が篤胤を訪問した際、『古史徵』出版時の言動について紹介していなかつた篤胤が、そのことを蒸し返して信友を面接したことがあつて以来、二人の心はますます遠のいた。

篤胤に不信感を抱く信友は、時の老中水野忠邦から国学、歌文の師として迎えられている村田春門に、度制・尺座の一件を、手紙で告げたのである。

「そもそも件の尺度の事」、篤胤の説によつて天下の御政事に干涉することは、恐れ多いばかりでなく、尺座の混乱があるわけでもないから、人民のためにもならず、私利を得るために無益な新例をたてることなので、「然るべからず候事とおもい給えられし也、かくはおもへど諫むべき道なく、いたくはらふくれて、夢さめ侍りき。此の事舊たひめ事候へども、おのれにはとて、いたく心ゆるして語れるを、かくもらし候は本意ならねど、ふと天下の大事におよび候てはと、あまりにはらふくれして也」

天保六年（一八三五）十月八日、この手紙を受け取つた春門は、国学者として、篤胤を快しとしていなかつたのでこの尺座設定の企てを老中水野忠邦に報告した。

春門の日記十月十二日の条に「極々内々ものさしの座目論みの義申し上げ候の所、（忠邦が）きわめて不承知の趣也」と篤胤は、信友・春門のこのような諫諫によって、尺座設置とあることから明らかである。

篤胤は、信友・春門のこのような諫諫によつて、尺座設置といふ政治的行為に関わろうとする好ましからざる者として幕府のプラックリストにその名が載り、やがて『國許へ差し遣わせ』ということになつたのである。

水野忠邦は、元唐津藩主であつた。唐津藩は長崎警護のお役があるため、藩主は老中になれなかつた。中原に鹿を追い明日の政治に夢見る忠邦は転封を願い出て、浜松藩主になつた後、忠邦にとつて、改革の目的に背を向ける者は許せなかつた。このような忠邦の目に、篤胤は尺座設置を企む奴に与する者と映じ、江戸を追わることになつたのではなかろうか。

#### （一〇）国学者篤胤の生きたあかし

正月十一日江戸を出た篤胤夫妻は、先ず下野国（栃木県）仁良川の秋田藩領まで赴いた。

このとき篤胤夫妻は、夫人おりせの生まれ在所越谷を避け草加に宿泊している。

氣位の高い篤胤から「学問にはおやぢらに御座候へども内実は子の心得にて居り候へば、親と頼む貴老」と云われ、養子の身であることから、まわりに気がねしつつ、夫人おりせの親許ということで、篤胤を援助した門人山崎篤利は、すでに三年前天保九年六月他界していた。

篤胤夫妻は仁良川で冬中滞在し、四月五日同地を発して二二日に久保田城下（現秋田市内）に到着した。

この篤胤の俸祿は、僅かに一五人扶持（注）と給金一〇両である上、お借上げと称して天引きがあつたから実際は一四人扶持と給金八両であつた。『略記』に百石とあるのは、体裁をかまえての虚飾であるといわれている。

篤胤はこの後久保田に住み、藩に仕え門弟を教えながらもある江戸に帰つて再挙する志をすてず、種々運動したが成功しなかつた。そして、久保田へ退いてからは、信友に対する

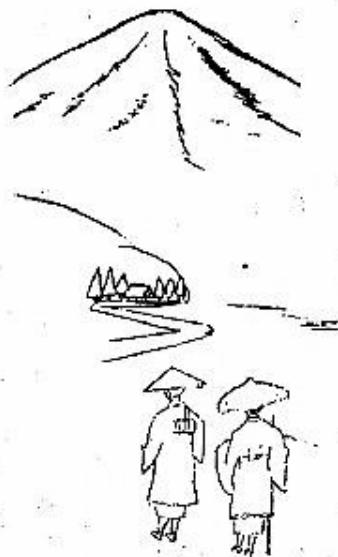
感情は一段と悪化し、百石位はと思つていた俸祿が意外に少なかつたことなども信友の奸計と思い込み、終には信友と絶交に至った。

天保十四年（一八四三）九月十一日、篤胤は、久保田で六八歳の生涯を終え、おりせは篤胤没後、江戸へ戻つたということである。

篤胤が久保田滯在二年半の間に、入門者は七一人を数え門人総数は五五三人に達していた。篤胤の師宣長の門人は四九〇人といわれている。

篤胤の著作で生前刊行されたものは、五分の一にも及ばないといわれてゐるが、篤胤生涯の著作は凡そ百余部、巻数千巻幕府の儒学者林大学頭をして「都而書籍板劍は失賣少なからざるもの故、新刻物出来仕らず候所、大角の著述は夥しく世に板行仕り候事」  
「畢竟信向之もの多くこれ有る証」と言わしめた。

（注）……略……武士一人一日の標準生計費を米五合と換算し一ヶ月に一斗五升、一年間に一石八斗、俵に直して米五俵を支給することを「扶持」と呼び扶持米支給の単位とした。これは知行高五石の蔵米取御家人が、一年間に受取る切米に相当する。……以下略。（日本大事典平凡社に拠る。）



カットは横田トシ子氏

人物叢書 平田篤胤 田原嗣郎 吉川弘文館

越谷市史 通史 一

日本歴史展望第九卷

绚爛たる町人文化の開化

日本歴史展望第一〇巻

幕末・維新をいろいろ群像

新版 高校 日本史 資料集 旺文社

日本書籍

本稿は、右の著作に依拠するものであることをお断わりいたします。

# 越谷市内の火の見やぐら

ヒントなど

## 火の見やぐら調査グループ

- 池田 仁〇高橋 清〇高山はつ〇武井福三郎〇谷岡隆夫
- 中村林也〇野村勝八〇原田熊蔵〇宮川 進〇森田三郎
- 山崎政隆

### 越谷市内の「火の見やぐら」が消えつつある

最盛期には、市内に59基あった「火の見やぐら」が最近ひとつ、ふたつ、と姿を消しつつあるようです。

どの町にもひとつはあって、私たちのくらしを毎日、上の方から、あたたかく見守ってくれた「火の見やぐら」。それは私たちの「守り神」であったし、あの良き時代の「住民の防災意識」の象徴でもあったのではないでしようか。

情報伝達方法の変化などの理由で消えてしまうのは仕方ないとしても、なんとなく心さびしいこともあります。せめて今残っているものの記録だけでもとておきたいと考え、所在地の確認と写真撮影を行ないました。

### 現在、31基の残存を確認

平成8年5月から10月までの間にそれぞれが分担した場所に行き、現地確認と撮影をおこない、現時点での31基の残存を確認しました。

そのリストは別表のとおりです。

#### ①富本町二丁目の「火の見やぐら」

大沢に消防署ができてからは、火事のときでも鳴らされたことはない。それまでは、火事のとき、消防団員が鳴らしていました。(1)近所の当会会員・井上すずさんの話) = 谷岡

#### ②下間久里の「火の見やぐら」

昭和19年 鐘と鉄骨を供出

昭和22年 木造(杉)にて再建

昭和28年頃 発電所からの払下げで現在のものとなる  
これは袋山のものも同じ

#### ③新川町一丁目の「火の見やぐら」

火事のときは、最初に知った人が半鐘を乱打して近隣にしらせた。子供の頃、半鐘の乱打を聞くと身体がふるえた。

昭和12年6月の綾瀬川氾濫の時も半鐘が鳴らされた。

以前、寺があつて寺男がいた時は、葬式の際、葬列が墓地に達すると半鐘を五つか七つ鳴らした。

= 高橋

(1)の「火の見」は以前の寺のものかとも思われますが、火事のときに鳴らされたということもあり、今回の調査

対象に加えました)

#### ④恩間新田の「火の見やぐら」

戦前はもつと立派なものだった。鐘も鉄骨も供出させられ、戦後の1時期は一本の木を使った「やぐら」であった。その後、電力会社からの鉄骨で今のものがつくられた。

#### (1)近所の原田氏の話)

= 宮川

越谷市にある「火の見櫓」 総リスト

1	大里	大里自治会館横	大里751附近	野村
2	下間久里	消防署間久里分署横		山崎
3	上間久里	4号線せんげん台陸橋入口	上間久里852附近	山崎
4	大泊	加藤様横	大泊238附近	高山
5	平方	セゾン・ド・パリ近く		高山
6	平方	西楽寺前		高山
7	袋山	若接骨院近く	袋山1370附近	山崎
8	恩間新田	根岸様横	恩間新田521附近	宮川
9	東大沢	村山様横	東大沢2-32附近	野村
10	瓦曾根	さくら幼稚園横	瓦曾根1-5-43附近	原田
11	川柳2丁目	深井様前	川柳2丁目367附近	武井
12	相模町2丁目	八条用水路土地改良事務所横		池田
13	相模町6丁目	斎藤自転車店東	相模町6丁目415-2附近	池田
14	大成町2丁目	豊田様横	大成町2丁目142附近	池田
15	大成町7丁目	水神社内		池田
16	増林	中様となり	増林3659-1附近	中村・畠・鶴口庸信
17	増林	岡安様横	増林2718-4附近	中村・畠・鶴口庸信
18	増森2丁目	新田橋畔	増森2丁目41附近	中村・畠・鶴口庸信
19	増森	小島商店脇	増森1732-2附近	中村・畠・鶴口庸信
20	東越谷3丁目	越谷教育相談所となり	東越谷3-10-9附近	原田
21	花田1丁目	西円寺内	花田1-22-7附近	野村
22	船渡	新興運送(株)前	船渡1381-1附近	野村
23	北川崎	シマネ理容横	北川崎239-2附近	野村
24	大吉	香取神社横	大吉1048附近	野村
25	弥十郎	タテマツ(株)倉庫横		野村
26	宮本町2丁目	迎摺院東となり	宮本町2丁目50附近	谷岡
27	大竹	吉沢様前	大竹450附近	森田
28	大道	大道神社前		森田
29	恩間	香取神社前	恩間759-2附近	山崎
30	北後谷	堀井様前	北後谷491附近	高橋
31	新川町1丁目	万寿院内		高橋

# 新方地区に散在する石仏類について

加藤 幸一

越谷の信仰や生活などを解説する貴重な石仏類が最近開発の波にのって葬られつつある。そこで今のうちに詳細に、かつ正確に記録し残しておきたいと新方地区にある江戸時代の旧村・船渡村・大松村・大杉村・川崎村・向畠村・大吉村・弥十郎村の石仏類について調査した。各石仏類の石塔型式、造立年号や石仏類に刻まれた文字などの歴史解説に必要な詳細については船渡の無量院と大松の清淨院（以上、旧船渡村・大松村・大杉村の石仏）、北川崎の聖徳寺と大吉の徳蔵寺（以上、旧川崎村・向畠村・大吉村・弥十郎村の石仏）に資料を置いておくのでご請求（無料）願いたい。

1. 旧船渡村の石仏類  
(1) 浅子家近くの路傍  
図1は頭上に馬の頭が載せられた馬頭観音像である。腕が2本あるので死馬の供養のために造立されたものと

わかる。このあたりはかつては村境の死馬捨て場で、この石仏は土盛りした塚の上にあった。近くに住む浅子家（船渡二一一八の浅子商店）が管理している。

## (2) 上組集会所の墓地

ここには昔「寮」と呼ばれた建物があったというが、その寺院名は不明である。

図2は念仏供養塔であるから主尊は普通は阿弥陀如来像となるべきであろうが、如意輪觀音菩薩像となつている。それは、埼玉県では越谷市など千葉県に隣接する地域に念佛信仰と結び付いた十九夜月待信仰が盛んで、主尊が如意輪觀音であつたからである。図3の「名号」とは「南無阿弥陀仏」を指す。図4と5の「十三仏」とは十三人の仏様を指す。今でも十三仏信仰はみられ、人が死亡してから七日目の初七日（不動明王）の法事から始まって、三十三回忌（虚空藏菩薩）までの計十三回の法事にそれぞれの法要本尊として配当されている。

## (3) 船渡香取神社

旧船渡村内にあった山王社、天神社などを明治四十五年にこの香取社に合祀している。

図6は不動明王像である。中央には炎の中にすわる不動明王が、下には矜羯羅（向かって右）・制多迦の二童子がいる。像容は成田山新勝寺のものに似せたものである。この地でも成田山の不動信仰が盛んであったことがうかがわせられる。

図7は庚申塔である。庚申信仰は江戸時代に全国津々浦々で庶民の間に盛んに行われ、その記念として造立された庚申塔はいたるところに見られる。主尊は青面金剛で、腕が六本もある。図7のように目が三ツ目となつている場合もある。上には日月、下には踏み付けられた鬼、さらにその下には「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿が見られる。図9のように雄と雌の二鶴が描かれていることもある。また、図8、10、11のように文字のみしか刻まない、いわば手抜きの庚申塔も江戸時代の中期から末期にかけてよく見られる。

図14は庶民の間で長寿の神として信仰されていた磐長姫を祭った石塔、図15は当時恐れられていた疫病である疱疹・痘疹の神様を祭った石塔、図16は金毘羅様を祭った石塔である。

#### (4) 無量院脇の用水路

無量院前の道は古道である。ほぼ東西に走る古道の道筋を西から紹介すると、浅子建築の東方の二股の道を右に進み、道なりに通つて再び新道に出て、それを横切つて福田家脇の道に進み、現在の浅子家の敷地内（今はこの道は無い）、そして香取神社前を通つて無量院前の道に続くS字形の道筋である。

図19は古利根川から取水していた用水路そばの石仏である。用水路に渡す石橋を建立した記念に造立したものである。

(5) 船渡無量院  
仏説山無量院は、三誓上人の頃の開山である。上人は天正二年（一五七四）八月二十二日に没している。なお、本堂の裏には三角点が設置されている。

図20、21、22は「六地蔵」の石仏である。六地蔵とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六つの迷界である六道を輪廻転生する人々がどこにいて迷つていても救いの手を差し伸べられるようにと、六つの分身として表されたものである。

図23はこの寺院の開山塔である。三誓上人の没年が刻まれ、主尊は弥陀定印の阿弥陀如来像となつていて。

#### (6) 船渡第六班集会所そば墓地

ここはもと龍正寺の跡地である。その証拠に図24の石仏には『龍正寺』の文字が刻まれている。

#### (7) 船渡新田集会所

ここは船渡本村から離れた新田の村である。船渡集会所は神田家（船渡二九二）と海老名家（船渡二八六）に挟まれ、奥まった所にある。江戸時代はここに寺院があつたと思われるが、今となつてはその寺院名は不明である。図25は禅定印の釈迦如来像である。石仏としてはかなり大きい。

図27の「普門品」は、俗に観音經ともいわれ、庶民の間でよく唱えられていた。いたるところで見られる石塔である。

## 2 · 旧大松村

### (1) 大松香取神社

本殿向かた左側に八坂神社（祇園社）の祠がある。その中には祠型の石塔（図1）が納められ、よくキユウリが奉納されている。そこで地元では胡瓜天王様（天王

とは八坂神社の神である牛頭天王をさす）と呼ぶ。その例祭は七月十四日に今でも細々と行われ、縁日がたっている。この七月十四日に限ってキユウリは食べてはいけないという俗説が残されている。昔、武士がキユウリ畠に隠れて命拾いしたとの伝説からきているという。

図4は学問の神である菅原道真の像である。寺子屋などに天神様の掛け軸が飾られていたが、石仏としてはよく神社に奉納された。

### (2) 平野家路傍

県道平方東京線の大松一七五一一の平野家東側の路傍には大松一七五一一の平野家代々が管理してきた石塔が二基見られる。

図5は六十六部回国塔で、大松村の通誓円心が、法華經（大乗妙典）をわが国の六十六か国すべてに納めようと廻った記念に造立したものである。図6の造立も通誓円心である。

### (3) 長野家本家路傍

長野家は大松村の名主を代々勤めた家柄で、地元では「四郎兵衛様」と呼ばれている。

なお、ここより西に百メートル行った路傍北側に長野家が管理する勢至堂（お勢至様）と呼ばれる祠がある。

この中には、嘉吉四年（一四四四）の阿弥陀三尊板碑など破片を含めて八基の板碑が安置されている。

図7の天保九年の文字庚申塔の左側面には「四郎兵衛」と言う文字が見られる。大松村の名主である長野家が代々受け継がれてきた名前である。

### (4) 大松清淨院

この寺院は「栄広山淨土寺清淨院」と称し、室町時代中頃に現れた賢眞上人の開山である。戦国時代には、新方領六ヶ村（船渡、大松、大杉、川崎、向畑、大吉）を領有した。・

図8は六阿弥陀参りのために寺院に建てた標識である。阿弥陀如来を安置している六か所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。江戸の町で盛んに行われた。この越谷地域にも江戸の六阿弥陀参りをまねて「新六阿弥陀参り」として行われた。現在、増林の林泉寺に「新六阿弥陀二番」、平方の林西寺に四番、大泊の安国寺に五番、ここ清淨院に六番の標識が残っている。願主はすべて船渡村の受道である。また三番は登戸の報土院である。一番は不明であるが、天岳寺であろう。

図10は開山塔である。清淨院を開山したのは賢眞上人で、上人の没年『宝徳元己巳年七月廿八日』も刻まれている。この石塔の上部には溝があるが、ここに板碑（今

は行方不明となつていて所在不明）を差し込んで、これを『藤原様』と呼んだ。そして地元の人々によつて大いに信仰され、関東大震災の頃まで列をなして多くの参詣者で賑わつたといふ。またこの藤原様を覆うための簡単なお堂（今はないと、お堂から垂れ下がるたくさんの竹筒があり、その竹筒に耳をあてると耳だれなどの病気が治るとの信仰があつた。

図11は、清淨院の中興である文誓上人の墓塔である。上人は戦国時代の頃の第十代の住職である。永正十八年（一五二一）正月、敵である八条郷（今の八潮市あたり）の地頭八条氏を追い払つて、奪われた新方郷の地頭である向畠城主新方氏の領地を取り戻した。さらに敵によつて焼き払われた清淨院を再建した。後に人々は文誓上人の靈を敬い、「新方様」と呼び、後々までも信仰されてきた。

図12は大川戸杉浦家の祖の墓塔である。上部に「丸に三本杉」の家紋が刻まれている。大川戸に住む杉浦家の祖は杉浦定政である。定政は関ヶ原の戦いが起つて以前に家康から大川戸の御殿をもらつた。杉浦家はその後は関東郡代の伊奈家に代々仕える有力家臣となる。

#### (5) 相心寺跡墓地

大松集会所からこの墓地にかけては相心寺跡地である。図13の墓塔には「相心寺」の文字が刻まれているのはそのためである。

### 3・旧・大・杉・村

#### (1) 大杉香取神社

鳥居に掛かっている額には「稻荷神社」・「香取神社」と縦書きで並んで書かれている。古くから信仰されてきた香取社に更に稻荷社を合祀したものであろう。また、鳥居向かって右側の手前に、地元の地名と同名なためか、茨城県の桜川村にある大杉神社の神を分祀した祠がある。地元では『安武様』（あぶさま、あんぶさま）と呼んでいる。安武様の例祭は七月二十六日で、越谷市越ヶ谷にある久伊豆神社の神主が招かれて拝まれる。

図1は庚申塔である。三猿のうち、見ざると言わざるが両側の角にいるのが珍しい。

#### (2) 大杉第二集会所

ここは大杉香取神社に隣接しているが、淨閑寺の跡地である。毎年五月八日に「薬師まつり」が行われている。

図4の阿弥陀如来像には「淨閑寺」の文字が刻まれている。

#### (3) 大杉新田稻荷神社

ここは大杉本村から離れた新田の村である。

図9は猿田彦庚申塔である。庚申信仰の主尊は一般には青面金剛という仏様であるが、神道では猿田彦という神様であるとしている。猿田彦庚申塔は江戸後期に多く造立された。猿田彦は天孫ニニギノミコトが降臨するときの道案内をした神である。

## 4・旧川崎村

### (1) 川崎神社

もとは香取神社と呼ばれた。正面の入り口の左右に十六基程の力石が置かれている。力石とは江戸時代に人々が力試しに抱え上げた大石のことである。

また、すぐそばにはこの神社に敷石を奉納した人たちの名が刻まれた二基の敷石供養塔（図1と2）がある。

### (2) 権現社跡地

古利根川に面したこの辺りにはかつては権現河岸があり、渡し場がみられ、吾妻権現社が祭られていた。今でも地元ではこの辺りを「権現様」と呼んでいる。

### その名残として白石家（川崎一三一二一）そばの十字

路東側の角に水神宮文字塔（図4）がある。毎年七月二

十二日はこの「水神様」（管理者は北川崎九一の山崎家）の縁日で、地元の人たちが小豆を供えて拝んだ。今でも地元川端地区の人たちが七月二十二日に最も近い日曜日になると川崎神社に集まり「水神宮」の集いを開くのである。「水神様」はかつては船の安全や権現河岸の繁栄などを祈つて信仰されたものであろう。

### (3) 聖徳寺

聖徳寺では毎年五月二十二日に近郷の職人たちが集まつて太子講が開かれている。参道を歩いて行くと塩地蔵を安置している祠がある。塩を供える信仰のためにひどく摩耗してしまったこの地

蔵尊（図6）には聖徳太子に関する次のような言い伝えが残っている。

聖徳太子が蘇我馬子とともに、蘇我氏の敵である物部守屋を攻め滅ぼした。ところが討たれた守屋は実は地蔵の化身であった。このことを知った太子は守屋の供養のためにこの地蔵を自ら製作したという。

参道をさらに進むと右側に無縁仏の石塔群がみられる。それらの中には、両側面に「此方少行」西のみち北「かすかべ」「南「こしがやみち」と刻まれた道標をかねた文字庚申塔（図9）を始め、貴重な石仏（図8から図22）が交じっている。

## 5・旧向畠村

### (1) 堂面の観音堂

通称は「観音堂」と呼ばれているが、その東側隣には薬師如来を祭る建物もある。この地一帯は「花光院」と称され、徳蔵寺の兼務寺である。地元の堂面地区の人たちによって八月十日に「十日面」の行事が行われ、観音堂本尊の観音菩薩像前で観音経を唱えている。

この境内には「庚申」を「孝心」の言葉に結び付けた珍しい庚申塔（図3）がある。正面は「庚申塔」、裏面には「孝心で」庚申さまをよくおがめ拝むその身はすぐにかうしんと刻まれている。『庚申』を「孝心」に結び付ける考えは、鳩ヶ谷町の小谷三志の「不二孝」

(不二講)にみられるという。富士山を信仰の対象とした民間宗教集団「富士講」の一派である。この向畠村の隣の大杉村にも幕末当時熱心な信者である百姓床七がいて、この不二孝を広めていたことがわかっている。

この庚申塔に「孝心」の文字がみられるのは不二孝の影響であろうか。

#### (2) 向畠香取神社

向畠村の鎮守様である。

参道にある祠には文化十二年(一八一五)の水神宮文字塔(図8)が安置されている。

#### (3) 北向き地蔵堂

北向きの地蔵尊(図9)を祭る地蔵堂には今でも地蔵講があり、かつては毎月二十四日に宿を持ち回りして行われていた。特に地蔵盆の八月二十四日は聖徳寺の住職を呼んで大々的に行われた。しかし、現在は三ヵ月に一回程度となり信仰が廃れてきている。

八月二十四日の地蔵盆には次のような民間信仰がみられる。

地蔵堂の両側に「地蔵尊」と書かれた提灯を提げるが、提灯の中の使い切つて短くなつた蠟燭をいただき、お産

の時にその蠟燭を立てて火をつけるとその蠟燭が燃え尽きるまでは赤ちゃんが生まれ、長く苦しむこともなく安産できるといわれた。それゆえ「子育て地蔵」とも呼ばれている。

#### (4) 十一面觀音堂そば路傍

ここには四基の庚申塔があるが、その中で図16は初期の庚申塔(三猿塔)として貴重である。

また、図13の不動明王三尊像(慶応二年)と不動明王の家来である三十六人の童子を意味する図12の三十六童子文字塔(明治十一年)とがあるが、この地で成田山の不動信仰が當時盛んであったことがうかがえる。

なお、現在の越谷市内で幕末に造立されて現存しているこれ以外の成田山の不動明王三尊像をあげると次の通りである。

平方村東組共同墓地	文久四年(一八六四)
七左衛門村観照院	文久四年(一八六四)
平方村戸崎共同墓地	元治元年(一八六四)
弥十郎村観照寺	慶応二年(一八六六)
大泊村香取神社	年代不詳 慶応二年
船渡村香取神社	慶応二年(一八六六)

以上の他にも造立の時期が少し後にずれるが、平方村の覚山坊墓地に「明治十三年庚辰年十二月吉祥日」と刻まれた成田山の不動明王三尊像を安置した小堂がある。

#### (5) 十一面觀音堂

毎年八月十一日には『十面』と呼ばれる行事が行われ、以前は觀音經が唱えられていた。本尊の十一面觀音菩薩像は秘仏で、十二年に一度の午の年にご開帳が行われる。

ここには普門品供養塔や名号塔の他に秩父一番巡拜記念塔が見られる。秩父一番とは秩父札所三十四カ所の觀音靈場巡りの一番の妙音寺のことであろう。

その他に、墓地の入り口の六地蔵のそばに力石もみられる。

#### (6) 向畠立野の鈴木家路傍

正面には「庚申塔」と大きく刻まれた文字庚申塔(図22)がある。左側面(向かって右側面)には建立した四カ所の石橋の名前が刻まれていて石橋供養塔も兼ねる。

この向畠の立野地区では今でも庚申講があり、現在では庚申の掛け軸を掛けてロウソクを立て、午後二時頃から夕方まで懇談を交えて庚申信仰が行われている。

### 6・旧大吉村

#### (1) 大吉香取神社

元は新方橋そばの現在の古利根川堰公園にあった。平成三年(一九九一)頃に現在地に移転したものである。旧・大吉香取神社の名残の石仏としては祠に納められている「水神宮文字塔」があげられる。

#### (2) 德藏寺

参道入り口には、向かって左側の角に力石が置かれている。

さらに成田山の不動明王像を祭るお堂があり、吉建講という成田講がみられる。毎年正月、五月、九月の各月

の不動明王の縁日の前日である二十七日に地元の人たちがこのお堂に集まり、お堂を管理している染谷氏(大吉一一六番地)が先達として護摩を焚いて祈願している。戦前は、越ヶ谷で「龍王講」と呼ばれる不動講の先達を務めていた故・川上泰信(大吉一〇三四番地)が行っていた。

参道入り口右側には大吉農業センターがあるが、その中には本尊の十一面観音像が安置されている。古くからこの現在地にあった。

境内には庚申塔が四基並んでいるが、うち一基は道標をかねた文字庚申塔(図4)である。正面には「庚申塔」と刻まれているが、左側面(向かって右側面)は「左江戸道日本橋六里三十丁」、右側面は「右関宿宝珠花野田岩井猿嶋道」と刻まれている。もとは新方橋を渡った猿島道(野田街道)にあったのをここに移したものであろう。

また境内の北側には青龍大權現文字塔(図7)がある。青龍山徳藏寺の山号からとつて名付けたのであろう。龍神は水の神であり、井戸の神ともなる。この石塔から前方(西方)3メートル先に井戸跡が現在でも残っている。この石塔を造立するにあたって大吉村の檀家は勿論、松伏村、増林村、大吉村、向畠村の人々やこの井戸を作った井戸師と井戸側師の協力を得てることが台石に刻まれた名前からわかる。

(3) 天満宮の祠

徳藏寺西側の道路沿いの向畠と大吉の境界線そばに天

満宮を祭った祠がある。その敷地内に「稻荷大明神文字

塔」(図8)がある。

(4) 大吉調節池東側路傍

大吉調節池東側沿い路傍で丁字路北東の角に「文字庚申塔」(図9)が建てられている。刻まれた文字を見る

と、この庚申塔を造立した人は大吉村の人だけでなく古

利根川の増林河岸(寿橋下流二三百メートル先)の人

々も協力したことがわかる。

(5) 鶯代四ツ谷の天満宮

もとは加藤家(東大沢三一〇一九)前の道路の鶯代用水側にあった。ここに光明真言の曼陀羅が刻まれた光明真言塔(図10)がある。

光明真言曼陀羅とは、光明真言の二十三個の梵字が下から右回り(時計回り)に円形に並べられ、その中央部には胎藏界大日如来真言の五つの梵字が見られるものである。光明真言は「オン、ア・ボ・キヤ、ベイ・ロ・シャ・ナウ、マ・カ・ボ・ダラ、マ・ニ、ハン・ドマ、ジンバ・ラ、ハラ・バ・リタ・ヤ、ウン」と唱え、胎藏界大日如来真言は「ア、ビ、ラ、ウン、ケン」と唱えるのである。

7. 旧跡十郎村  
(1) 弥十郎稻荷神社

弥十郎村の鎮守様である。「水神宮文字塔」(図1)を安置した祠がある。

(2) 「やぼ」の地蔵堂

地元では昔からこの場所は「やぼ」と呼ばれ、幼い子供の墓塔が並んでいる。以前は幼い子供が亡くなるとこ

こに埋葬されたという。「やぼ」とは「野墓」のことか。

毎年地蔵盆の八月二十四日の前夜に地元の人たちがこのお堂を参詣している。この時、お堂に供えて短くなつたロウソクを家に持ち帰り、出産の時にこのロウソクを使うと燃え尽きるまでには安産ができるという。向畠の「北向き地蔵」と同じ言い伝えが残っている。

お堂の中には地蔵菩薩像(図2)が安置されている。また墓地にはひときわ高い八木橋家(弥十郎四二二)所の阿弥陀如来像(図3)がある。「施主 八木橋長兵衛」と刻まれた文字が見られる。

(3) 観照寺跡弥十郎会館

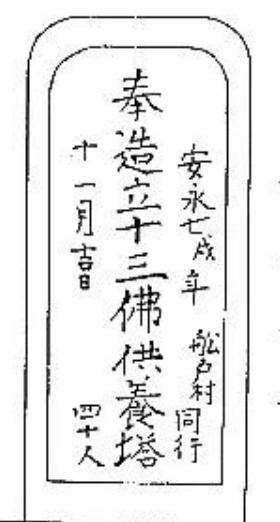
この会館には本尊の觀音菩薩像が安置されている。

境内西側の北端には向畠の十一面觀音堂そば路傍にある「不動明王三尊像」と同時期に造立された「不動明王三尊像」(図4)が祠の中に安置されている。

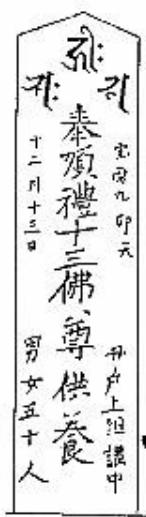
そしてその南側にはそれに続いて多くの石仏石塔群が南北一列に並んでいる。その中には庚申塔や普門品供養塔、弥十郎村の村人が出羽三山を登山し参拝した記念に建てた出羽三山供養塔などがある。

# 旧船渡村

4. 十三仏供養塔



5. 十三仏巡礼供養塔



7. 青面金剛像庚申塔



8. 文字庚申塔



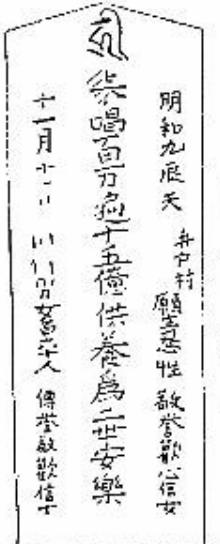
9. 青面金剛像庚申塔



2. 如意輪觀音菩薩像



3. 名号塔



十一月十二日 以行者萬年 佛堂敬獻信士

1. 馬頭觀音菩薩像

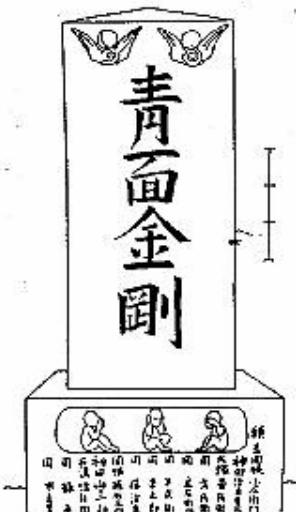


船渡  
0  
10  
20  
30 cm

10. 文字庚申塔

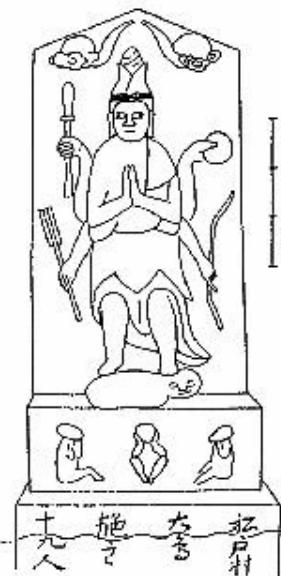


11. 文字庚申塔

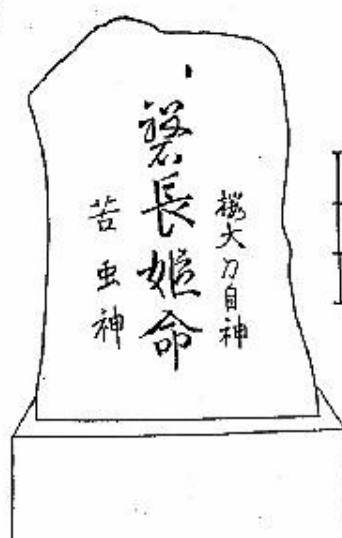


12. 青面金剛像庚申塔

13. 青面金剛像庚申塔

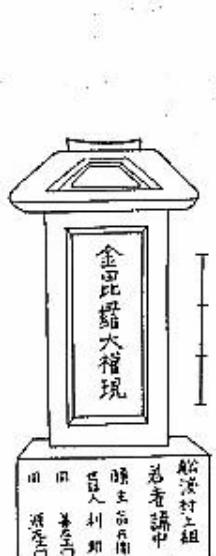


14. 碧長姫文字塔

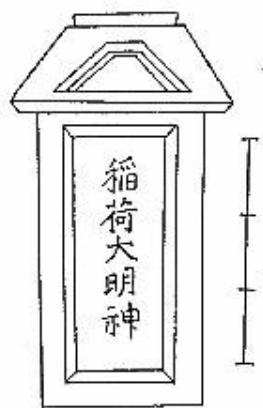


15. 疣疹神・痘疹神文字塔

16. 金毘羅大權現文字塔



17. 稲荷大明神文字塔



18. 稲荷大明神文字塔

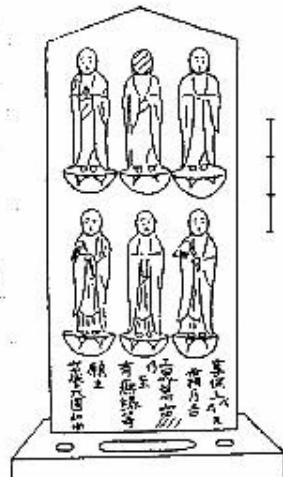
119. 地藏菩薩像付き石橋供養塔



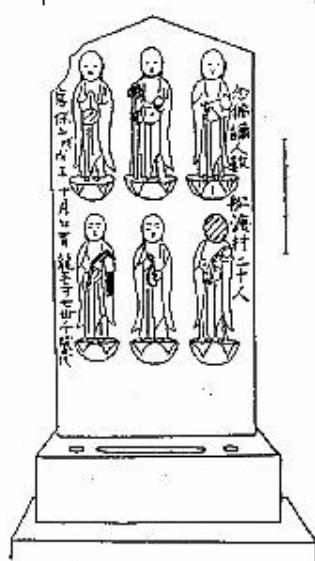
20. 六地蔵石幢



21. 一石六地蔵菩薩像



24. 一石六地蔵菩薩像



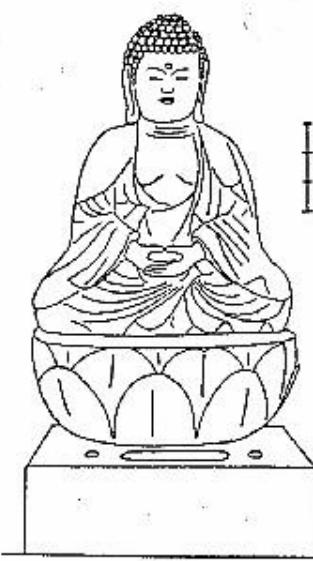
22. 一石六地蔵菩薩像



23. 阿弥陀像付き開山僧墓塔



25. 丸彫り釈迦如来像



27. 普門品供養塔



# 旧大松村

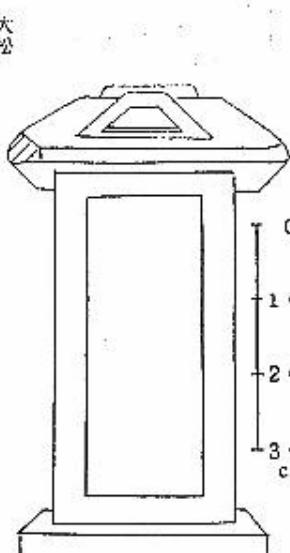
おおまつ

1. 大松 胡瓜天王石塔

0  
1.0  
2.0  
3.0 cm

2. 大松

青面金剛像庚申塔



4. 大松

天神像



5. 大松

六十六部回国塔



7. 大松

文字庚申塔



3. 大松

普門品供養塔



十

一月七日

享

保八發印歲

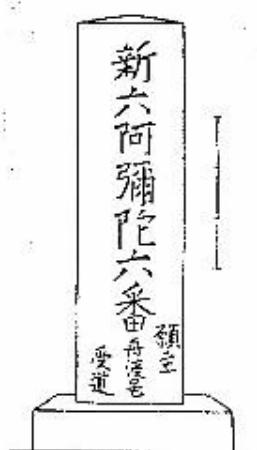
6. 大松

念佛供養塔



9. 大松

地藏菩薩像付き回国供養塔



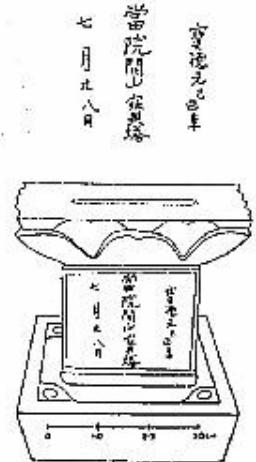
慈子同性之蔭所  
悠久長壽清高就

新六部日本烟周成  
新六部追闇笠頭

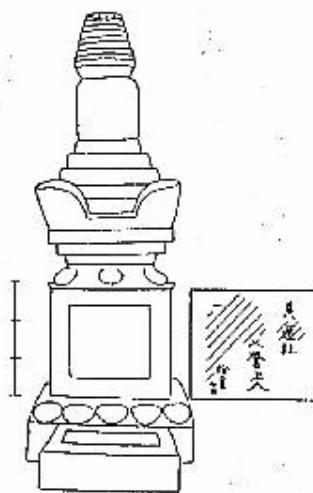
100. 清淨院開山宝塔

13. 相心寺住職の墓塔

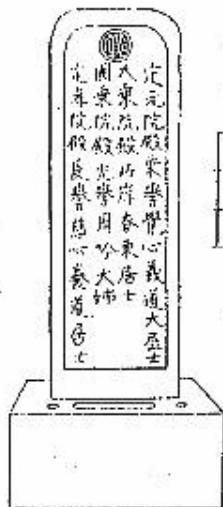
2. 普門品供養塔



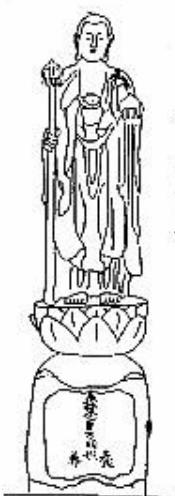
11. 清淨院中興文誓上人の墓塔



12. 大川戸杉浦家の祖の墓塔



14. 丸彫り地蔵菩薩立像



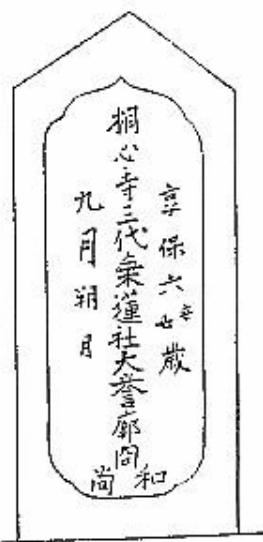
15

旧大杉村  
文字庚申塔



16

阿弥陀如来像



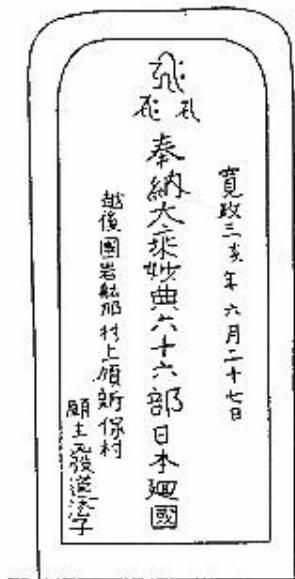
17

普門品供養塔

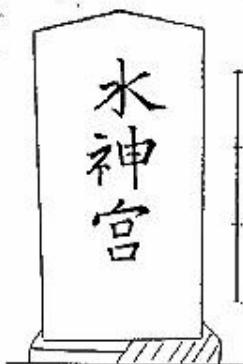


16

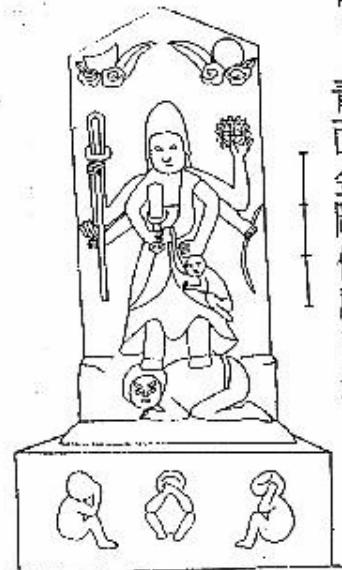
5 大杉 六十六部回国塔



6 大杉 水神宮文字塔



7 大杉 青面金剛像庚申塔



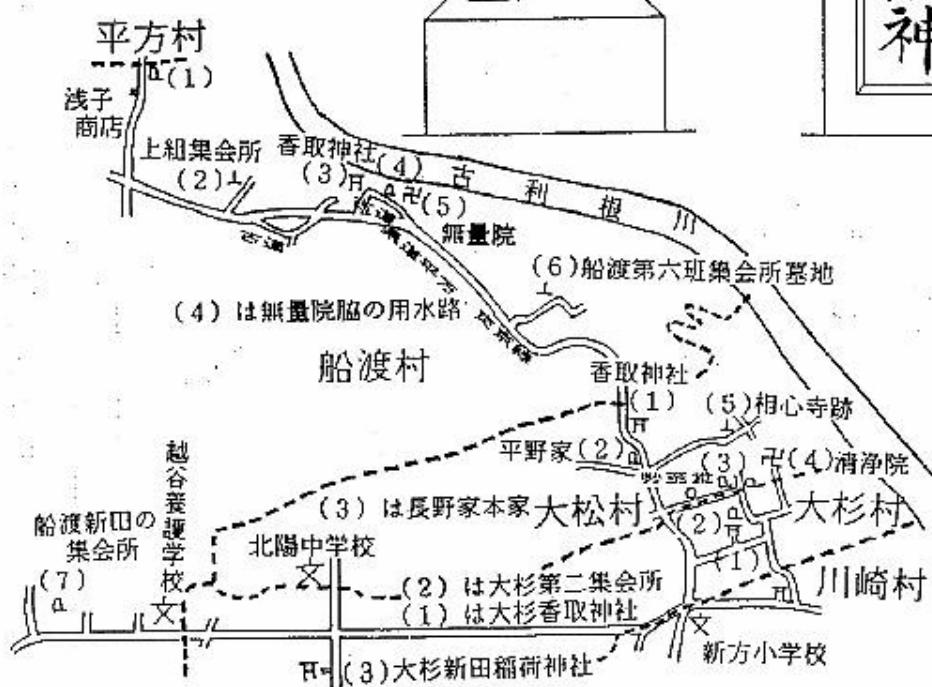
8 大杉 痘瘡神文字塔



9 大杉 猿田彦文字庚申塔

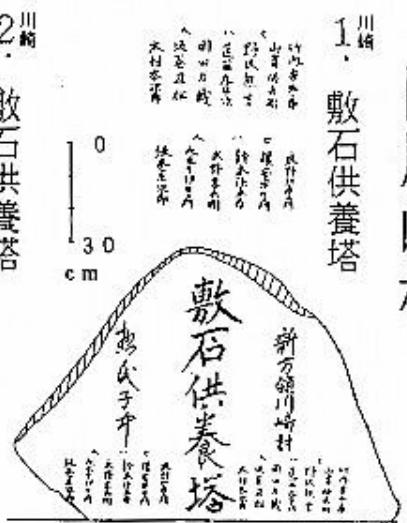


## 旧船渡村・ 大松村・ 大杉村の 案内図

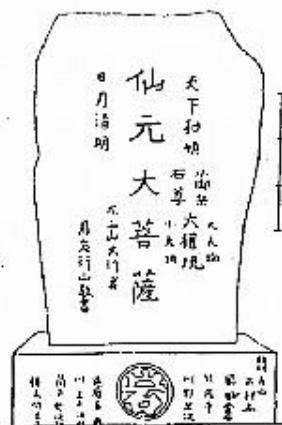


# 旧川崎村

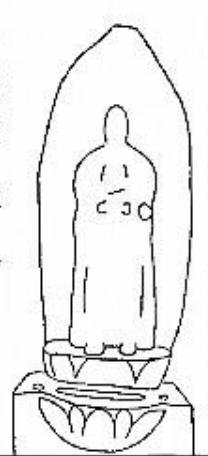
1. 敷石供養塔



3. 仙元大菩薩文字塔



7. 文字庚申塔

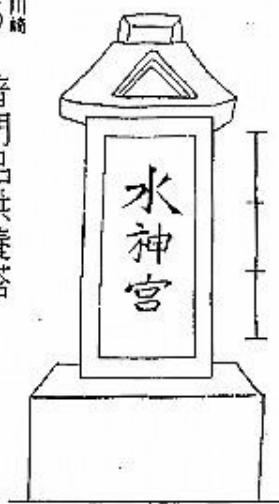


6. 塩地感石仏

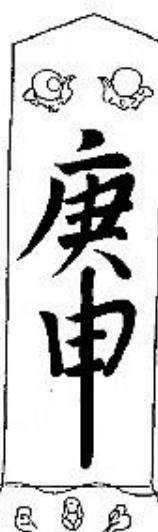
摩耗が激しいため像容が不明確



5. 普門品供養塔



4. 水神宮文字塔



10. 文字庚申塔



9. 道標をかねた文字庚申塔

ほんぢや  
ほのから  
ほのかすら

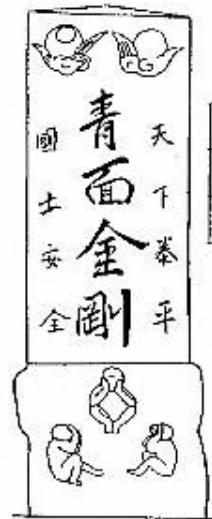


8. 文字庚申塔

11. 文字庚申塔



12. 文字庚申塔



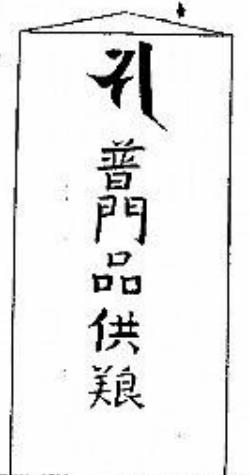
13. 文字庚申塔



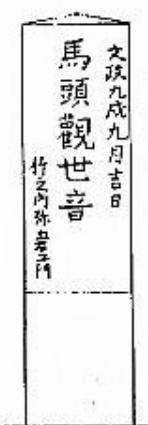
14. 天滿宮文字塔



15. 普門品供養塔



16. 馬頭觀音文字塔



17. 回國供養塔



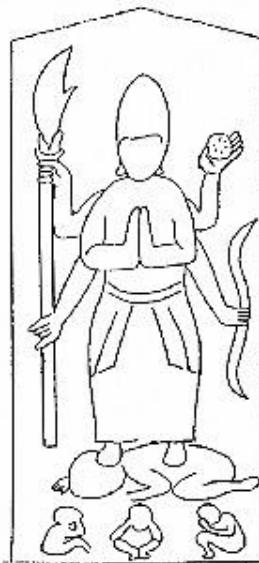
18. 文字庚申塔



19. 馬頭觀音像



20. 青面金剛像庚申塔



21. 青面金剛像庚申塔

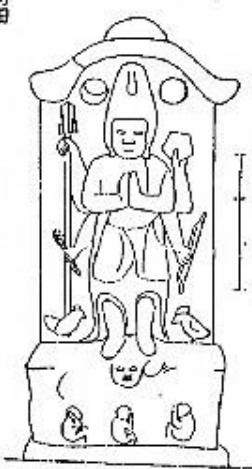


22. 湯殿山信仰大日如來像



## 旧向炬村

1. 青面金剛像庚申塔



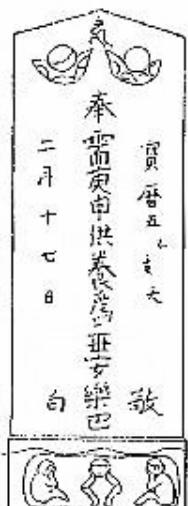
2. 文字庚申塔



3. 「孝心」の文字庚申塔



4. 文字庚申塔

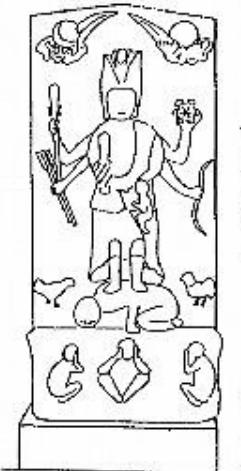


5. 六地蔵石幢

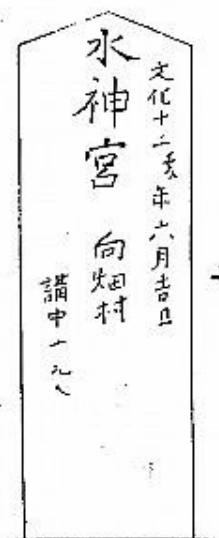


6. 文字庚申塔

7. 青面金剛像庚申塔



8. 水神宮文字塔



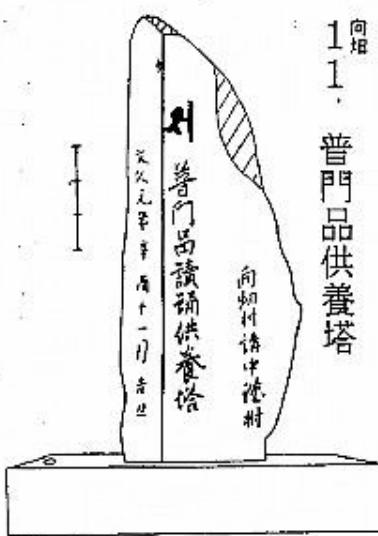
9. 北向き地藏菩薩像



10. 文字庚申塔



11. 普門品供養塔



12. 三十六童子文字塔



13. 不動明王三尊像



14. 文字庚申塔



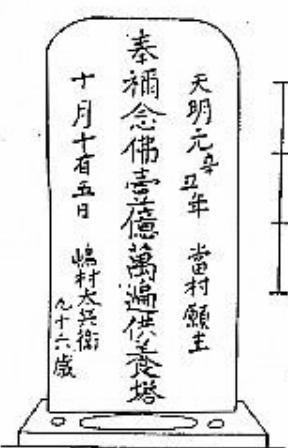
15. 青面金剛像庚申塔



16. 三猿庚申塔



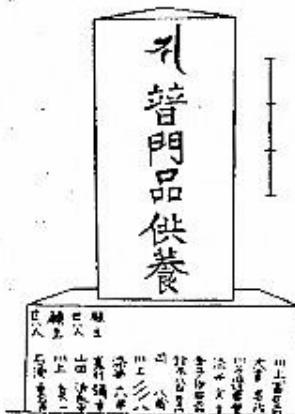
19. 名号塔



22. 文字庚申塔



17. 普門品供養塔



18. 秩父一番巡拜記念塔



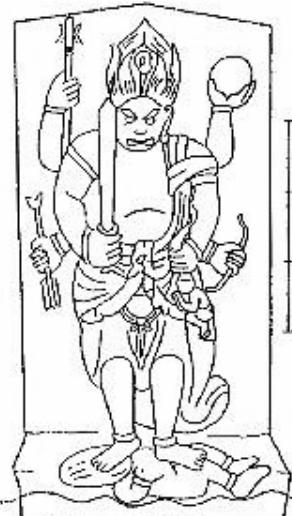
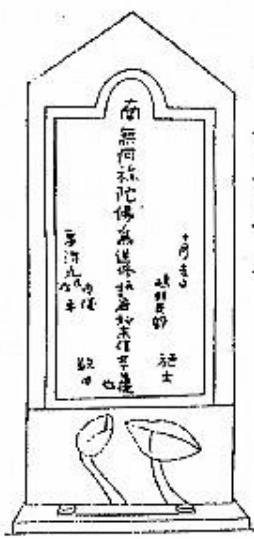
21. 大吉村水神宮文字塔



20. 名号塔



21. 名号塔



大吉

文字庚申塔



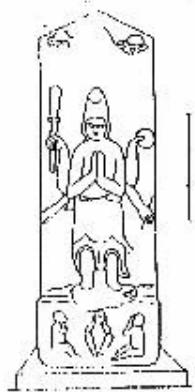
大吉

道標をかねた庚申塔



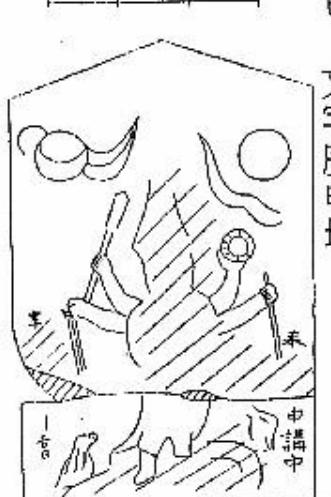
大吉

青面金剛像庚申塔



大吉

文字庚申塔



大吉

青龍大権現文字塔



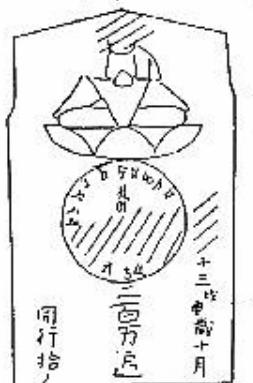
大吉

11. 青面金剛像庚申塔



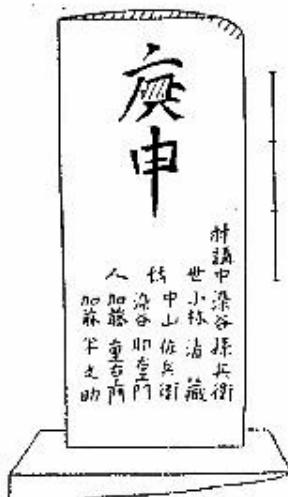
大吉

光明真言塔



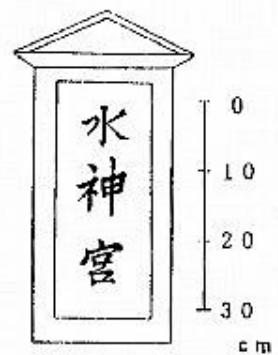
大吉

文字庚申塔



# 旧弥十郎村

1  
水神宮文字塔



2  
地藏菩薩像



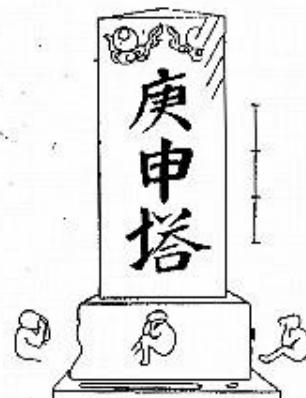
3  
阿彌陀如來像



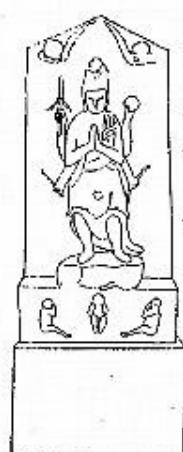
4  
不動明王三尊像



5  
文字庚申塔



6  
青面金剛像庚申塔



7  
普門品供養塔



8  
出羽三山供養塔

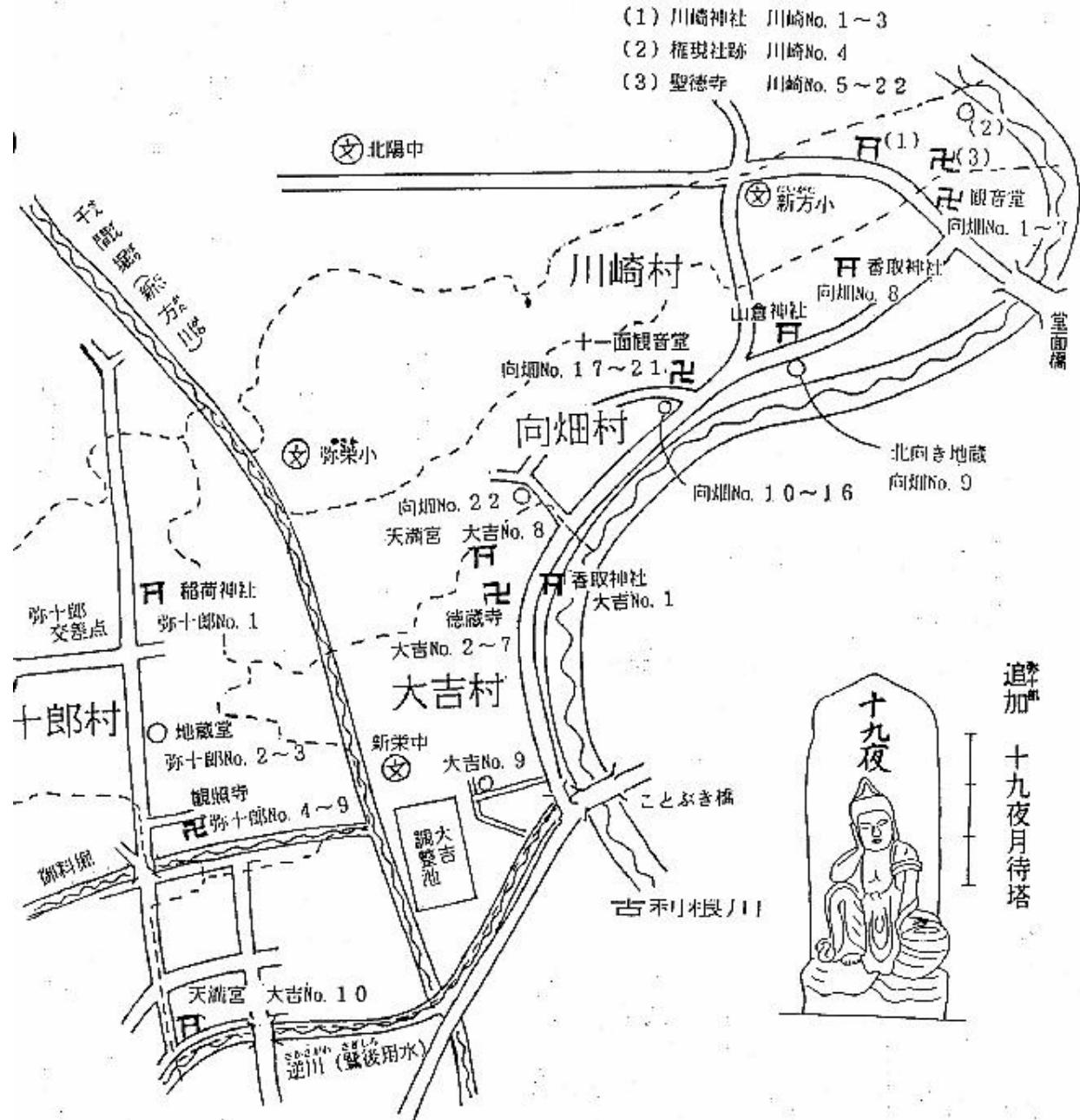


9  
普門品供養塔



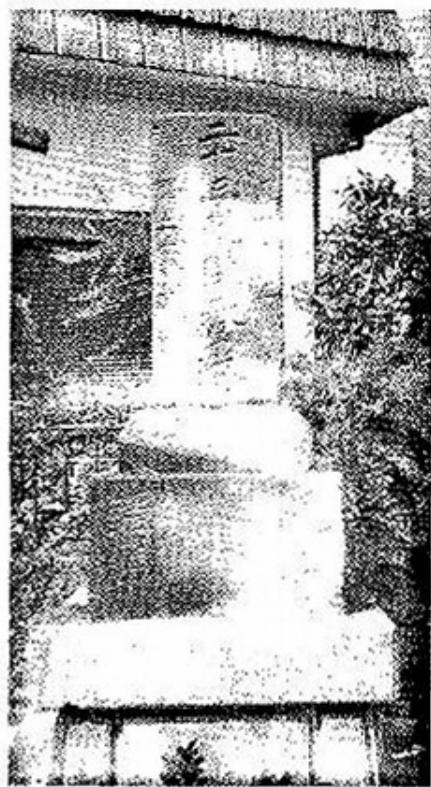
# 旧川崎村・向畠村・大吉村・弥十郎村

## 石仏案内図



## 二十三夜供養塔

高島 英一



である。その下の台の石には「観音講中」と刻まれていてこれが再建者によるものである。側に立札があるが木の板に墨書きであるため、文字が風化して黒くぬりつぶしたような状態で全く読むことができない。右下にも石があり、それを見るところの再建が昭和四十二年であることがわかる。再建者の名前が十六名これに刻まれているが、それから三十年を経過してそのほとんどの人が亡くなり、立札に何が書いてあるのか知る人もいなくなってしまった。せっかく後世に何か貴重な伝言を残すつもりでこの塔を再建したであろう人びとの心根が今の人たちに伝つていなうことになる。

この供養塔は近くの氷川神社に通じる道との角地に建つていて、その角のわずかばかりの空地にそれがある。その前はバス停になつていてその名も「二十三夜」である。バスを待つ人もここを通りすぎる人達もこの塔には全く関心がないようにみえるが、しかし、塔の前にはいつも樹が供えられ灯明や線香を手向けたあとがみられ、この二十三夜供養塔を今でも守りつづけている人がいることを示している。

この塔が天保三年に最初に造られ、その後再建されたのが昭和四十二年ということは以上のことであるが、二十三夜

というこの面白い名称はいったい何なのか、それはどのような意

味があるのだろうか、何故二十三夜塔を観音講の人達が再建

したのか、又どうしてかなりの費用をかけて再建する必要があつたのだろうか、よくわからない。立札に書いてある文面がわかれれば手がかりになるのだがと思い、探しているうちに次のようなことがわかつてきたのである。

浦和と川口を結ぶ道の一つに産業道路がある。この道を浦和

から川口に入る少し手前の道路わきに「二十三夜供養塔」が建

っている。

この地名は太田窪（だいたくぼ）という。二十三夜という名もそうだが太田窪という地名も珍らしい。この供養塔は下の台の石まで入れると高さは二メートルほどなのだが、永年車の排気ガスのせいか黒ずんでいて何かいわくのありそうな雰囲気でそびえているという感じである。石の左側面には天保三年（一八三二）とあるからさほど古いものではない。供養塔の高さは六十七センチ、巾三十センチで普通の墓石くらいの大きさ

### 立札の文面

この太田窪の地区の人達が三十年前に書いた立札のことだから誰かがその控えをもっているのではないかと思い、聞いてまわっているうちに意外なところからその内容が判明した。この辺一帯は二十三夜自治会が組織されており、従って自治会名簿を当然つくる。その名簿の筆頭にこの文面が「二十三夜塔の由来」として記録されていたのである。恐らく塔再建のとき以来代々の自治会長がこの塔を地区の誇りとして名簿の中にそのままを残していたのであろう。地区の人にそれを理解してもらおうとしたのにちがいない。探していた立札の文面は二十三夜地区の家庭ならどこにでも持っている名簿の中にはそれがあった。探していた私にとっては、まさに灯台もと暗しだった。

その内容は次の通りである（原文のまま）。

今から凡そ六〇〇年前、遠く室町時代初期、当時この地は伊勢の神領地であり武蔵野は安住の郷域であったが、源氏の將扇谷上杉定正一族の勢力争いに端を発し、小田原の北条氏泰らが加わりここに果しない戦禍が拡がり、住民の多くはその被害ばかり知れず、やがて農兵の徵發となり人々は恐怖の果におかれたのであります。

この頃当地方に起つたのが月待（さんやまち）信仰であり、後に「二十三夜まち」講として行事化されたと伝えられます。

即ち戦乱常なく、その家族の生死すらわからぬ住民はこの信仰によって安心立命、無事息災を勢至菩薩は「月天子」をして観音経を唱え祈願したもので、当時ここに住民の祈

念堂があり、今から一五〇年前、（天保三年）老朽により廢堂となり本石塔を建立したと伝えられる。

二十三夜供養塔と刻まれた正面には更に「天下泰平」と「國家安全」の文字が左右に見える。われわれが知る限りでも、平将門の乱以降、この武蔵野の地は戦乱にあけくれて農民の受難が続いたであろうことは容易に想像がつく。天下泰平と国家安全の文字には先祖からの農民たちの願いのすべてがうめられているように見える。又この文中に月待のことを（さんやまち）といっているがこれは誤りで文字の通り（つきまち）でよい。月待信仰には二十三夜だけでなく、十六夜、十八夜、十九夜、二十六夜等があるからである。当時は二十三夜信仰を省略して（さんやまち）とか（さんやさま）といっていたようである。言葉の省略がいまにはじまつたことがわかる。

又文中「月天子」と耳なれない言葉があるが、室町時代の板石塔婆に「月待供養歸命月天子本地大勢至」などの文字がみられる事から、これを引用したものと思われ、これは月におわす天の神様という意味で二十三夜の月の出を待つてその出現を通じるものである。

### 伝承されていた二十三夜講

ではこの二十三夜地区ではどのように二十三夜講が伝承されていたのだろうか。これは昭和から平成にかけてのその記録である。

二十三夜講は昭和に入つて第二次大戦を経て、戦後になつて

もこの地区の人々の厚い信仰心にささそられて続けられていた。

この講は毎月二十三日、産業道路を境に東側の農家十五戸で行われていた。各農家が順次当番をきめ、その家で太鼓をたたきながら観音経を唱え夜を過した。この講は勢至菩薩をまつて行われたにちがいないと思われるが、仏像は今のところ確認されていない。土地の古老の話では「月におわす天の神様をおむかえする行事」として行われた。月の出を待つて、それを月天子、勢至菩薩の出現としたものである。この集会は各戸の長男がこれを引き継いでいたので、この十五戸にとってはよき社交の場であり、情報源でもあった筈で楽しいものであったにちがいない。しかし戦後、歐米文化が急速に流れこんでくるに及び、年配者と若者達との考え方の違いが目立つようになった。そして昭和五十年頃古老の一人がこの集会の場で

「近頃の若者は酒ばかり飲んでいて」

と若者達を批判したことから、これを怒った若者達が参加しなくなり、やがて中絶してしまったという。

はその影をみないようになってしまった。

その最も盛んであった観音講がこの地区では毎月十三日に講をひらき、信仰の組織として生きていた。これは二十三夜講の十五戸にその近在の十二戸を加えた二十七戸で構成されていた。その日になると点在する各戸を大太鼓一、小太鼓二を持ち運び、各家々で太鼓をうちならし大鑿若経を唱えて廻るのである。経を読めない人や太鼓をうてない人は太鼓の運び役であった。これも二十三夜講と同じく各戸の長男が受けついしきたりで、最終の家はあらかじめきめられた順番でその夜の集会所になつた。

この行事は朝から始つて一戸について二十分から三十分かかってから二十七戸を全部廻り終える頃は暗くなっていた。その最終の家で嫁さん達による料理で酒をくみかわしあいの労をねぎらい親交を深めるのが常であった。土地の古老の話では、小供の頃はお供えのせんべいを読経が終ると集つた小供達にわけてもらえるので、その行列について歩くのが楽しみだったとう。

浦和を中心とするこの武藏国には近世に特筆すべき民間信仰があつた。それは牛年には観音まいり、酉年には不動まいり、寅年には薬師まいりとそれぞれに日をきめておまいりをする行事があつた。これらはすべて十二年に一度のおまいりだから、その間が長すぎるというので中回向（なかえこう）といつて六年目に中間行事を行つたりした。最も盛んに行われたのが観音まいりで、これは現代でも全国で広く行われている。又足立百不動尊といつて北は大宮、南は川口の南端までの順拝も行われたが現在では一部でしか残っていない。その一方で薬師まいり

とにかく昭和二十五年頃まではこのようにして毎月二十三日は二十三夜講、十三日は観音講が行われていたのだが、戦後生活様式が大きく変わり、毎日が多く忙になつてくるとこれを毎月やるのは大変だということになり、観音講の方だけを年一回、七月一日に限つて大祭という形で行うということを寄合できめた。そしてこれは平成の時代に入つても続けられた。従つて二十三夜塔の再建が昭和四十二年だからこの時点では二十三夜講は続いており、人數の多い観音講の名で塔の再建を計ったことが考えられる。そして塔再建後、七、八年を経て二十三夜講が

月に対する思い入れは深い。信じられないような話だが昔の人も地震や潮のみちひき、又お産のことなど満月や新月にどうも関係があるのではないかということに気がついていたようである。しかし現代は科学的にそれらは証明されて今や常識ともなるが、魚の中にも同じ行動をとる種もある。目に見えない月の力を現代人は科学の力で理解できるようになったが、明治以前は月の満ちかけすること自体神祕的で神仏のなせるわざとして恐れあがめていた。そして二十三夜（満月からかぞえて八日目）には月の出を待ちそれを勢至菩薩の出現として信仰したのである。

新月から新月までは二十九・五日かかる。そして月はいつでも兎の影のみえる同じ面しか地球にみせない。地球が自転している周りを月が自転しながら廻っているのにである。科学者の中には月が地球から飛び出したからだと説明する人もいるが、私など説明をきいてもわからない不思議な天体であることに変りない。昔の人が神仏が存在すると恐れあがめたのは無理からぬことである。

#### 浦和の庚申

「庚申信仰」の著者飯田道夫氏によると、これが中国から日本に持ちこまれた記録は平安時代からあり、仏教のひろまりと共に全国にひろまつたとされる。根本は道教で仏教や神道と結びついて月待、月待、申待の信仰を生んでいった。庚申の日とは十二支と十干（かん）の組合せで六十日で一巡する。これを年にあてはめて六十歳のことを還暦というし、丙午（ひのえう

ま）の女子が敬遠されたり、今年は子年だからといってねづみの置物が年のはじめに売れたりする。科学万能のこの時代でも私達の生活の中に庚申が生きていることがわかる。

浦和には庚申塔が多い。そしてその中心が中尾の吉祥寺にあるように思えてならない。吉祥寺は天台宗の別格本山でここから近い清泰寺には三五〇基の庚申塔があることで有名だし、寛文（一六六一—一六七三）の庚申塔をはじめ江戸時代初期の庚申塔が吉祥寺周辺に多くみられる。これらの中で吉祥寺から少し浦和宿寄りに不動堂があり、ここの中境内に二十三夜と二十六夜の供養塔がある。これは何れも文化年間（一八〇五・〇七）のもので太田屋の二十三夜塔より少し古く注目に値する。

関東地方における庚申信仰は江戸時代に入つて急速にそのひろがりがみられることは浦和周辺の石造物からも判断できるが、特に天台密教による影響が大きいと飯田道夫氏も指摘している。私はこの説に加えて吉祥寺に近い中尾の玉林院（修驗の寺で明治のはじめに修驗禁止令で廃寺）の存在も見逃せないと考へる。何故なら庚申の祈願に際し祈禱師を呼んだであろうからである。徳川期に入り、修驗社の庶民信仰に対する影響力は絶大であったと考える。中尾の吉祥寺と玉林院、それに浦和宿のつきのみやが浦和において江戸期の庚申信仰をひろめる中心であり、それが江戸幕府にうけいれられたものと思う。今改めて道ぐの神社や寺院の石造物を見ると庚申信仰は深いかかわりをもつものが多く、何か新発見につながるものはないかと歩きまわっている昨今である。

中絶したことになるが、形の上では觀音講がこれを繼承したことになる。塔を再建した昭和四十二年頃は浦和の人口が急増しはじめ、その波が太田窪地区にも押しよせてきた、激しく移り変る世相に押し流されまいとして各戸の結束をかためるために塔の再建を考えたのではないだろうか。二十七戸の融和をはかり何事によらず相談して助けあっていきたいという願いもあつたことと思われる。ところがこれも平成八年七月一日の集りで打ち切りということになった。

その理由は点在する各戸の間に分家ばかりでなく東京や地方からの転入者がふえ、その住宅で周辺が埋めつくされてしまい、加えて若い人達の関心が薄くなり、経も読める人も少くなり、太鼓を打てる人はいなくなってしまったからである。大変残念なことながら貴重な郷土の文化遺産がここでひとつ消滅したことになる。

#### 玉蔵院と調神社

二十三夜講の存在したことを示す石碑は、時折、他地区でも見かけることがある。浦和の二十三夜講はこの太田窪地区だけだったのだろうか。以下その点にふれてみたい。

浦和の中山道に面して玉蔵院という古刹がある。眞言宗で創建は平安時代と伝えられる。寺の庭に毎年大きなしだれ桜が美事な花をつけることで有名で、平成八年には新聞にも紹介されたりしたものだから遠方からわざわざ見にくる人もいるほどである。この寺の山門を入って右手に阿弥陀堂がある。現在は新らしく建て替えられているが、何年か前までここにあった古い建物のことをこの寺では「二十三夜堂」と称していた。玉蔵院

には現在石造物その他で二十三夜講がこの地で行わっていたことを示すものを見ることはできないが、この建物は明治維新の折、時の新政府により神仏分離令が断行され、近くの調神社から二十三夜講の主尊勢至菩薩と共に移されたものであった。

その調神社は通稱「つきのみや」といい、玉蔵院から中山道を六百米ほど南に位置する。この神社の由緒によれば延喜式の古社で第九代開化天皇の創建と伝えられ、広い境内をもつ。中山道に面した入口を入ると左右にこま犬ならぬ「こまうさぎ」万延二年（一八六一）がある。安政年間に建てられたという本殿の正面には柱と柱の間に二輪の兎がみえる。更に本殿の東側には稻荷社があるが、この建物は江戸中期の享保十八年（一七三三）に神社本殿として建立されたもので、これにも兎が正面軒下に三輪みえる。これらのことのみられるように月と兎の伝説がここでは神社と深い関係にあり、明治のはじめに玉蔵院に二十三夜堂を移すまではこの地が二十三夜講の中心地であつたことを考へると月待信仰との古社との関係の深さを知ることができること。

明治元年十月十七日、明治天皇は大宮氷川神社に行幸のため浦和に一泊される。つきのみやの前も当然お通りになつたわけでのため行列の通る地域の魔仏毀釈はことのほかびしく実施されたことであろう。つきのみやの二十三夜堂はあわただしく移転したことが考えられ、それ以降この二十三夜講は衰微の一途をたどつたものと思われる。

日本では明治に入るまでは大陰曆を使っていたから日本人の月への信仰

# 火消ポンプ 竜吐水

谷岡 隆夫

竜吐水(りゅうどすい)は江戸時代の消火器具である。竜が水を吐くのに似ているので竜吐水という名前がついた。

江戸時代の災害で、代表的なのは火災であった。一六五七(明暦三)年振袖火事、一六八二(天和二)年お七の火事、一七七二(明和九)年目黒行人坂の火事と江戸では大火が絶えない。このほか市中を焼け尽くす火事は何度もあった。越ヶ谷も例外ではなく、旧街道筋をはじめ、各村で火災が発生している。

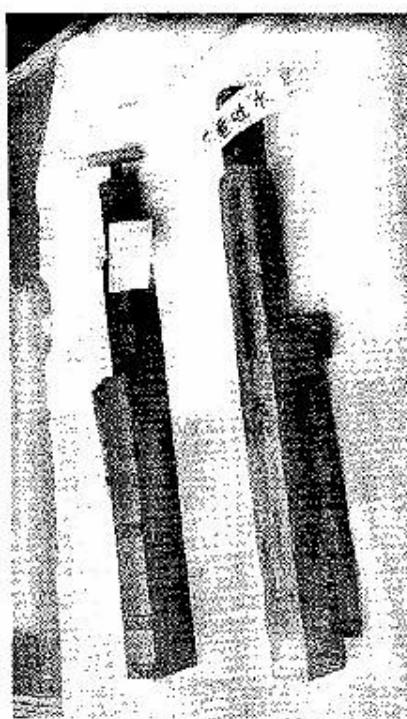
火事の対処として竜吐水は享保年間(一七一六年～一七三五年)より用いられるようになつた。

## \* 水鉄砲型竜吐水

水鉄砲型竜吐水は消火ポンプの草分である。

水鉄砲のおもちゃに等しい木製の幼稚なものである。火事の際の使用法は、水を満たした桶、又はたらいに円筒部を浸し、握り柄を上下に動かし放水する。竜吐水本体の長さは一メートルの位なので携行の便もよく、当時にとっては唯一の利器で、余裕のある家の常備具となつた。

使い易さから幕府は文政一三(一八三〇)年には町火消各組に水鉄砲を常備させたほどである。



越谷市郷土資料収納館蔵  
右の水鉄砲が天保6年作

竜吐水以前は水で火を消すということより、家を叩きこわして頬焼を防ぐ消極戦術であったところへ、この竜吐水が普及し水をもつて消火する戦法に変わつたが、この水鉄砲では猛火に立ち向かえるだけの消防能力を備えていたとは言いきれない。越谷市では越谷市郷土資料収納館蔵の天保六(一八三五)年のが最も古い。市内大房の藤井家より寄贈されたものである。長さは九〇センチ。細工人日本橋富田平吉の作と銘がある。このほか収納館に改良型竜吐水を含め、三基保存されている。この内の基は45度の角度で13メートル水が飛ぶとメモがある。テストによるものだろうか、興味深い。

変り種としては草加市立歴史民俗資料館にある竜吐水四基のうち一基は、水の吹き出し口が二ヶ所あり、効果をねらつた製作に工夫がうかがえる。

各市町村の資料館には、水鉄砲型竜吐水は一基から数基保管されて格別に珍しくもないが、夫々の形の変化を楽しみたい。

\* 木箱型竜吐水

明治になり、水鉄砲型は木箱型竜吐水（別名雲龍水）という消火ポンプにかわった。この竜吐水の大きさと形は殿様を乗せる駕籠に似て、横長の棒と木製の箱からなる。

水鉄砲と比較し、効果は抜群ながら持ち運びに難があつた。

ポンプ自体に水槽をつけており自方も重い。使用するには運搬と給水に多数の人数を必要とした。箱の中へ用水から直接水を補給しながら消火するため水がなければ折角大勢で火事場へ持ち込んだ竜吐水も、用を足さない。神戸大震災の消防車の水の補給が不円滑だったのを思い出す。

搖桿（ようかん）という横長の棒を交互に上下に動かせば水が吹き出す。吹き出した水が、木製の円筒の中を潜って放水するのと、吹き出し口からホースに直結し放水するのと二種類の竜吐水がある。

これらの竜吐水は補修や新調に費用がかさみ、評判は良くなかった。しかし、これに変わる当時の消火ポンプはなく、明治後期まで各地で作られ、使用されていた。

箱の表面には消防組の名前が大きく書かれ、個人所有のものは、名前や屋号が書かれている。横面には製作の年や製作者が書かれているが、はつきり読み取れるのはまれで、擦り切れて読み取れないものや、無記名のも結構多い。

竜吐水に魅せられて、平成八年、市内はもとより、県内、都内の保存場所へ足繁く通うこととなつた。保存場所は様々だ。市町村の資料館・消防署・防災センター・社寺院・旧民家・学校等である。



石神井神社藏  
花屋寅吉 明治30年作



越谷市消防署 谷中分署 藏  
油屋清治郎作 製作年不明

越谷市内で木箱型竜吐水は、越谷市立郷土資料収納館に四基、西新井石神井神社に一基、消防署谷中分署に一基、計六基保存されていることを確認した。いずれも明治中期の作で、内二基は越ヶ谷百五十号地 花屋虎吉の工主（作）とある。この製作者のその後の存在や、子孫の調査をしたが、現在不明である。市内で現存する竜吐水の製作者は前記の花屋虎吉の他、柏壁・油屋清治郎、東京横山町・岡崎屋茂兵衛、東京神田・牧田兼吉等が読み取れる。

春日部市では七基確認されたが、地元の柏壁宿上町の油屋清治郎の作が多い。油屋清治郎のご子孫は、現在、春日部駅前で加藤仙蔵氏が屋号を油屋といい、水道設備業を手広く営業されている。加藤氏より平成八年秋、明治時代竜吐水に焼き付けた製造人の印、油屋の焼印が物置から出てきたとの電話をいただき、早速拝見のため胸をおどらせ急行した。その焼印は数多く使用したのか摩滅していた。その時の焼印は次頁参照。

春日部油屋代々の墓は春日部真蔵院にある。静かに眠つてゐる清治郎の法名「操輪法信士」の墓に線香をたむけた。

草加市では三基確認した。旧家大川家と野口家（屋号札場）より寄贈された二基の竜吐水は、草加市立歴史民俗資料館に保管されている。もう一基は花栗町旧家新井家（現在一五代当主新井義春氏）にある。三基共木箱型竜吐水に車輪が付いている（左写真参照）のが特長である。直徑が二〇センチほどの四輪の鉄車輪であるが、ゴムタイヤではないので、出動時田舎道では難波したと思われる。大川家の製作者は岡崎屋茂兵衛である

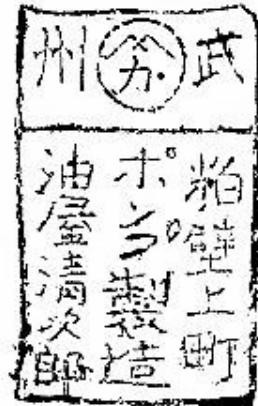
三郷市では消防署に一基展示されていたが、この製作者が同じ岡崎屋茂兵衛である。当三郷消防署員の島根善範氏は竜吐水の保存に熱心で、保存に支障がおきると、自分で器用に分解して修理したり、塗料を塗つたりして修復し、文化財保存に寄与されている。

都内では四谷消防博物館に展示の木箱型が最も古い。文久三年二月小川平兵衛とある。木箱型で明治以前の作はこの一基のみである。

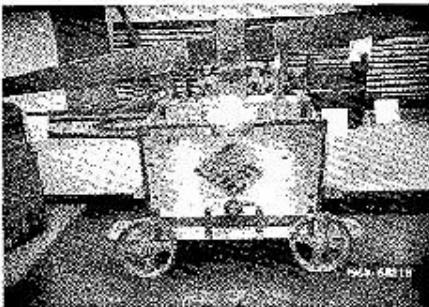
このほかにも多くの竜吐水を見つける機会を得たが、木箱型竜吐水は保存にスペースをとるのが悩みであり、資料館以外では廃棄の傾向にある。近隣の市町村にまだ未確認の竜吐水が多くある筈だ。後世にいつまでも文化財として保存を要望する一人である。竜吐水はやがて鉄製の腕用ポンプや蒸気ポンプになり、今日の高性能の消防自動車へと変貌する。

秋の台風の中、傘が飛びそうになりながら幸手資料館へ行つり、岩槻市で有るはずのところに竜吐水がなく、ぐるぐる市内を振り回されたり、吹上の埼玉県消防学校ではバス便のない長い道を駅まで歩かされたり種々苦労もあつたが、竜吐水の保存に取り組む大勢の方々や、今回親切に案内や説明をしていただいた方々には心暖まるものを感じた。

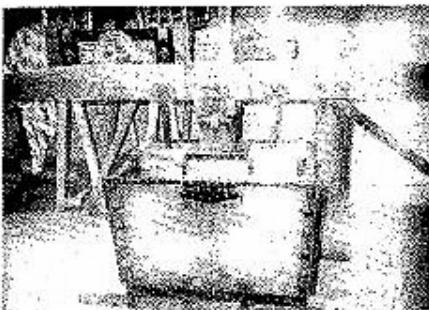
参考文献　日本消防百年史　日本消防協会編  
協力　越谷市郷土資料収納館　近隣資料館



油屋の焼印



草加市立歴史民俗資料館蔵



三郷市消防署蔵

# 武藏地名考

酒井 達男

ムソ（渠）石の灌漑排水説

ムサ（溝の多い土地）シモ説

ムチャツ（わらの根拠地）古朝鮮語説

などであるが、どれが本当なのか定説をみるに至っていない。

関東平野の内陸にひろがっていた海が退行し、海岸に新しい土地が生まれるとそこに人々が移り住んだであろう。

人が住めば言語交流があり自然発生的に地名がうまれる。

東京湾岸の地名はそうして生まれ世々代々言いつがれてきたのである。

それによってひとたび根をおろした地名は、その意味する環境条件が変化しても確かな最古の文献であると思う。

いま吾々が住む旧国名である武藏（无邪志、牟佐之、武刺、胸刺、牟射志）の地名については、日本最古の地名辞典ともいえる「倭名類聚抄（和名抄）」では牟佐之と記されている。武藏の字を当てるようになったのは、風土記編さんの命を下したものと見られる七二三年（奈良初期）の、郡郷名は「好き字を用いよ」との詔と、後年「二字、嘉名をとれ」によつたものと思う。

武藏の地名語録について、手許の辞典を見てみると「諸説あつて名義定まらず」となっている。その諸説とは、江戸時代（加茂真済）から種々解釈されてきている。

主なものをあけると

フサ（麻）の転化説

武藏の隣国になるが、千葉県にヤサシの語をもつ地名（旧名）が三ヶ所程ある。

旭市に編入の矢指（ヤサン）村

白里の小食土（ヤサシド）

大原町の矢差土（ヤサシド）

サンと言つても焼畑の意である指（サシ）とは字が同じであつても、この場合地形等から見て同じ意味には考へられない。

ヤはどうみても水湿地の意であろう（谷津、谷地、矢部、洪谷、野洲、安）。

矢指村は九十九里海岸の近くにあり、内陸側を海に続く水湿地が深く差し込んでいる。

小食土、矢差土ともに水湿地の差した所であるが、土（ド）については、大分前になるが、川崎の某会のバスツアーに参加して現地を見た感じでは、差し込んだ場所という意味に感じた。

僅かな体験だけでははつきりと表現はできないが、ムサシのムは水（ム、ムズ）ではなかろうか。

ムのつく言語や地名が少ないので、ムの語がミヤウに変わつて

いる為であると思われる。

ムズ（水） || ミズ、ムナギ（饅） || うなぎ、  
ムメ（梅） || ウメ、ケバラ（茨） || ウバラ、  
ムマ（馬） || ウマ、に変わり

地名ムタ（牟田）はウダ（宇田）と同じものである。

武藏については種々解説があるが、千葉県内のサシ地名から推考すると、ムは水であり水沢地が内陸深く差し込んでいる地形上からの地名ではなかろうかと愚考している。

タケゾウならぬムサシ（武藏）地名は、大分県国東半島に二ヶ所もある。その地形地質はどのようにになっているのか、自分の目で確かめたい気持があつても、仲々思うように実現出来ないのが残念である。



## 明治の人の人

### 無学の悔しさ「連帯保証人」

T・K 生

#### 《保証人》

私の祖父Kは、明治三年生れ、昭和二十九年の秋八十四才でこの世を去った。

三十九才のとき友人の借金の連帯保証人となり、大変な失敗をした話である。

この失敗談は祖父から父に、父から私へと、私から子供達にしつかり語り継ぐ責任があると思う。再度こんな失敗を繰り返さないために、運が悪いといえば運の悪い話である。

明治六年、公立越巻学校が万蔵院と云う寺（七左町観照院の末寺）に開設された。三年後に祖父は小学一年生として入学している。当時、義務教育は三年であった。

貧しい暮らしであつたから学校教育はこの三年間だけで他に学問らしい教育は受けていない。従つてむづかしいことは皆目わからない。

時は明治四十二年、友人のOさんのたつての頼みとあって借金、金一百円の保証人となつた。

貸主はこの地方きっとの当時の高利貸N氏である。借款人は友人のOさん、保証人は祖父K。

小学校二年の学力では保証人と連帯保証人との区別も解らない。

「保証人は万一借金が返済しえなかつたときは借用人に代つて返済の責任を負うもの」位は「耳学問」によつて知つてゐた様だつた。

然しこんなに早く自分の身に災難がふりかかつてくるとは夢にも思わなかつた。

○さんは「決して迷惑はかけないから」と何度も何度も云つたそ

うだ。

借用人の言葉を信じて保証人となり借用證書に署名・捺印をしたしかし貸主（債権者）は必ず「連帯保証人」とする。

又、貸主N氏は「保証人も連帯保証人もたいした違いはないから

と云つたそうだ。

「決して迷惑はかけないから」の言葉を信じて保証人となればそれ相当の覚悟が必要だ。

それがいやなら保証人は断然」とわるべきだったと言いたい伝えられ

そのときどんなふうに断るか。

「保証人は絶対なるなと親代々の遺言なので」或は「私の家でこれこれこういう失敗をしているので……」、又、会社員なれば会社の社訓の一つに『保証人にはなるな』とあり社訓に反すると

「クビ」になつてしまします……』と。

まして白紙委任状や印鑑証明、実印を預けることなどは絶対に不可である。

若しそう云う羽目になつたときは書類をよく読んで、よく確かめ、仮に金額欄などに空白部分があつたときは、必ず自分で書き入れ

たうえ署名・押印をしようと。

明治四十三年の夏は、かの有名な「四十三年の大洪水」が発生した年である。この大水害はその年の八月一日から十二日まで降り続いた雨によつてひきおこされたものである。

農民は「血の雨が降る」と云つたそうだ。

八月十三日とうとう床上三尺の浸水という水害となつた。

減水後、債務者（借用人口氏）は法定伝染病の腸チフスにかかりてしまった。一度は快方に向かつたが「どじょう汁に白飯が喰いたい」と妻にねだつたそうだ。はじめは食つてはだめだと止めたが何度もねだるので、妻がどうどう食べさせてしまつた。（この時代どじょう汁とぎんめし「白米めし」はうまいものであつたらしい）

その後Oは再びチフスが悪化して死んでしまつこととなつた。

### 《求債権》

「天災は忘れたころにやつてくる」

「

貸主より額面の金は借用人に渡り、しばらくは何事もない。

丁度洪水で保証人になつていることを忘れたころに問題は生じた。突然債権者N氏から一通の内容証明書が配達証明郵便で連帯保証人祖父Kに送られて來た。

「債務者Oは過日腸チフスで死去されましたが貸金の三百円也ど利息は返済されておりません。ついては連帯保証人の貴殿に債務弁済の責任をとられるよう通知いたします」とまあこんな文面が当時の「候文」で送られて來たわけだ。

祖父はOの家にゆき借金のことを話したが家族からは「申し訳け

ない。申し訳ない。」と云われるだけで何とも解決の方法はない。

（こんな場合ひどいときは借用人は行方不明となる）。

小学校三年の学力では解決法は見当もつかず、当時の知恵者Sさんに相談に乗って貰ったと謂う。

Sさんの答えは、

一、連帯保証人のあなたは保証弁済の責任は免れる」とはできない。

二、早く保証弁済しなければ利子がかさみ莫大な金額となる。

三、債務者（借用人）は死んでいるのでOに対する求償権も消滅してしまっている。

と云うことであった。

当時の法律でも同様の解釈であろう。

連帯保証人になつたときの恐ろしさは「突然高額なお金を一括

して支払え」という請求だ。

連帯保証人にはその様な用意はない。それだけに突然家計を圧迫

し、いままでの生活設計は狂つてしまう。

法律に通じている者なればこんなときただあわてるだけでなく

債権者（貸主）のもとへゆき、負債はいくらか、債務者（借用人）の財産に抵当などをつけ担保をつけたるのか、その担保はどう

の様な状態かなどを事情を聞き、その上で誠意をもつて交渉する

と云われている。

然し無学な一農民では、そんな才覚はない。

債務者に代わって保証人が債権者に借用金を支払うのだから、

その金額は借用人に請求出来る。これを「求償権」と云うそうだ。

しかしながら祖父の立場はますます悪くなつた。

それは借用人が死んでしまつてゐるからである。

求償権はOさんにだけ出来るもので家族には無効である。

求償権はこの時点で消滅してしまつてゐるということだ。

債権者（貸主）が債務者（借用人）の財産に担保権を持つてゐるときは、保証人に担保権が移転してその担保権を実行することが出来るとされているが、現実には債務者には既に財産がないのが普通である。

法律上は保証人の地位保障していてもカラ手形同様のものであるOさんもその様な者だった。

Oさんもその様な教訓はやはり生きている」と言わざるを得ない訳だ。

祖父は止むを得ず宅地一五〇坪をO氏に売却し、娘を一ヶ年三

〇円の給金で奉公に出して不足分は借金して債権者N氏に保証弁

済したということだ。

この損害はあとあとまで家計を圧迫し貧乏の因であつた伝えてい

る。人の善意がとんだ所でうらぎられたこととなつた。

口惜しさ、馬鹿らしさ、どうしようもない、どこへもどなりこん

でゆく場所もない哀れな身の上を自ら呪うものである。

《それから》

祖父はどこへもこのやり場のない失態をジーット我慢するより他なかつた。後年「頑固一徹」「いっこくな人」と世間から云われ様だがこんな問題があつて性格が変わつてしまつたらしい。

人を信ずる気がうすらいいだからであろう。

よく言つていた。

「人を見たらドロボーと思へ」「火を見たら火事と思へ」

こんな謬があるが案外今でも生きた教訓ではなかろうか。

私は法律には素人で何も解らないが「連帯保証人」の責任を調べてみたことがある。  
ただの保証人（単純保証人）であれば保証人のとり立てに「マッテクレ」が効く。

時間がかせげれば案外よい案も出てくるものだ。

又、借用人の財産からとれるだけのものをとつてくれと言える。  
万一保証人が死んでしまえばそれで終わりである。  
ところが連帯保証人には「マッタ」が効かない。直ちに弁済しろ  
と云われても文句が云えない。

「差し押さえ」に出られてもしかたがないと云うわけだ。  
万一連帯保証人が死んだ場合はその責任は妻に移る。妻が死ねば  
子供に移る。相続には関係なくどこまでもその責任は切れないそ  
うだ。だから早く整理して断ち切る必要がある。

現今、貸方である銀行、農協、信金、でも保証人は必ず連帯保証  
人とする。

連帯保証人がいなければそれ相当の担保物件が必要である。

昔から財産家が「破産」とか「倒産」という事件にまきこまれ  
る事例があるがその多くは第三者の連帯保証人になつたためだと  
いわれている。

ゆめゆめ連帯保証人となるには注意しなくてはならない。

## 生死を分けた運命

山梨 陸司

昭和十四年、旧中を卒業した学友は北支、中支より方島、レイ

テの戦場で玉碎。

早生まれの私は、幹部候補生として中支にのこり常徳殲滅作戦  
の連隊残留部隊となりました。

主力連隊が常徳作戦に赴いた為、残留部隊の手薄を見極めた敵部  
隊は信陽攻撃（静岡駐留地）をかけてきました。

幹部候補生教育隊五十名が戦闘主力となり、常徳作戦に参加出来  
ぬ弱兵と共に迎え討つ。

留守連隊長は牧野大尉、突撃二回目で私は兵二名を連れて戦場整  
理に赴く。内心助かったと思う。  
途中牧野大尉より、何隊かと言葉をかけられると同時に大尉は頭  
部貫通にて戦死す。

私達も機銃掃射され田の畦に逃れ伏し重機点射の合間を見て安全  
な場所に移動す。

あとで気が付いたのですが、その時腰に下げていたお守りと、  
中に入っていた出征直前に病死した妹の写真が粉碎され物入れ  
(ポケット)に入っていました。

その時の戦闘で、我が方は牧野大尉以下五十六名の戦死、六十二  
名の戦傷でした。

言葉をかけてくれた隊長が戦死、同じように掃射された私は腰のお守りだけで助かりました。

柳州攻撃の時は、臥竜山、馬鞍山、盤龍山は占領したものの敵の砲撃で山の形が変わる程撃ち込まれ、友軍が山を下り逃げる様子を見ておりました。

私達が占拠した黒龍山には一発の砲弾もこす、山の中腹より煙突があり、不思議に思っていましたところ、突然大音響と共に山が爆発し、私共は爆風で投げ出されましたが無事でした。山の下は敵の兵器庫だったのです。

砲撃されぬのも、むべなるかな。

重慶へあと一日行程の黎明関、南画の通りの乱立する岩山、片や断崖絶壁の渓谷、四尺位の石畳の一本道、黎明関爆破と同時に突撃する為、岩山にへばり付いていたところへ迫撃砲弾三発の直撃を受けた時も私のすぐ横で破裂しました。

必ずやられるのに無傷とは、十名が戦死、八名だけで突入敵銃座を占拠しました。

尻込みしなかったのが幸いしました。

復員して仕事もなく、丁度山を買ってあつたので山の木出しをしていました時の事でした。

架線の帰り線が荷に引っかかり、一丁鉤で下り解いているとき架線が切れました。

今まで十人中十人は死ぬはずが、山から一本だけ出ていた木に尻が引っかかり、途中バウンドして下に落ちました。

何処か真暗やみな処へ引きづり込まれそうになります。

何くそ死んでなるものかと思うと明るい処にもどり、それを何回

か繰り返している内に気が付き、日をあけた時は全ての物が真黄色でした。

木は河原の真中につきささっていました。

生死の瞬間を考えて見ますと、突撃の時の雨霰と来る弾が当たらぬのは怖さを超えると、身体より何か光でも出て避けてくれるのではないかと思う程です。

又、凡ての事に対しても絶望せず、何くそと頑張ることです。

勿論運命という紳のある事と存じますが不思議なものです。

復員してより朝晩仏壇に水をあげ、三千の戦死した戦友の冥福を祈っています。



## 越谷の水対策

水上 清況 (現況)

昔から「水郷こしがや」と呼ばれるほど、水に恵まれたわがまち越谷。

私どもがここ越谷に居をかまえたのは二六年前の昭和四五年である。それ以来、水について思いもよらなかつたいろいろな問題に遭遇してきたが、市や県や国の行政によりその対策・改善の推進がなされ、目に見えて住みやすくなってきたことは喜ばしいことである。

つれづれにその記憶の糸をたぐってみようと思う。

### (一) 地盤沈下(上水道)

引越してきて間もなく、小学生の息子が夏休みの自由研究に「越谷の地盤沈下」を取り上げるという。

当時、地盤沈下は越谷市ののみならず埼玉県東南部の公害として社会問題化していたのである。

私は越谷市の現状と地理を知る絶好のチャンスとばかり、息子のお伴をして実情調査の手伝いをしたのである。

#### ① 市の净水訪問。

どこの净水場か忘れてしまったが、職員の方が揚水・浮化・配水施設の案内と現状の説明を親切してくれた。

#### (原因)

越谷市は沖積の軟弱さが地表面から厚く発達しているので、もともと地質的に地盤沈下の要因をもつてゐる。

近年急速に工場及び人工が増加したため、地下水の過度の汲み上げによる。

埼玉県下でも有数の地盤沈下地域の一つであり、過去十三年間で一・一mも沈下した所がある。

又、年間最大一七四mm沈下地点もある。

建物のぬけあがりが多発。

地下の深いところまで杭打ちをしてある大きな家が竹の子のように浮かび上がる現象。

橋げたや深井戸の鉄管などのぬけあがりもある。

水はけの悪い地域ができる。

広い範囲にわたって沈下が進むと周囲にくらべて土地の高さが低くなるため、雨水などの水はけが悪くなる。

このため、水田が大きな池になつたり、都市部では一寸した雨でも床下浸水など水害につながることがある。

#### (対策)

現在、工業用等の新規採水は禁止。しかし既存のものには規制がない。

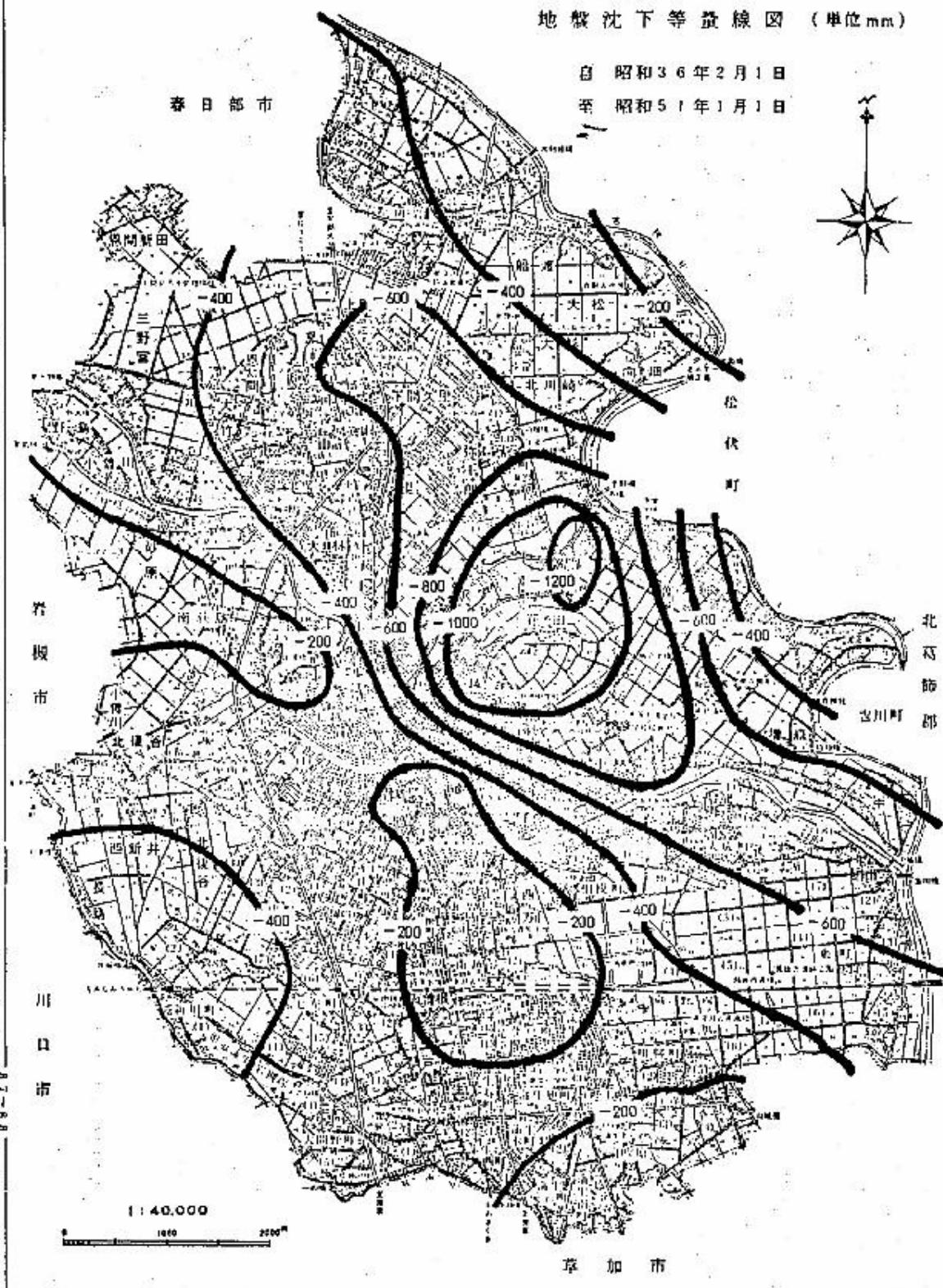
工業用水の循環使用・再生利用等の水利用計画の合理化を指導する。

上下用水水源としては、現在市による地下水のみの採取であるが、利根川水系の河川による県営水道の給水を昭和四九年度より受けることになり、地下水から河川水への転換が図ら

地盤沈下等量線図（単位mm）

自 昭和36年2月1日

至 昭和51年1月1日



れることになった。

埼玉県水質保全課は九六年八月二十二日、前年一年間の県内の地盤沈下の調査結果を発表した。

## ② 現状確認

地盤沈下の実情は左のとおりで、大変驚愕した。

(浄水場) この浄水場自身の建物が約四〇cmぬけあがっていた  
(学校) A小学校では、建物入口の階段が約四〇cmほどぬけ  
あがり亀裂を生じたため、階段を継ぎ足した。

犬走りも長い範囲で浮き上がっていた。

(中層住宅) B住宅を見たが、A小学校とほぼ同程度の状況。

(橋) C橋は橋げたがぬけあがり、川をはさんだ橋の両端  
が二〇・三〇cmとアンバランスに浮き上がり、路面  
に土盛りしていた。

橋床や欄干に亀裂が入り、見るからに危険な状態で  
あった。

昭和四九年より江戸川を水源とする県水の受水に転換され、地  
盤沈下の問題は沈静化しつつある。

現在越谷市の上水道給水はほぼ一〇〇%に達している。

その水道水源である利根川水系には、現在矢木沢、奈良俣、藤原、  
相俣、下久保、菌原、草木の七つのダムと渡良瀬遊水池があり、  
ここから流れ出た水ははやがて利根川から江戸川に入る。そして  
県営の庄和浄水場と新三郷浄水場で江戸川から水を汲み上げ、送  
水管で市内の浄(配)水場へと送られてくる。

地盤沈下は解消しつつあるが、代ってこれらの水ガメの渴水問題  
が浮上している。

① 環境庁が地盤沈下の目安としている一cm以上の沈下があつた地域は、前々年の二十分の一の面積に減少、六一年の観測開始以来最小となつたものの、北川辺町や栗橋町など県北東部では依然として沈下が進行した。

最も沈下が大きかったのは、越谷市千間台東の四・三cmで  
同市弥生町では六一年からの累積沈下量が百七十二・八cm  
に達した。

同課の試算では、沈下した土地の埋め戻し費用などの被害額は最低でも十億円に及び、八一年からの十五年間で被害合計は五百二十五億円と推計している。

県内の地盤沈下は、上水道の水源が地下水から河川表水流へ転換されつつあることから、ここ十年余り沈静化傾向だつた。

ただ、北東部では、もともとが軟弱地帯で、地下水への依存度が高いため依然として沈下が継続し、東部地域の越谷市でも、地下水脈に沿つて一部地域に井戸が集中し、単位面積当たりの揚水量が多いため地盤沈下が進行しているとみており、県では対策を急ぐことにしている。

(九六年八月二十二日、読売新聞朝刊)

### (一) 集中浄化槽の維持・管理(下水道)

わが家は宮本町五丁目一三一区画の分譲地内にある。

理されるが、その維持管理はすべて居住者の責任で行うことになっていた。

昭和四六年（一九七一）に結成されたわが自治会の事業の中でこの集中浄化槽の維持管理は最大の案件であった。

例え一時でも浄化槽の休止は許されず、朝夕の機能チェックは欠すことができなかつた。施設管理担当者の選任、保守点検、汚泥調整、注薬、清掃等の専門業者への委託、修理。

入梅や台風時の河川水位上昇による逆流、雨水の流入、オーバーフロー等。大修理のための費用の捻出。

担当者の心労と費用の負担は大変なものであつた。

自治会としては浄化槽の市への移管を何度も市へお願いしたが聞き入れられず、越谷市の公共下水道の供用開始さえ不明のまま長い期間が経過したのである。

越谷市はやゝと昭和五八年（一九八三）四月より公共下水道の供用を開始、先ず越谷駅東口付近、南越谷、蒲生地区の一部などから実施された。

平成二年（一九九〇）四月、やゝのことわざ地区の供用が開始された。実際に長い二〇年間であった。

因みに市の資料によれば、公共下水道の普及率は順調に進歩し、平成七年度末で六七%、平成八年度末で七〇%になるという。

### （三）河川の氾濫・水害（浸水）

土地が低く河川や農業用水路が縦横に走る越谷市では梅雨や台風の季節にはいつも水害の危険にさらされてきた。

中でも昭和五七年（一九八二）九月十一日の越谷市は台風十八号

の直撃をうけ、浸水家屋六、四〇三戸の大被害を受けた。

（越谷市勢要覧9-6「越谷市成長の軌跡」）



中川・綾瀬川流域浸水予想区域図

昭和六三年（一九八八）に建設省関東地方建設局、中川・綾瀬川流域総合治水対策協議会が「中川・綾瀬川流域浸水予想区域図」を作成しており、これには次の事項が明示されている。  
① 土地の形成要因からみて浸水の可能性のある区域。

② 現時点において概ね一〇〇年に一回程度起きた大雨で、

二日間の総雨量三五五mm（昭和三三年九月の狩野川台風時の熊谷地点観測雨量三〇七mmの約二割増し）があった

場合に浸水の予想される区域及びその程度。

③ 浸水実績区域（昭和三三年九月の狩野川台風、昭和四一年六月台風四号、及び昭和五七年九月台風十八号のいずれかで実際に浸水した区域）

これによると越谷市のかなりの区域が浸水の可能性ありということがある。

#### ※ 最近あつた雨量の一例。

平成八年の七月初旬、首都圏に季節はずれの台風五号（中型で並の強さ）が迫り、梅雨前線の活動を刺激し、千葉県を中心に大雨をもたらした。七日の降り始めから十一日の未明まで四日間とはいえ総雨量は南関東の各地で三〇〇mmを超えて、牛久市と伊豆大島では四〇〇mm、茂原市で三九三mmに達した。

茂原市や白子町周辺では床上・床下浸水が三五〇棟。

（読売新聞七月十一日、夕刊）

これ丈の雨量が中川・綾瀬川流域に降つたら、越谷市はどうなつていただろうか。

埼玉県東部の水害軽減のため、越谷市はもとより周辺の市町も県や国と共同で総合的な治水対策を推進しつつあることは、衆知の通りである。

① 平成三年大吉調節池完成。

広さ一〇、三ヘクタールのこの池が台風や集中豪雨の時に四〇万トンの水を貯留し、新方川流域の住民を洪水から守る。

② 平成八年五月南北二本の綾瀬川放水路が東京外かく環状道路沿いに完成した。（北側は平成四年に完成）

（レイクタウンボイス、グラフ越谷一九九六、六号）

（彩の国だより、一九九六年七月号「東部の話題」）

③ 治水対策と都市づくりを同時に行う越谷市の「水と共生

レイクタウン整備事業は、平成八年都市計画決定を行った。市南東部の大相模・川柳地区の約二三五ヘクタールの地域に調整池を核とした水辺都市を創出するもので、この人造調整池は広さ約五三ヘクタール、常時約六十万トンの水を貯留し、元荒川・中川の治水機能をもつ。

（越谷市勢要覧96「レイクタウン整備事業、都市計画決定」）

貯水量や放水量を数字でいわても、水害にどれだけ効果のあるものか、残念ながら私には理解できない。

市あるいは関係当局が、現時点及びレイクタウン完成時のそれについて、例えば、この区域は浸水無しとの安全宣言とか、二日間どれ位の降雨量なら大丈夫とか、あるいは昭和六三年のように浸水予想区域図を作成してくれれば、大多数の越谷市民にも理解され、喜ばれると考えるが如何。

最後に「水郷越谷」の環境を生かしつつ、潤いと安らぎのある快適で魅力あるまちづくりに期待しつつ。

## 子どもたちを育んだ「八条用水」

池田 仁

昭和一〇年（一九三五）前後、腕白だった子どもと八条用水とは、「どんなかかわり方をし、思いをしてきたのだろうか」夏休みの暮らしの場面を追うて回想してみたい。

清水で緩やかに南流。

大相模や八条（八潮市）領域の大穀倉地帯の灌漑用水路として江戸時代当初より灌水の機能を果たし、住民の暮らしに潤いを与えてきた。

初夏ともなると、広大な水田地帯を貫流する川辺にはマクモや葦が繁り、川底にはいく条もの藻が水流のままになびき、水生群落が各所に分布していた。それらは、水鳥、蛙、魚類をはじめ、あまたの水棲生物の楽園をつくっていた。

この頃、各農家から一家別（やべつ）と称して、共同で水流を円滑にするために、長鎌でもく（藁）刈り作業を行った。年中行事の一つとして継続してきたものである。

川辺に沿った農道の片側の所々には、稻かけ用のハンノキ並木が植樹して在り、その緑蔭の下は農作業者たちの恰好の休憩所とな

っていた。

枝打ちしては燃料用のまきに役立てていた。

現在では見ることができないギンヤンマや毒トンボなど、川面上を自由に飛行したり、葦の葉に羽を休める快適な環境を川は提供していた。

三・四年生の頃、友と網や竹棒の先に粘るモー子を塗った竿を用い、息を止め、わくわくしながら昼食時も忘れて、昆虫を追いかけ採集したことがあった。

夜になると庭先まで、あちこちから、ピカリ・ピカリとおしゃら淡い光を点滅させ舞い飛ぶホタルに神秘性を感じていた。七月の田の草取りの忙しい頃、恒例の虫追い行事が、夕暮れから部落を挙げて盛大に行われた。

寛政年間頃からの伝統行事で、「稻に虫がつかないように」「豊作になりますように」と、福壽院の地蔵仏に、代表の長老や旦那衆が灯明を灯し、お酒や野菜を供え、觀音経を唱えて祈願する。

終わると、若者や子どもたちそれぞれ作つた自慢のたいまつに灯明の火をつけてもらい、鐘打ちを先頭に「ホウイ、ホウイ…」と呼び、あかあかと燃やしながら、用水沿いの農道を長蛇の列をつくって走った。

折りの呼びは、やみの青田遠くに拡がり、川面には炎の影がゆらぎ幻想の世界を現出していた。

この行事は害虫退治に効果があり、豊作のいかんが家庭経済を左右したし、また部落民の団結心を維持していく上で意義があり、大切に受け継いできたのだろう。戦後は惜しくも消滅してしまった。

豊漁の日は感激的な喜びで、得意顔で帰宅した。

午後になると、友を誘い、トマト・マクワウリを手拭いに包み八条用水に泳ぎに行く。

途中、用水路に面した道角に、明和七年（一七八七）に下総馬喰講中に依つて造塔されたという、頭に不動尊像を戴いた馬頭観世音像の石塔が建立してある。

おばあさんたちが生花を供え合掌している姿をよく見かけた。私も時たま無意識にびょこんと頭を下げることがあった。



八条用水の面影

子どもたちにとって、特別な日を除き、夏休み中の午前は魚とり、午後は水浴び（水泳）が遊びの日課となっていた。

二〇分足らずで朝勉を済ませ、麦わら帽子をかぶり、友と釣り具やびんどを用い、夏草の匂いを鼻にし、わくわくしながら魚をとった。経験から魚の居場所をよく知っていた。

辺りの草の群生から、ヨシキリや食用蛙のけたましい鳴き声

を耳にしたり、突然姿を現す蛇や野ねずみに度肝を抜かれたり、

洋々たる、青田から渡つてくる涼風に快感を覚えたり、のどかで

豊かな農村風景の良さを味わっていた。魚は家族にとって重要な

蛋白源であった。

午後二時頃になると三〜四〇名近くの黒ん坊が集まる。泳力差や游泳内容によつて仲間を組み、掛け声や歎声を挙げた。

鬼あそびやかくれんぼ、橋の下くぐり、橋上からの飛び込みに無理に勧められ、びくつきながらも失敗を重ねて成功した時の感動。武骨な上級生だったが、よく技法を教えてくれた。時には、大人も仲間に加わり、一層盛り上げてくれた。ほとんどの子が八条用水で泳ぎを覚えた。水難事故は皆無だったと思う。

また、川辺の縁陰に縁台をならべ、縄をないながら親しげに声をかけて見守つてくれるおじいさん。

孫の面倒をみながら、茶を飲んでるおばあさん。

のんびりとした人情味溢れる農村の風土性が漂つていた。

子どもたちが去り、静寂さが戻る。小鳥がそろそろ寝ぐらに帰

る頃、田の草取りに精を出していたお百姓さんが家路に着く。

家々に明かりがともり、夕飯の支度が始まる。

たなずで食器や野菜、農具を洗う。風呂桶に用水の水を運ぶ。

行水をしている人もいる。

どこでも見られた黄昏時の川と密着した素朴で心豊かな生活様式の光景であった。

八条用水は苗代づくりの春から、稻刈りの始まる初秋まで増水

期であった。

八条用水は清水で、浄化力があり、命の躍動を育み豊かに生きてきた。

人々は廃棄物や汚物を捨てることはしないで愛護してきた。

用水に親しみ、多面にわたってかかわり、深く恩恵を受けてきた用水があつて人々の暮らしがあり、暮らしがあって用水があつた各たゞなには、水神様が祀られていた。

現在の八条用水は、流域が都市化し、流通センターや住宅が建設され、農地はほとんど潰滅、用水の機能が失われている。

平成五、六年の改修工事で、川幅を縮小し川の三面をコンクリートで固め、ガードレールで柵をした。水生植物の影はなく、水は汚れ、限られた水中生物のみが、微かに生存している。

人々は用水から遠ざかり、川の文化は衰えてしまった。数十年まえの共存共生の姿は夢物語となってしまった。何とか、川の命を甦がえらすことができるだろうか。

## 越谷で出会い影響を受けた人

青山 栄吉

人生にはいろいろとの出会いがある。

そして、その出会いが時には人の生き方や、関心をもつものに大きな影響を与えることがある。私にもいろいろとの出会いがあつた。

越谷に来て十年程度の歳月が流れ、四十代に入つたころ出会い影響を受けたのが大袋で碁会所を開いていた席亭池田氏です。池田氏は平成元年六月享年五十八才で他界されたため、約十一年続いたこの碁会所も閉鎖された。

今、私は囲碁を趣味の一つにしているが、若いころは、白と黒の石を互いに碁盤に並べ、しかも勝負がつくまで結構時間がかかり、その間対局者は碁盤を睨みながら時々ぼやきの台詞を言つたり、タバコを衝えながら考え込むなど動的要素に乏しいムードから何と陰気臭いゲームかと思つていた。学生の頃囲碁の好きなのが仲間にいたこともありルール程度は知つていたが、それ以上踏み込もうという気持ちになつたことはなかつた。それが池田氏と出会いがきっかけとなり、碁碁に関心をもつようになりだんだん惹かれていく、いつま間にか熱中するようになつた。

私が池田氏と出会つたのは昭和五十二年。暑さも和らぎ秋の気配が出始めた九月下旬の日曜日でした。遅い朝食をすませ新聞を読んだ後テレビを見ていたが一区切りついたので大袋駅近くに住んでいる知人の家に顔を出すつもりで家を出た。大袋駅が視界に入る所まできた時、大袋碁会所開店を祝う花輪が目にに入った。

近づいて花輪の立っている後の家を見ると「大袋墓会所」という縦長の木の看板が掛っており、引戸は半分程度開けたままになつていて中を覗いてみると十人近い人が一杯やりながら楽しそうに話をしていました。その中の一人が私の姿に気がつき「どうぞ中に入つて一杯いかがですか」と声をかけてくれた。私は軽い気持ちで中を覗いただけでありそのまま通り過ぎるつもりでいたが声をかけてくれた人と視線が合い、又その場の楽しそうな雰囲気に一瞬の迷いが生じ結局招き入れる言葉に従つてしまつた。中に入つて話をしているうちに声をかけてくれた人が席亭とわかつたがその場のなりゆきでオーブンセレモニーに参加しただけであり、再度顔を出すつもりはなかった。しかし席亭や集まつた人達と雑談をしているうちに話にのめり込んでいた。話にはズミをつけたのはアルコールの力も働いたと思うが集まつた人のほとんどが越谷に移つて来た人達であり、互いに接觸を求めている見えざる力が作用したのかもしれない。セレモニーが終わり墓会所を後にした時には、来週また顔を出してみようかという気持になつていた翌週の土曜日墓会所に顔を出すとすぐに十組程度が墓盤を覗んでいた。席亭が私の姿を見て「一度打つてみましょう」と井戸で打ってくれた。打ち終わつた後「なかなか筋がいいですよ」といつてくれた。外交辞令を含む台詞とわかっていても悪い気持ちはせずそうですかと半分以上その気になり六級でスタートすることにした。六級というランクは相撲の番付でいうなら「序の口」程度でしよう。

私が墓会所に顔を出す毎に来る人は増えていた。料亭など客商売の所は女将の人柄や客扱いのうまさが繁栄の大きな要素となつて

いるように、墓会所も席亭の人柄は大きく影響しているように思う。人柄は受け止める人によって異なるが、人生経験の中からにじみ出るものが何となく人に伝わるものだと思う。

池田氏は若い頃長野の佐久を出て上京。クラブのボーカルやバーテンをやっていた。血氣盛んな若者だったため暴力行為を含む過激な場面を経験するなど結構糺余曲折した路線を歩んできたようだ。しかし何となく人に好かれる側面を持っており家庭を持つまでの男女関係もそれなりにあった様だ。このようなキャリアが背景となつてあるのかパンチ力のある話し方の中にも何とはなしに漂う哀愁を帯びたムードが人を惹きつける魅力となつているのかもしれない。池田氏が墓を始めたのは、彼がバーをしていた店に日本棋院の人達が来ており、話をしているうちにさそわれて始めたのがきっかけだつたという。池田氏が大袋墓会所を開いた時はアマ三段。

私が墓会所に顔を出すようになつてから半年後、墓会所の月例大会で準優勝し五級に昇格した。そして二年後初段になつたころには通勤電車の中は墓の本を読む格好の場所となり時間の経つのが気にならないようになつて行った。今から三年前に日本棋院三段を取得したが、大袋墓会所閉鎖後は越谷の墓会所に顔をだすのも楽しみの一つになつてゐる。ただ勤務先が遠くなつたことと休日が少なく勤務時間が長いため日曜日は疲労が残り、郷土研究会の史跡巡りに参加できないのが辛いが、一度の人生であり都合をつけていろいろやりたいと思っている。時々池田氏と親しくしてい人との会話をすると、何がきっかけで親しい関係が出来るかわからないものだと言うが特にこのことを痛感している昨今です。

# 谷中町書き書き

谷岡 隆夫  
小原勘三郎

## 町のようす

越谷市南西部にあり、赤山街道・出羽小学校・谷中消防署にかけて谷中町がひろがる。近年、総合技術高校が開設され、若い世代の歓声がひびいている。

以前は上組・中組・下組・三ツ谷の各部落にわかれていた。

昭和四二年、草加バイパスの開通により町は二分された。

三ツ谷は宅地化がすすんだ。バイパスより西側は屋敷森を背にした農家が点在し、そのうしろには広い水田がひろがる。農村のおもかげがのこる地区である。

## 由来

谷中町が開発されたのは、元和五年（一六一九）ごろと文献に記されている。

四丁目・堀井家には、西新井・前谷から移ってきた言い伝えがあり、慶安（一六四八～五二）の年号のはいったご先祖の墓石

が二基ある。同家が谷中町で最も古いらしい。

三丁目・関根家のご先祖の墓石には、万治二年（一六五九）と刻されている。

このころから谷中の集落には戸数がふえはじめた。

寛文（一六六一～七二）の年号のはいった墓石が十六基あり、

住民は三十戸くらいあつたらしい。

開発当初からの家の墓所は、三丁目・西福院にあり、それ以降の家は宮本町・迎撫院に墓がある。

延宝六年（一六七八）記録によれば、田畠屋敷三九町七反八畝十九歩、家数四八戸となっていた。

八畝十九歩、家数四八戸となつてゐる。

開村以来、江戸末期まで、村は岩槻藩領となつていた。

## 明治二三年（一八八九）

町村制施行により、四町野村・七左衛門村・大間野村・神明下村・越巻村が合併し出羽村となつた。

## 大正十三年（一九二四）

はじめて電灯がともる。

## 昭和四一年（一九六六）

上組・中組・下組・三ツ谷の各部落を谷中一丁目・四丁目とした。

## ■観音堂（谷中町三丁目）

草加バイパス西側、約二百メートルはいつたところに観音堂がある。延宝六年（一六七八）、村の人々により、十一面觀世音菩薩の像が安置された。

作者は不明であるが、名のある仏師であろう。

造立当時の板碑には谷中町待講中十六人の名が刻まれている。現在の観音堂は同時に建立された。

外觀は年代を経ていて、内陣は八帖くらいの畳み敷きになつており、正面に十一面觀世音菩薩をまつる祭壇がある。

構づくりの柱・欄間に精緻な彫刻がほどこされ、壁面には富

上登山、白馬などの七枚の絵馬が掲げられている。

色ははつきり残っており、すこし剥離している。

太平洋戦争中、疎開の人が住みつき、堂内で煮炊きをしたため

ひどく煤けており、文字や細部はわかりにくい。

大正十二年（一九二三）の関東大震災で、観音堂はすこし傾いたていで倒壊はまぬかれた。

その後、数次にわたる補修がなされている。

以前、観音堂の地には西福院という寺院があった。

関東大震災で倒壊し、再建はされていない。

今は、同地にある集会所に諸仏を安置している。

この諸仏のなかに円空仏（越谷市指定文化財）が一体ある。

この地に円空が立ち寄ったことがわかる。

### ■年中行事 (年番は、上組・中組・下組の順で行事にあたる)

#### 一月 観音様

十一面觀世音菩薩のおまつりである。

年に一度の開帳がおこなわれる。

十五日に開帳し、十九日に閉帳となる。

観音堂に幕をはり、町中の家々よりのおそなえ餅・賽錢が奉納される。

宮本町迎撃院住職の読經により、観音さまのお厨子が開かれる。

町中の人々のはか、近隣からも参詣人がある。

観世音菩薩のお札を参詣人にくばり、町中の家々におそ

そなえ餅が切りわけられる。

上組・中組・下組が一夜交替で堂守の番をする。

#### 二月 初午

農業は稻荷大明神の力をかり、また、馬にたよって農作業がすすめられた。このことから稻荷様と馬に感謝し、初午の一日をお祝いする。

#### 四月 弘法様

弘法大師の御影供のお祭りがある。大師堂を清めたあとおそなえ物を奉納し、弘法大師のお姿の札をつくり家々にくばる。

#### 夏ぎとう（祈祷）

村の人々がもつとも楽しみにしている祭りである。

谷中地内の安全をいのり、娯楽もかねておこなう。

村の青年たちが獅子頭をかぶり、鉦や太鼓にあわせて悪魔はらいの舞をする。

神社へ閑根家を手はじめに、谷中地区五十軒あまりの家を二日間でまわる。

村の人々が演ずる神楽もおこなわれた。

この日はご馳走をつくって親戚のお客を招き、当村から嫁にいった女性も里帰りしてともに楽しむ。

夜のにぎわいもさかんである。

田の草取りがもつとも必要なときに、三日間も休んで遊ぶくらい、大きなお祭りであった。

いまは、村の神社で獅子舞いをするくらいに簡単になってしまった。

## 虫追い

麦ワラで四米もある松明をつくり、鉦・太鼓で調子をとり、ホイホイと声をかけて田畠をまわる。

いまは、麦の作付けはしておらず、農薬による田の消毒のため、昭和三十年ごろにこの行事はなくなつた。

## 八月 施餓鬼

十九日はお盆で、亡くなつた仏さまの靈をなぐさめる。宮本町・迎撰院住職の読経がある。

近ごろは、青年層がすくなく、谷中をはなれて働きにでるこ

とがおおい。  
娯楽も多様になり、古くからある谷中の年中行事への関心はうすれかかっている。やがては、都市化の波にのみこまれて、諸行事は消えてしまうのではないか。

## 谷中町の皆さん語る

谷中町に古くからお住まいの方々にあつまっていただき、昔話を聞いていただいた。

### 三丁目 関根 豊作氏

三丁目 雨野 正氏

二丁目 河津 隆治氏

二丁目 白鳥 芳治氏

四丁目 堀井 喜美氏

### ■ 谷中のむかし

——何でも結構ですから、昔話を。

▼ 出羽村を統合する時分、うちの長屋門で村の事務をやつたらしい。大間野の中村さんとか、七左の松沢さんなどがきて事務をやつていた。

のち、出羽小学校のところに役場を建てたらしい。

うちはでかい家だったんで、岩楓様が来ては泊まつた。

うちのじいさんが十五歳くらいのとき、岩楓様へ村の仕事でいらっしゃい。それから連戸長になつた。

堀井さんはここらではいちばん古いんですよ。

墓石をみると慶安時代のが、堀井さんと堀井万右衛門さんの家だけだった。徳川初期の人でしょうかね。

元禄時代には、谷中にも家がふえてきたんじゃないですか。うちから見ると、雨野さん・中村さん・河津さん・大塚さん、これが谷中のものでしきやね。

うちの屋敷は七反くらいあったというんだから、大体ここ一角あつたんですよ。あとはほとんど田圃だったでしょうね。第一、谷中というんですから、やつから（ヨシや茅の生えているところ）の中でいうんじゃないですか。

迎撰院に墓のある人は新しい人です。古い人はここ（西福院）です。

——水の心配はどうでしたか。

▼ 水争いはなかつた。年寄りの話だと三ヶ谷は土地が低いんで、洪水の心配があつたらしい。

蒲生の方へ通じる県道のところは、中野染物屋さん方の。

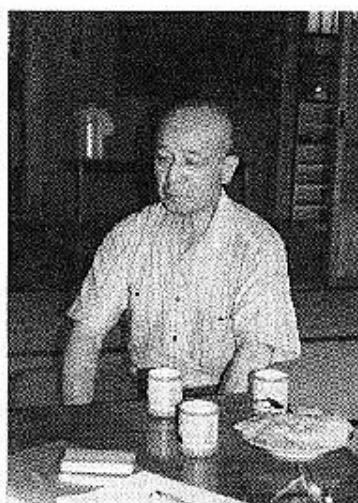
あそこはいざの時には堤防を切つていいいんだと、県の方へ許可



谷中町座談会



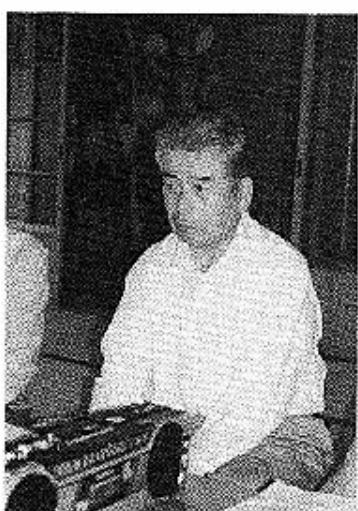
谷中町三丁目 雨野 正 氏



谷中町二丁目 白鳥 芳治氏



谷中町三丁目 関根 豊作氏



谷中町二丁目 河津 肇治氏



谷中町四丁目 堀井 嘉美氏

を得たらしいですね。じかに聞いた話では、新家という家がありましたね。大洪水のときは、そこを切って綾瀬川へ水をだしたんですって。明治四三年の洪水も、綾瀬川で切れこつちへおしよせたらしいですよ。

戦後の大水のときは元荒川でとまつた。

▼ 河津さんのおじいちゃんは、古いことをよく調べててね。私のうちにも位牌をみせてくれと、ぜんぶ書き取つたんですよ。

▼ 谷中の墓をしらべてね、二十年くらいまえに亡くなつた。いろんなことを書いたものがすこしはありますよ。

#### 西福院と観音様

——関東大震災のときはどうでしたか。

▼ 谷中で潰れたのは六軒か七軒、西福院も潰れたんですよ。

観音堂は少しきしんだのかな。手入れしたんじゃないですか。

▼ 西福院にはいろいろがつてね。

——円空があるくらいだから有名な寺だったんでしょうね。

▼ 円空がきたんだから、何年くらいか知らないけど。円空は小さい寺を泊り歩いたとききますけどね。この寺はあまり大きな寺じゃなかつたでしが。この寺にも住職がいたんだがなー。うちで左衛門といつていた時分はいたんですよ。

▼ 震災で潰れたころはいなかつたんじゃないかな。

▼ 住職はいなかつた。住職は越後から來たんで。

▼ 観音様のわきに関根さんのお墓があるんですよ。うしろにお坊さんの墓がある。迎摺院さんがくるのは、八月の施餓鬼と、観音様の開帳・閉帳にくるんです。

大師さまはお札を配るだけ。

——観音堂の絵馬は古いんですか。

▼ 観音堂は元禄のころに十六軒の家で建てた。

昔の人はえらかつたもんだねー。

▼ 何が描いてあるんだろうねー。

#### 谷中村の年中行事

——古くからある行事はどんなものがありますか。

▼ 一月の観音様。昔は二月だったんですけど、新暦になつてから一月になつたんだ。旧暦では、一月は年内といつて一生懸命働いたからね。一月十五日がご開帳で三日間。

▼ 谷中は上組・中組・下組に別れているでしょ。

交替で当番制なんです。

▼ 正月の十五日からはじまり、十九日でおわりです。

十五日開帳で、十九日閉帳です。

▼ お開帳になると、ズーと泊つてているんですよ。

お酒とかおそなえ餅をあげて。

▼ 上だけお返しして、下は食べちゃうんですよ。

きた人におそなえ餅としてお札と一緒に渡す。

▼ 二月は初午の行事がある。二月の最初の午の日。

いって、獅子舞いをやつた。獅子はいまでもこの集会所にありますね。当時は神社にいって被つて、神社のまわりで太鼓たたいたり、笛ふいたりして獅子舞いをやって。

神社は稻荷神社、国道にちかいところと、二つの神社がある。

いまは、入れ歯になつたり、できなくなつたり、神社でおしま  
いにしちゃつて。

▼ 以前は夏ぎとうのときは、一軒々々まわつたんですよ。  
いまは神社にいってバカバカとおわるんですよ。

▼ やる人がいなくなつちやつたんですよ。

▼ 獅子頭は、年に二回だけです。

四月の春ぎとうと七月の夏ぎとうの二回だけ。

▼ 神明町辺りもそななつたらしい。神明町境、四町野境とか、村境でね。ここは境じやなくて神社だね。

▼ いま神社をやってきて、関根さんの家を旦那様の家とい  
うんですけど、旦那様を最初にはじまつて、あとは家を順にぐ  
るぐるめぐつてね、二日間かけてね。

▼ 娯楽がなかつたから、それが楽しみでやつたんじゃない  
ですかね。信仰もかねての。

▼ そのころは楽しかつたですよ。

▼ お神楽が歩くでしょ。

▼ 獅子がくるてえと、十円とか二十円とか、お金をいくら  
かあげるんですけど、金額によつてお獅子だけでなくて、お神  
楽までやる家もある。やはり金次第でもつて。

越谷のお祭りに今でもいきますよ。

▼ 越谷の保存会ができますよね。

▼ 離連中として、お神楽をやるんですよ。

▼ お神楽は谷中の人があるんです。この（集会所）のとな  
りの人もやりますよ。大塚さんという。小学校でお離しを教えて  
いる。

▼ 家から嫁にいった人がね、昔、よばれてくるんです。  
樂しみですね。

▼ むかし、虫追いをやつた。

▼ 七月十四日、稻荷神社から出発して、鉦・太鼓でぐるり  
と耕地をまわつて、さいごは川へいって燃してしまふんですね。  
総代は年番です。消毒の薬ができるからやらなくなつた。

▼ 昭和三十年ごろまでやつてましたね。昭和三二～二年  
この辺の田圃を耕地整理して、それ以降やらないですよ。  
白鳥さんのわきを通つて下の方へいった。

▼ 松明は麦わらで四米う五米もあるのかついて、子ども  
は短いのを。いまは麦をつくつてないしね。

▼ 十月九日はくんち、神社のお祭り。

子どもが集まつて、神社におこもりしてゐる。

▼ それを三月にもつていた。三月の初午と、十月九日の  
くんちかな。

三月の初午に神社におこもりをして、灯明錢をもらつてね。

▼ 戦後、アメリカが、集まつてやつてはいけないつて、一  
時ありましたね。そのためやると学校にいくと怒られるんだ。  
やるのは隠れてやつた。

——富士講はいまでも残つてゐるんですか。

▼ 一時、戦後はいきましたね。あれからだれもいつたとい  
う話はきかないなあ。私がいつたのは四十年くらい前かなー  
う話はきかないなあ。富士講としては昭和二八年にいつてますよ。

谷中の人人が大勢いってますよ。

▼ 私がいったのは昭和十六年～十七年。戦勝祈願として。

—— 棚名講・雷電講などはどうですか。

▼ 細々ですね。棚名講の講元は白鳥さんでしょ。

御岳講もそうですよ。

▼ 神社もんですけど、いまは旅行になっちゃいましたね。

観光業者がきて、何日、谷中が五人、神明町で七人とか、それを合わせてバス一台とか二台とか。帰りは伊香保へ泊まるんだ。

▼ 昔は神社に泊まつたんですけど、いまは御師では中食だけで、あとは温泉場いく。

▼ 棚名と御岳、両方やっていますよ。神社もあるけど今は観光でね。御岳へいくと、どことこ講という立派な碑がたつてますけれどね。その時期になると御師から手紙がくるんですよ。

▼ 戸隠はいまだにお札だけきますね。

▼ 大山は道了尊。川崎さん、あんまりいい顔しなくなつて、安いお金で泊まるんですから。米をもつていつてね。

▼ いまでも御岳山には米をもつていきますよ。一升もつていく。棟名のほうは以前はもつていつたけど、最近はどっちでもいい。

▼ 富士山にいくとしても、昔は大変だったんじゃないかな。

歩いていったんだから。

—— お伊勢さん、伊勢講にいつた話はきかないですか。

▼ 案外いつたらしいですよ。いつたけど、講というのはどうですかね。そうとうの期間かかるから、家をなかなかあけられないんじやなかつたですか。

▼ 今は神社は代参とか、旦那たちしかいかないけど、今は女性の方が多くくらいですよ。

—— お葬式のならわし

—— お葬式では谷中独特のものはありますか。

▼ 昔は五軒～六軒の組合があつた。組合で責任をもつてやつてしまふ。いまでも組合はのこつていますけどね。

▼ いままでもお葬式は組合でやるんですよ。

以前は上組の人が全部寄りあつたんですよ。

この地には天蓋がなかつたんですよ。

村の人が竹でこしらえたものです。谷中はないんですよ。

▼ 昔は土葬だからみんなやつた。

火葬になつてからみたことない。

▼ 四角い棺箱を担いでいくときに、その上にのせるんです。

▼ あれは慣れないとつくれないね。年長者が教えてくれればいいけど。その人が死んだら、次の人が困っちゃうからね。ふだん、練習することもないしね。

▼ 料理は組内で多少つくりますが、パックをとつたらおしまいだね。

—— ロクドウ 穴掘りは？

▼ いまはロクドウはいらなくなつた。担がないからね。

▼ いまでも何軒か、穴掘りの家ののがのこつていてるんですよ。

▼ カロートのてきてない家は埋めることがある。

▼ 土にかえるんだから、土にいたほうがいいんだ、と考える家もある。

▼ 新しい人は宮本町の迎撃院様へお願いして、むこうへ入

っている人が多いです。こっち（西福院）では入るゆと

りがなくなつちやつたからね。

——子どものころの楽しかったことは？

▼ 夏ぎとうは楽しかったねー。獅子舞いだねー。

▼ 泳ぎはたまには元荒川へいきました。むかしこの辺に、二間と三間くらいの用水があつて、そこで水遊びをした。

いまみたいによごれていなかつたからね。稻荷様の前の。

▼ あの当時の用水は、下に板がしいてあつたなー、堰があつて危なくないし。谷中は大体そつたなー。

——野鳥などはどうですか？

▼ シラコバトはいたんですね。

——野鳥などはどうですか？

▼ シラコバトはいたんですね。

いまはいなくなつて、独特な鳴き声でねー。  
たんだ。

▼ アメリカさんが鉄砲をもつてきて、あれからいなくなつたんだ。

▼ ウグイスも五年も六年前までいた。うちへもきてね。

いまはいなくなつた。

▼ 家を建て替えるときに、垣根だけのこして裏の木はみな伐つてしまふ。木がないところないねー。

▼ カラスくらいなもんですよ。たまには知らない小鳥をみかけることはありますけどね。

▼ ツバメもこなくなつた。

▼ あれは消毒してからね。つばめの餌がなくなつた。

たいがいどの家にも軒下のところにきていたが。

▼ 家の中にはいってきて梁のうえに巣をつくつた。

▼ 大塚さんの家で掛時計の上に巣をつくつた。

家中に自由に入りできた。家中に巣をかけたもんだ。

あの時分、ガラス戸のはまつてある家はなかつた。

私の若いころ、そういう家は下の中村さんくらいだつた。

——上組・中組・下組の区分けはどのように。

▼ 渋谷さんのさきに堰があつて、その手前が上組で、四丁目と三丁目は上組になつていて。

▼ 一丁目は三ツ谷だ。三ツ谷は下にはいらない。

谷中三ツ谷といった。

その間に小学校があつて、家は一軒もなかつた。

三ツ谷に十一軒も十二軒しかなかつた。

### バイパスの建設

——バイパスがつくられたころはどうでしたか。

▼ 買収の問題はあつた。役所までおしかけたんだから。

金がはいるから文句いわないけれど。うんとかかった人は税金とられたからね。一反歩でも五反歩でも控除額が同じだから。うんとかかった人は犠牲になつたから文句いふわけですよ。

▼ 家にかかった人は大変だったですね。

▼ バイパスでは、私は宅地二百坪とられている。坪五千円だつた。田圃は四千円。それをやる四年も五年前、一反百万円ならみんな売ると笑つていた。

四千円で一二〇万円だから文句いわなかつた。

▼ 家にかかつた人は犠牲になつてますよね。

▼ 約千坪からあつたんですよ。小さい家を建てたり、家を引っ張つてきて、その間の生活保障をわずかもらつて。何も残らないですよ。

▼ 当時、一軒建てると最低一五〇万円くらいかかつた。

▼ 一反歩の売却で建てられるのは小さい家だな。

### 消防・釣鐘

——谷中の火消しは？

▼ 昔、あつたんでしょ。手押しの竜吐水というんでしょ。

そのころの消防車は、いまはないんですよ。

この地区は案外はやくからガソリンのがはいつたんで、ワッショ・ワッショやるのは処分した。火の見櫓はあつたんですけど。釣鐘はあそこにあります（外を指さす）。

▼ もとは観音様の角につりさげてあつたんですよ。私のところで、子どもの供養で先祖がやつた。つりさげておくと、観音様がいたんじやうというんで、別に建てたんですけどね。

▼ この鐘は火の見櫓ですから、金属供出せずにのこつて半鐘につかつた。

高い所へのぼって、印半纏を着た消防士がいて。

▼ 飛行場ができたとき、私は兵隊にいっつて、宮本町のガードの近くに高橋病院が昔あつて、いま床屋さんなどいろいろなのがある。あそこに砂利を落として飛行場に運んだりして、た。外泊にきてみてます。

▼ 飛行機は一回も飛ばなかつた。そのころは飛行機もなくなつてね。格納庫はあつたんですけど、材木をおいて上からトタンをのせて、飛行機みたいな格好においてあるのはあるんだ。あそこの仕事は学校にたのまれて作業にいった。

一日五円で働いた。土方でいつたこともあるしね、人足で部落に割り当てがきていたこともある。

▼ 女の人もいつたらしいですよ。

▼ みんな部落の人だつた。若い人は兵隊にいつて幾人もいないでしょ、のこつている人、女たちでやつた。

▼ 飛行場の跡地をこわして田圃にした。石がはいつていた。▼ 石を道路に敷いたんだなー。その上をローラーを牛にひかせて引っ張つた。通学道路にね。

### 戦争の犠牲者

——戦争でなくなつた方はどのくらいですか。

▼ この部落から兵隊にいっつてるのは、殆どいっつているでしょう。少なくとも一軒に一人、多い家は三人もいっつている。

▼ 私は現役で終戦まぎわ六月に出た。いちばん後ですよ。戦死者は、うちで一人、大塚さん、大塚さんのところでもう一人、大塚かつじさん、しげちゃん、ていちゃん、河津よしうさん、七人八人かな。大東亜戦争でね。

### 飛行場の建設

——荻島の飛行場はどんなでした？

兵隊にいっていたのは召集までありましたからね。

▼ 兵隊送りはどこ？

▼ 越谷の駅までしかいかない。

▼ 名倉さん、あの人が浜松まで送つてくれた。

役場へでていたんだな」。

▼ 兵事係は江原さん。

#### 食料の統制

米の供出はどうでしたか。

▼ 部落の農業組合長さんが計算して、どのくらい作つていいんだから、このくらい出せと。昭和三五年～三六年になつてから、向うから割り当てで、役場のほうから直接いってきた。いろんな配給でも組合長さんがやつた。

▼ 供出がでないと、組合長さんへお巡りさんがきて、部落をめぐって警勵した。

馬の餌までかきまわして、そんな所にかくしてありますから。

全部出したら食べられなくなる。ワラの中に埋めておくとかね。

▼ 他人事じやなくて、自分の家はたりないくらいいで、当時の組合長さんは大変だった。

▼ 行政連絡員といったかな、お米でもどのくらい供出するか計算して、上組には何町歩あって、このくらいできたんだから、保有米がこのくらいとか計算して割り当てたんだから、頭がいい人でないとできないね。

▼ いまは田植してそのままにしておいても獲れるけれど、そこそこ一生懸命やつたって五俵半か六俵しか獲れない。

▼ もみ・たねなんかもう一回はかりなおして、余分なものを持ち寄つて、うちへきてかしの木の間にしばつて、どがらすでひいてみてね、それで二俵でも三俵でもだす。

▼ ここに書いてある堀井信吉さん、ここのおじいさんがね、先立つて計算したり、お宅はいくらだよ。

▼ 米から肥料から、マッチ棒まで計算してわけたんだから、算盤が達者な人でなければ計算できないよ。

煙草だとかね。

長時間にわたりありがとうございました。

平成八年五月二十九日 西福院・谷中町集会所 収録



谷中町 夏ぎとう 獅子頭 平成八年七月二日

収録

## アンケート

「子どものころの越谷」「越谷にきたころ」の思い出について会員の方々に書いていただきました。

(順不同・原文のまま)

有瀧 龍雄

明治三七年十一月三日、越ヶ谷町中町四六七二番地に出生。大塚伴鹿町長……越ヶ谷町、大沢町、桜井村、出羽村など十ヶ町村を合併、越谷市が誕生。昭和二年四月一日、樹木を主体とする植物園「アリタキ・アーボレータム (The Aritaki Arboretum)」を創設、一般公開。

文部大臣より「博物館相当施設」に指定された。

有瀧龍雄「アリタキ・アーボレータム」の園長に就任、園はその後(社)日本植物園協会、国際植物園連合の正会員園となつた。

武藤すみ子

埼玉県供給公社で売出された土地を買い、昭和五〇年家を建て母と一緒に越谷に引越して参りました。

当時は東京から勤めを終えて大袋駅に降りてから、下間久里の我家迄十二分位ですが、細い道の両側は農家の畠や草の茂る沼地でした。この十年ほどで駅周辺は商店街になり、道幅も広く便利になりました。逆に車もない私などは騒音にならざれています。初夏の頃、田んぼから聞えてくる蛙の鳴く声が今ではなつかしく耳にひびいてきます。

吉田 敏子

どんなご縁があったのか、昭和四十九年春、大沢地区鷺代に越して来ました。家の廻りは田圃で、逆川から引き込む大用水に、子供達はゴムボートを浮かべ、初夏の夜は川柳に螢が飛び交っていました。

名倉 さわ

朝戸を繰っていると、キジの雄が綾瀬の土手より庭に来て、ケン、ケンと鳴いていた。

門の門を開けに行くと近づいて来た。強そうなキジの日は今でも忘られません。三九年頃は青葦の茂みを舟が通り下肥の運ぶ人声がして川は賑わった。

川底の藻刈舟のエンジンの音が水にひびく。  
その後四十年、工場や住宅が出来て、日本一汚れた川と言われる時代には淋しさは言い表わせない。

(綾瀬川 水鏡して 譙わたる)  
こんな句も今は懐かしい句となりました。

「山王二十一仏板碑の発見」

高島 英一

昭和五六年八月のことだから今から十五年も前のことになる。当時越谷の袋山で不動産業を営んでいた私が家の売却を頼まれて市内恩間の住宅を見にいったところ、

隣地が背丈をこえる草ぼうぼうでどうも墓地らしい。

法務局でしらべたが所有者が永年わからない。

家の所有者と相談して、隣が化けものがでるような草むらでは家は売れないから、私も協力するから草かりをしないかと呼びかけ汗をかくことにした。

何しろ八月の最も暑い時季である。竹や藤の根が縦横にからみあって容易なことではなかった。

太い根は鍬で思いきりたちきるよりなかった。

そのうちガチンと石に鍬があたる。それが一米余の完全な形をした地蔵尊であった。

更に掘りすすめると緑泥岩の大きな板碑がでてきた。裏をかえすと梵字がみられるので、その日のうちに市の教育委員会に連絡したところ上部が欠損しているがこの地区でも珍しい二十一仏板碑で天正八年（一五八〇）の作であることがわかった。

更に寺歴も古い等覚院という寺のあとであることもわり、明治の廢仏毀釈で廃寺になつたことも知れた。新聞社も大きくこれを報道したが、このとき以来、越谷市郷土研究会とのおつきあいが続いている。

### 井上 すず

「なの花や 月は東に 日は西に」有名な句です。

五十年前の越谷で現実に此の景色を私は見ました。

今の宮本町から七左町の出羽小学校迄の南北に通つた一本道で左右は田圃ばかりです。

小さな越谷駅からは谷中町、神明町迄も見渡せました。一本道の両側は麦、レンゲ、菜の花が一面に咲いて美しくのどかなものでした。

まだ明るい夕方の東の空に大きな丸い月が出たばかり、西の空には真赤な太陽が沈む前でした。

「蕪村の句がほんとうに有つた」私はうれしくて、カンゲキでした。今でも忘れない風景です。

### 鈴木作之助

昭和四三年春娘の転校に合わせ品川より越谷に移住しました。当時野田街道は歩道も整備されず車もなく、バスが良く目につきました。紡績工場も稼働中の様で、裏は逆川方面にかけて広々とした水田地帯、街道わきには大きな深い穴が幾つか有り、中に草が茂って水溜りには小魚や亀が居り子供達と良く取りました。

振り返れば、久伊豆神社の緑が長く続き、久方振りに

自然に接した思いにふけつたものでした。

二才になる息子も喘息でなやみ、医者通いに忙しい毎日でしたが、こちらに来てからは通院の心配もいつしか忘れ元気になつてしましました。

元荒川堤より東小林（東越谷）方面は遠くまで見渡せるほど広々とし、近くの田園の細い堀には澄んだ水中にフナが泳ぎ、足のついたオタマジャクシが水草の上に遊んでいます。

久伊豆神社の裏山に入った時、突然ガサガサと音がする、見ると黒茶色の野ウサギが飛び出しこちらを見ています。子供等はびっくり。

春の朝はコジニケイが良く鳴き、コッティコイと呼んでいる様です。夜はホッホーと木の梢で淋しく鳴く月夜の晩に夜空眺めては、この静かな生活がいつまでも続い

## 「蚊とハエの居ない生活」

高橋 清

後藤千代子

敗戦後しばらく環境問題と言えば衛生問題であった。  
伝染病と蚊・蠅「のみ」などの問題である。

蚊・蠅のみが居ないと云つたら嘘であった。

特に農村には牛、馬、豚などを飼育していたのでなおさらであった。蚊や蠅を全滅にするということは「どうぼう」をなくすより至難といわれた。

私は昭和二七年より三十年間地区衛生にたずさわった。

昭和三十七年新薬「デイブテレックス」水和剤が出来、試験サンプ地区として新川町が指定され実験が開始された。「デイブテレックス」（デブター）乳剤を二〇倍にうすめ室内天井にサンプした。

蠅は夜天井にとまる習性があり足から薬の成分が入り死滅する。

たたみに落ちた霧状のデブターで「のみ」は絶滅した。蠅の発生源の便池にはデブター四〇〇倍液を定期的にサンプすることによって絶滅した。

蚊はその後煙霧機の導入によつて絶滅した、

昭和三十年代以前の様な「くらし」は今は無い（昭和四十年代）。

現在呼ばれている環境問題は地球規模の問題である。二酸化炭素排出による温暖化・大気汚染・ゴミ問題・エイズの出現・病原性大腸菌O-157の出現など。或は化学物質の公害などますます複雑化しむつかしくなつている。

住まいが草加市内ですので、そのことを書いてみます。主人の仕事の転勤先（式根島）から帰京し、草加市内に住まいを構えたのは、昭和四七年の春、団りは田んばにかこまれて春はレンゲが咲きみだれ、夏はかえるの合唱でのどかでした。

市

の所有の広大な土地が近くにあり出入りが自由で、子供達は自転車乗りの練習等に思う存分かけ廻っていました。

現在はコンクリートの家、アスファルトの道で生活も快適になつていますが、土のにおいと、のどかな風景がなつかしい限りです。

森田 三郎

子どもの越谷は川とみどりは多く川の水も清く、すんでいた川で泳いだり、魚をよくとりにいきました。

うなぎは竹のカゴを作り、前日仕かけます、つぎの日にとり出し、近くのうなぎ屋に持つて行って貰つてもらいます、

駅の近くは今日のように建物は多くありませんでした。冬の寒い時、バス通勤のため待ち時間の間、風が強く、駅舎の木のイスで待つのですが、長い間待つので体は寒くひえてしまつた、そのような事が思い出されます。

高山 はつ

一九七八年三月、新方川の旧四号線越谷、春日部の境界に架る戸井橋、草加バイパスに架る新方橋の中間に住む。川向うは一面の畑、せんげん台駅を左方向に眺望し、富士山が北風の強い日は夕日を受けて黒富士、鯉の産卵季節には眼前の川に金波が押寄せて川岸は尾鱗が高波を立てる、その鯉を四ツ手を使って取りに来る業者、イナゴは庭に飛んで来る。

牛蛙の泣声、蛇が庭に入つて来る。十八年の歳月は昔々の語り草として一幅の絵と脳裏に残るのみ。

木原 徹也

四十年以上も前、越ヶ谷本町生まれの祖父に連れられ初めて越ヶ谷秋まつりを泊りがけで見物に出掛けた。まだ夜の明けぬ暗いうちから、町内、町内で鳴り出す祭りばやしの音。ウキウキと祭りを待ちわびる晴れがましい気分が町じゅうに漲っていた。

活気と賑わいのあった旧越ヶ谷町が、その日に食べたイチヂクの味とともにになつかしく想い出される。

「越谷にきたことと明日の越谷」

菅波 昌夫

昭和四十年五月、東京高円寺のアパートから蒲生へ引越して来たのは、二人目の子供が八月に生まれる事になったからである。

当時越谷の人口は七万強位で、蒲生駅は上り下り二つのホームがあり、改札口へ行くには、連絡橋が無い為、線路を渡って乗り降りした思い出がある。駅長室は現在と殆ど変っていない。

そして西口は勿論なかった。東口駅前通りは未舗装で、ダートで雨が降れば先ずドロドロで、靴、ズボンをかなり汚したものである。旧四号道路を渡つて直ぐの角にはボーリング場があり、仲々の賑わいであつたが、ブームが去ると同時に閉店した。

さて我が家と言えば吉田工務店の建て売り住宅で一軒全部が二LDKであった。近くには田圃があり、夜な夜な蛙の合唱が賑やかで、また小川では子供達が紐にスルメを付けてザリガニを取つていたのも何か懐かしい思い出である、その後、草加バイパスの開通、武藏野線の開通、総合食品卸売市場の開設と続き、東京への通勤圏となり、人口も三〇万近くとなり現在に至っている。

また文化事業に於ては、近辺の市よりは、はるかに秀れているが、今後はその足元である郷土を知り愛着を持ち、越谷の素晴らしい自然と先人から受け継がれた越谷の歴史を絶やす事なく、育んで行く事が越谷ぞその一端を受け継ぐ私達の使命ではないでしょうか。

小川 隆雄

昭和三十年の始めの頃、私は旧杉戸駅から都内へと通勤していた。桜並木の元荒川の鉄橋を渡るとまもなく越谷駅である。まだ駅に降り立つた事のない車窓からの印象は都内に近くて水郷に囲まれた静かな田舎町と映つていた。転勤でしばらく横浜に住むようになつたが、この想いがキッカケで越谷に新居を構えたのである。今から二五年前のこの町は印象通り映つた処であった。家から元荒川の鉄橋を渡る電車の音が朝夕に聞え、駅のホームに入ってくる電車が見えたのである。

水郷の駅にふさわしく、夏には青々とした水田が広がり近くの川にはまだメダカの学校が営まれていた。今、電車は高架で高く走るようになつたが、その姿は見えない。元荒川の鉄橋を渡る音のかわりに、雜踏と車のクラクションの音へと變つて来ている。

二十五年前の昔をなつかしく想う今日この頃である。

### 「越谷とわたし」

平川 陽三

汚染河川として、その名を馳せている綾瀬川が、「人と自然のやさしい川づくり」ということで、生まれ変わろうとしていることは嬉しいことだ。

父の生まれ在所は、出羽村七左衛門四ツ谷（現在越谷市七左町八丁目）で小学校三、四年の頃、父に連れられ父の実家を訪れるのが大変楽しみだった。年上の従兄弟に連れられ綾瀬川で水浴びをよくしたものだった。

さとう橋の上から飛び込む従兄弟はわたしの憧れの的だつた。水も大変きれいで秋にはハゼも遡上してきただ。正に子釣りしあの川であった。汚れた綾瀬川を見るのは、悲しくて、身を切られるような思いだ。

昔のように水はきれいにならなくとも、せめて野生の動植物が以前のように生息する川に戻つてもらいたい。六十三才の願い。

北部の分譲地に転居する。未だ建築物は殆どなく田園風景豊かで草加バイパス（四号線）の車の騒音も気になる程でした。田植シーズンには蛙の鳴き声は情熱的な狂想曲となつて自然情緒一杯でした。

昭和四五年九月のある日、午後三時半ごろの帰宅途中の畔道で、用水小堀から三〇畠位のライギョがピヨーンと道路上に踏ねて草むらの上に落ちてきたのを目撃しました。その地は、今では数年前に整地され立派な住宅が建ち並んでいます。当時は近在の主要道路は砂利道が殆どで道幅も狭かったです。

子供達は出羽小学校まで四〇分内外の道程を徒步通学した。帰宅途中は、近郊田んぼでエビガニ採取に夢中であつたとか。子供達の無事帰還が親達は心配でたまらなかつた。これも昭和五〇年に近隣に宮本小学校開設実現で解消し今に至っています。この小学校設立以前は一面の田んぼで子供と一緒に凧揚げをした時、強風のため水溜りに急降下三個程ダメにしました。

### 酒井 達男

三〇数年前の越谷駅の下りホームから見渡した西側一帯は、いち面の田園と畑で人家も見当らない程の田舎の地であった。当時私は草加に移住してきたばかりであったが、親友が久伊豆神社近くに居り、また家内が弥生町出身であった関係で越谷へは数多く足を運んできた。そして三〇有余年、現在の家並に至る年々の移り変わり行く風景を眺めてきて、都市化する越谷の歴史の一端を垣

間見る思いであった。

### 「井戸水と赤飯」

高崎 力

飲料水は、地下水位が高かった頃はホリ井戸（素掘）で充分であったが、やがて有機物等が混入して臭いや色が濁ると、砂・木炭・シユロの葉で濾して飲んだ。近代になると上総掘りが開発されツキ井戸が多くなった。

地下水位により二〇間ツキ、四〇間ツキといわれ、深さと場所によって井戸水の水質は異なった。赤飯はより赤い程好まれ、井戸水の水質によって赤飯の色の差がでた。○○さん家の井戸水は良いと評判がたつと近所の家では桶、バケツで貰い水をした。

昭和三五年頃より上水道が普及し、人工着色が多くなって今では赤飯の色と井戸水の話は昔語りとなつた。

伊藤 靖二

昭和四四年に北海道から越谷市恩間の地に来た当時、千間台駅に降りると西口は一面田園で駅前は堀になつており、休みには釣をしたり、セリを摘んだりとそのころの思い出が蘇りますが現在は区画され昔の名残りは全くありません。平成五年十月に越谷広報にて郷土研究会に巡り合い、初めて太田市呑龍上人の史跡巡りに参加。この時には年令に関係無く皆さん元気溌剌で大変驚きました。また回を重ねるうちに人生何かの目的あるいは熱中するものがあれば、あとに元気がついて来るものだとつくづく感じました。以前は歴史には全く興味が無く、日曜日にはごろ寝の状態でしたが郷土研究会に参加する

ようになつてからは、休みには神社仏閣に足を向け図書館に行って資料を調べて納得。

現在の変りように家族もびっくり。

恩間から袋山に移り、袋山の歩みなど自分の住んでいる地の歴史の移り変わりを知り深く感動しております。

Y・A

越谷に引越しして来た頃は、家の前から走っている電車が良く見えた。田んぼも島も広々と広がっていた子供達が元気な姿でトンボ取りや魚取りをしながら遊び廻っていた。今はその面影も無い。あの頃はそのような田園があつた。今から二十九年前のことだった

吉見 美津恵

一九八五年六月越谷に引越しす事に決めた時、都内に在住の知人に「そうか・こしがやは千住の先、桂ガーガーだよ、土地は低くて水害が多い」と聞かされました。思ひ切って参りました。

先ず近くに青い樹林に赤い建物が図書館だと知った時何よりの慰めになりました。

そこで読書会にも入れて頂き友人も出来ました。史跡めぐりの会もあり（新聞で御知らせもあり）誰でも自由に参加出来る事が何よりの喜びです。自分の体調のよい時出来るだけ参加させて頂いております。

丁寧な案内と説明つきで有難く幸せに思っています。

高橋 正輝

敗戦、そして食糧危機。生きるために一番電車で農家めぐり、やっと手に入れた貴重な食糧、サテこれから無事に我家に運ぶため取締網から逃れる攻防戦……。往古からの関所栗橋、粕壁の難所を無事通過、あと三十分で北千住。満員の車中にホツとした流れ、今日の戦果次の情報交換、心も軽く……と電車はいなかの小さな駅の引込線に、倉庫の中から多勢の警官や土地の警防団員！情ようしゃなく汗と涙の結晶を没収江戸時代の悪代官、フト見る駅名は「越谷」畜生二度とこんな町に来るもんか！と思ったのですが……。

H・I

十五年前、逆川に沿って大きな桟の木が天に向ってそそり立ち、川沿いには、葱やブロッコリーの畑が続いていました。

そしてその途中に朽ちた小さな社があり、蛇がちょろちょろ出てきたりしたものでした。

原体験に似たこの風景が気に入り、縁のなかつた越谷に住みつきました。

今では逆川は、きれいになり、歩道が整備され、畑は家に変わり、小さな社は、四ツ谷区画整理地区の天満宮として区画通りにおさまっています。

家族では、昔の田舎のままがよかつたなあと、たった十五年前をなつかしく思い出しています。

青山 栄吉

私は、越谷に住んで約三十年。最初は、私もそうでしたが、隣近所はほとんどが都内に通うサラリーマン家庭だったこともあり、道で顔を合わせても、型通りの挨拶を交わす程度でした。

しかし子供を通して知り合ったり、暮会所で親しくなった仲間など付合う範囲が広がるにつれ、単に寝に帰る場所から周囲との交流を含む生活の場に代わり、今では他所者意識は姿を消し、すっかり根を下ろしたというのが実感です。

「越谷とわたし」

谷岡 隆夫

昭和三十六年（現宮本町二丁目）四丁野名主会田太郎兵衛の十代目の当主会田義盛氏の死去を機に、当家は川口へ引越しされた。

一町歩もの大屋敷は、開発会社により五十軒余の建売住宅と変った。開発後、その内の一画に会田家とは無縁の私が居をかまえた。私の土地譲本には以前の歴史が記されていて興味ぶかい。現在は大屋敷の回りの構え堀のみが名残をとどめている。

私は、昭和四年に市内大沢に生まれました。当時は南埼玉郡大沢町でした。子供の頃の大沢町は、日光街道の宿場町の面影を色濃く残している街でした。

鈴木 徳治  
私は、昭和四年に市内大沢に生まれました。当時は南埼玉郡大沢町でした。子供の頃の大沢町は、日光街道の宿場町の面影を色濃く残している街でした。

旧四号（現在の足立越谷線）はまだ出来ておらず、往還と呼ばれたメイン通りは商店街の古い通りだけでした。その通りに面して、宿場当時旅籠だった大きな構えの古風な家が何軒がありました。

劇場・遊郭・芸者の置屋・検番等々宿場街的なものは、

一通り揃っていました。

私が遊び場にしていたのは、香取神社の境内と参道でした。参道は現在の形ではなく、旧道に面して一の鳥居があり、敷石の参道がL字形に折り曲がって現在の参道につながっていました。そこには光明院の参道も平行してあり、子供の遊び場に適していました。

近在では子供が生まれてしまふと、お宮参りに来ました。その時には大きな重箱に赤飯を入れて持参し、年寄りや子供にふるまうしきたりでした。お宮参りがくると遊ぶのを止め、赤飯をもらいに群がつたものです。

また、夕方の早い時間に綺麗に着飾った芸者さんが、商売の繁盛を願ってお参りに来ました。そのときも遊ぶのを止めて、芸者さんの後をお供のように並んで歩きました。

古田 美雄

千間台西には十年前に終の栖としてやって來た。

駅から一本道の我家の廻りは、新しく出来た住宅地の一画で家が四軒ほど、駅までは十五分。

途中より街灯はなく空地の多い所で、千間台中学校前の田んぼに螢がいるので驚いたものでした。

駅付近ではヒバリが鳴いていました。

今では大型スーパー（デパート？）も出来、一本道には

街灯もつき、家もビッシリ建ちならび、中学校の前の田んぼの半分は県立福祉看護大学が出来るため埋め立てられ、工事中の堤で囲まれ、用水路も整備され堂の成育には程遠くなり、これでバスでも通れば農村から大都市への図。

喜んでよいやら悲しんでよいやら、複雑な今日この頃である

「春の闌日」

小原 勘三郎

「もうそろそろストの時期だな」だれかがいった。

春闌が毎年の恒例になっていた昭和四十年代前半。

私鉄ストの先頭をきつて突入するのは東武鉄道だ。

ストになれば、陸の孤島になる。

かえって気楽なものだ。小川で釣をする人。あぜ道で草を摘む人。

東洋一の松原団地には、マスコミが取材にくる。

足どめされたサラリーマンののんびりしたようすがテレビに映る。春風駘蕩、天与の一日だ。

都内にいたころは、ストはなかつた。前夜の団体交渉で解決してしまう。

越谷に転居して、電車がとまるのは異様な感じがした。が、わるい気はしなかつた。

スト決行のはり紙を最初にみたのは、昭和二十一年の冬だったか。

スト決行のはり紙を最初にみたのは、昭和二十一年の冬だったか。

浅草・松屋にだされた東武鉄道のビルであった。

## 史跡めぐりに参加して

第二三〇回 岩槻市

記録 堤竹 宏吉

・日時 平成八年四月二八日（日）

・天候 晴

・参加者数 九〇名

・案内 鈴木 秀俊

城下町岩槻市を訪ねる（加倉から渋江まで）に参加し、初夏の風情の感ぜられる若葉の季節でこの上ない絶好の日和に恵まれました。参加者の表情も何となく明るさと喜びが読みとれましたのは私ばかりでなく皆様方も同様であったことでしょう。従前の企画行事と同じく今回も相当にボリュームがあり内容豊富な史跡めぐりでございましたので特に印象に残るものを中心順次感想を述べさせていただきます。

最初は岩槻市文化財、太田氏資宝筐印塔が境内にある芳林寺を訪ねました。この塔は永禄十一年造立とのこと、今から四二八年も昔の史跡と知り唯々頭を垂れるのでした。

○淨國寺 この寺は數年前にも訪れ、自然が残り若葉や木立を背景に聳え立つ本堂と壯麗な唐破風門にかけられている「梅檀林」の額は昔の格式の高さを偲ぶのに十分であつたと思します。

○洞雲寺 この寺の山門は四〇〇年の風雪に耐えて現存してい

るということに感動すると共に歴史所産保存の重要性に改めて感じ入りました。

○岩槻市立郷土資料館 この建物は昭和五年に岩槻警察署庁舎として建設されたが昭和五十七年に市立郷土資料館として生まれ変わった由。訪問時には「岩槻の道するべ」展を実施中で、これは九十八件に及び道するべを写真と図面で掲示していたのは、大変な労作と感心しました。この種の展示として想い出されることは、平成七年十一月越谷市民文化祭でのわが越谷市郷土研究会として加治正則様による「越谷の道するべ」四十五点が出品展示され大変な賞賛を得ました。これらの展示企画は今後の郷土研究会の活動の方向性の一面を示唆しているのではないかと感じ入った次第です。

○遷喬館 この史跡は、以前には入館禁止だったと記憶していましたが、今回は全員交互に全員入館し室内の展示品等を観覧できましたことは非常によかったと思います。

この史跡は、寛政十一年（一七九九）岩槻藩々士兒玉・南・柯が開設した私塾とのことであるが、その後、藩校に昇格し、この藩の子弟は六・七才で必ず入校し十五・二〇才位で卒業することとなっていたという。現在でいえば小学校から短期大学生位までの成長期の修養道場で當時四〇人位の門弟がいたという。儒学を中心に劍術、馬術、水練などの鍛錬の積上げを通して藩士仲間の士気高揚に十分に寄与したであろうことがよく理解されます。江戸時代の家塾が藩校になり現在もその建物が現存しているというのは、全国でもこの建物だけという。そのため貴重で価値ある歴史所産として県の史跡に指定されている。管理

保存について岩槻市担当課のご苦心ご苦労に対し謝意を表したいと思います。

○時の鐘 埼玉県では、川越市の「時の鐘」は有名であるが、

この鐘も天保年間に焼失し嘉永六年（一八五三）に再建し現在に至っており、近在では非常に有名である。

○岩槻城跡 太田道灌築城（一四六四）以来一三〇年余して後豊臣勢に落城したが、その後天正一八年（一五九〇）から明治四年（一八七一）廢藩まで二八〇年余にも亘って存続し、川越城、忍城とともに県下三名城跡の一つである。現在はその城跡の一部が岩槻公園として、市民や近隣の人達の憩の場として現在に至っている。

○淨安寺 家康が江戸城に入ったときの岩槻城主高力清長の墓石や十一面觀音像・円空仏などに参拝しました。

○愛宕神社 岩槻城の外部にあって昔は高さ六メートルという土壘上に鎮座する風格あるお社であったという。市街化傾向の強い地区としては、この様な史跡の保存維持を通じての空間の果す役割も極めて貴重ではないかと実感致しました。

○県立民俗文化センター

このセンターは、県内の民俗芸能と民俗工芸の技術の博物館ということで伝統あるわざの美しさ、力強さに触れることができました。江戸時代以後越谷地方に生まれた手芸品は数々あります、ここで種々勉強できたことを中心に順次に記して、改めて郷土越谷の伝統的手工芸品について頭の整理をして参りたいと思います。

1 越谷だまる——今から二五〇年前、間久里の「だる吉」と

いう人形師が作ったのが最初とか。川越大師や西新井大師を始め全国各地に出荷されている由。県伝統的手工芸品に指定。

2 越谷のひな人形——約二五〇年前からその部品である胴柄、頭、手足などの一切が越谷で作られており氣品あふれた顔立ちは昔から高く評価されている由。県伝統的手工芸品に指定されている。

3 船渡の張子——これはセンター展示品の中でも特に注意して拝見したもの一つですが、典型的な手工芸品のため大量生産は不可能で張子のもつ庶民性と温かみのある作品に暫し見惚れる程でした。

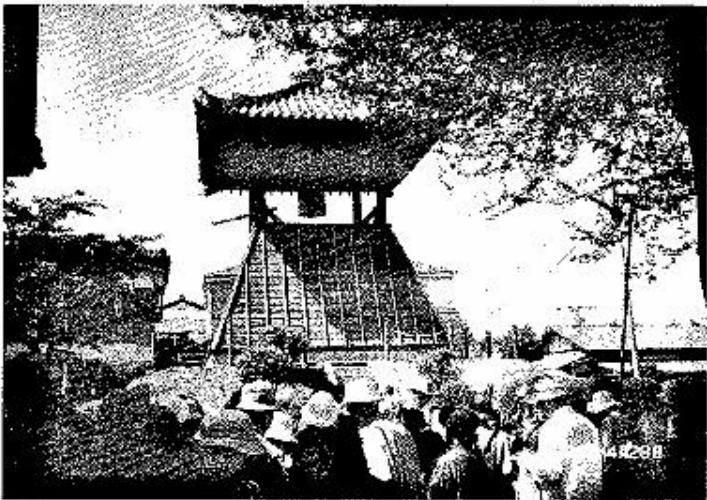
4 都團扇——この手工芸品について私は全く無知でしたので本日の見学で改めて知り驚きました。平安朝の流れをくむというこの作品は、その織細さと美しさ、しなやかさと共に実用面も兼備している。この伝統工芸は現在では関東地区では一人のみという。越谷市南町一丁目住の加藤昭邦様と姉様のこと。形状の美しさには感嘆しました。

5 越谷せんべい——江戸の米歳として良質米の産地であった越谷の特産品。これは近在の野田醤油の高品質商品に支えられた面もあるでしょうが、歯ざわりがよいのが人気の秘密とか。皆様方もこれを機に改めてご賞味しては如何でしょうか。

この様に我が越谷市には素晴らしい歴史的伝統工芸品が存在するは、関係業界や関係者の方々のご苦労と技能や自然環境に恵れた為もありましょう。今後とも維持発展を計り内外の地

位向上を推進するにはどうあるべきかの具体的意識が浮上しましたが、それは後日の研究課題にしたいと思います。

以上今回の岩槻市加倉から渋江までの史跡めぐりに当っては単に神社仏閣のみでなく産業文化史的勉強要素が多くあり広範多岐に亘る行脚ではなかつたかと思います。鈴木秀俊先生の行き届いた親切なご案内と説明、それに資料は大変有用で、これからも参考資料として活用させて頂きます。資料作成に当つては私達の気の付かないご心労やご家族の方々のご協力ご支援ものつたことでしょう。本当に有難うございました。



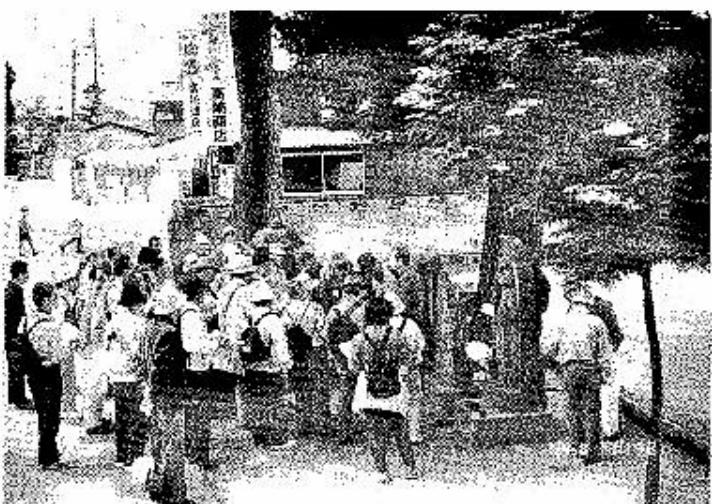
第230回 平成8年4月28日 岩槻・時の鐘

### 第二三一回 越谷市・大泊

・日時 平成八年五月十九日（日）  
・記録 小原勘三郎

・天候 晴

・参加者数 五七名  
・案内 加藤幸一



第231回 平成8年5月19日 越谷・大泊観音堂

「これは輪廻車といって、以前は車がついており、これを回すことによって供養が……」

加藤先生の詳しく述切丁寧な解説がつづく。これほどの説明をされるには、その数倍の知識をお持ちなのだろう。参加者は解説にききいる。

五月晴れ、緑の風。

ここ大泊綱音堂は、むかし、馬市で賑わったという。

堂内に絵馬がある。年代を経て細部はわからない。

登場する人物が当時の風俗をあらわしていておもしろい。

香取神社の境内は、以前は広かつたそうだ。神社の裏には広い杉林があったが、いまは宅地になっている。

ここにも各所からあつめられた石造物が数基ある。

それについても、この地区だけでこれだけの石仏があるというのはどうであろう。

むかしの人の信仰の深さにおどろかされる。

いまは宅地・道路開発で寺社の一角に石仏があつめられている。むかしは、見通しのきく畠の中のあちこちに立っていたはずだ。

暑い。夏のちかづく気配。

安國寺につく。

「いまあれば、県の天然記念物に指定されたはず……」の古松の写真を示して、高崎先生よりお話をある。

数百年を経た古木が、無造作に捨てられるのに心が痛む。

江戸幕府代々の将軍から下賜された当時の朱印状について鈴木先生が解説される。

新将軍により朱印状が下賜されると、前の朱印状は返還される

のが通例である。

歴代の将軍の朱印状が保存されていることは貴重である。明治維新、関東大震災、戦争中の空襲などの変動にもかかわらず保存されている。

足利尊氏が全国六十六ヶ国に安國寺を指定したとき、武蔵安國寺に当寺が指定された、といわれる。

桜井小学校のむかし話も興味をひく。拡張された校舎、関東大震災のようなど、小島先生のお話はつきない。

新方領にたつ耕地整理記念碑。

日本一大規模な事業とく。私財をなげうつた篤志家の努力、地権者のせめきあい、これらを克服した先人の苦心がしのばれる。

この巨大な記念碑は、コロにのせて春日部から運ばれてきたという。いまは、宅地開発にかくれて草むらにたっているだけだ。かえりみる人はいない。

市内各所に多数の文化財がある。ただ放置されている。歴史資料館建設の一歩も早いことを願う。



石鍋隆子画

## 第一二三三回 ベイエリア・副都心

・日時 平成八年七月二八日（日）      ・記録 S      ・天候 晴  
・参加者数 七八名      ・案内 宮川 進

新橋駅からのユリカモメは、終点有明駅迄十一駅所要時間約二十三分。見晴らしのよい広い窓から、隅田川の流れ込む東京湾が、湾内を行く船が見える。芝浦埠頭を過ぎ大きく一回転してレインボーブリッジを渡り、臨海副都心へはいる。「公約は守る」青島新都知事が、都市博を中止して一年がたつた、開発が知らぬ間にだらだらと進み、ホテルも開業、住宅も建ち学校も出来た。

都の注ぎ込んだ経費は二兆二十億円、都の試算では今まで通り計画を進めても、収支が合うのは三十八年後の二〇三四四年、臨海副都心の眺めは見晴らしもよく最高、いろいろな建物が出来るであろうが、どんな景色になるのやら、しかし東京都も都民も樂じやない。

### 船の科学博物館本館

入口よりはいると古代から現代に至る船の模型が並んでいる。

二つ目に籠船があつた。前に読んだことのある籠船が？

日本三景の一つ天の橋立の北に、二千年前からあると言はれる丹後籠神社がある。一風変った名称の神社である。常世信仰発祥の故郷と言はれ、その先祖たちが船に乗って常世の国との間を行き来したと言ふ。

籠船は六千年前のメソポタニア時代より現在に至る迄、ベル

シャ湾に流れ込むチグリス・ユーフラテス河畔で作られている。河岸に自生している葦（日本の葦より丈が長い）を刈り取り、叩いて平らにして籠目に編むのである。この地域は石油がしみ出してアスファルト状のものが流れ出す。これを編んだ船に塗ることにより、水の浸透を防ぐ事が出来る。葦船は軽い上に水流に乗れば、非常に早い速度で進む事が出来るし、多人数の乗り込む大型の船も出来る。

籠神社と籠船は何一つ関係がない。しかし籠神社は八十二代に渡って自分たちの素性を忘れる事はなかつた。自分たちこそ原日本人であると思いつけた。籠神社の秘宝「海部氏本系図」は長らく門外不出とされて來たが、最古の系図として国宝に指定されたのは、一九七六年つい最近の事である。この系図には高千穂の嶺に天孫降臨したのとは別に、丹後の国にも天孫降臨されたと記してある。この為その存在さえひたかくしにされ続けてきたのである。

岩手県一戸町から下北半島にかけて流布して、古来不可解とされていた「ナギヤドヤラ」なる民謡がある（昭和九年十月六日毎日新聞）、テレビでも紹介された事もあるが、これをカセットテープに採りニューヨークに住む、古代ユダヤ人の子孫（アジアセム系）に聞いて貰つた。暫らく聞いていたが「このリズムは、アラビア半島の突端イエメンにいるユダヤ人が歌い続けてきた歌とまったく同じだ。なぜ日本にこの様な歌が伝わっているのか？」。

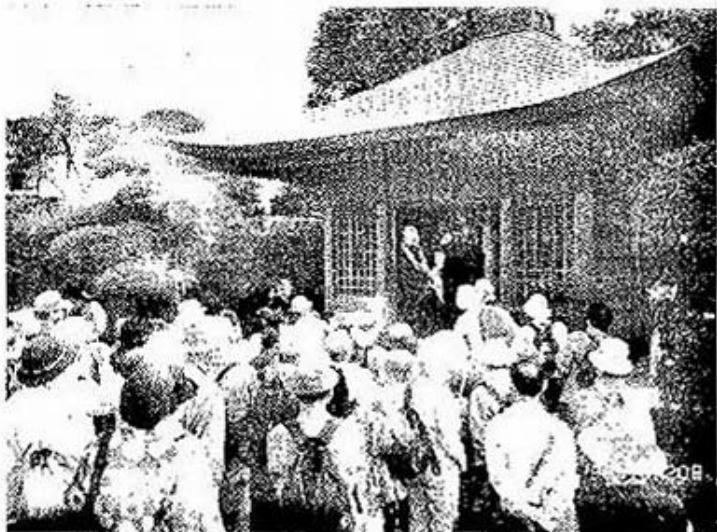
籠船の模型から籠神社、ナギヤドヤラの三題嗜はこの辺でお開らき、とに角夢のような話の好きな私である。

第二三四回 越谷市東町～吉川市

吉川方面の史跡めぐりのこの日は、丁度、新制度になつた総選挙の投票日に当りました。

・日時 平成八年十月二十日（日）  
・天候 晴  
・参加者数 七二名  
・案内 池田 仁・鈴木 稔雄

・記録 岡田 和子



第234回 平成8年10月20日 越谷・金剛寺  
聖徳太子胎内秘仏拝観

越谷駅東口に九時集合、今日は珍しく越谷からバスで行くので、吉川行のバスを待ち、七十名程が一台の始発にのりました。吉川橋で下車、先づ、南百（なんど）の水神社にお詣りします。今は越谷市東町二丁目と地名が変りましたが、昔は八条領南百村と呼ばれ、南百のド（ドー）は川の合流点を指すといい、元荒川、古利根川が中川に合流する場所に、鎮守として祀られ崇敬された神社です。落葉を踏み、神社の裏に廻ると、すぐ傍を元荒川が流れています。

南に向って出発し、広々とした田園の畦道で止まりました。前方に見田方遺跡の木々の縁が見えます。その辺りは、先日郷土研究発表会の時、高崎先生の発掘三十周年講演で、興味深いお話を伺った、土器発掘の現場との事です。池田理事より詳しい説明がありました。又ここから見える大相模地区、川柳地区は、レイクタウン整備事業の都市計画が決定された所で、約二三五ヘクタールの地域に、元荒川、中川の治水機能を持つ調節池（人造湖）を設け、湖を核とした全国初の内陸型水辺都市が創られます。この見渡す限りの田圃が、どの様な景色に變るのかと、想像して立っていました。

次の金剛寺は、奥州旧街道筋の古寺の一つで、住職が史跡めぐりの私達を待っていて下さり、聖徳太子像（胎内仏）を特別に開帳して下さいました。太子堂を開けると極彩色の像があり、お身体の中から、やっと頭の形と分かる古い木のお頭を取り出して見せて下さいます。江戸時代のもので、もと隣村四条妙

音院に祀られていた等々、由来を伺い、一同有難い仏様を拝ませて頂いたと、手を合わせました。

伊南理神社は商売の神様です。神社の隣りの東養寺の墓地で板碑や庚申塔を見て、自治会長よりウーロン茶を頂きました。

中川にかかる赤いアーチに広い橋桁の水管橋は、珍しく階段を登って行く橋です。橋の上からは川幅の広い悠々とした流れが見え、河川敷に作られた野菜畑、川の釣舟、遠くの森が、秋の雲と相俟つて、美しい風景でした。

橋を渡つて行った密巖院は大きなお寺で、法事がある様子沢山の車が入っていました。境内にある大イチヨウは、子育イチヨウと親しまれ、関東一の銀杏をつけるそうです。

舊高神社も商売繁盛の神様で、社務所をお借りして昼食にしました。昼の時間も短くして出掛けますと、空模様が急に変り雨が降つて來ました。次の清淨寺で本堂に上り、雨やどりをさせて頂きました。一時は激しい降りでしたが、通り雨の様で三十分程で出発し、幸い日も差して来ました。

牛田下車、京成関屋より乗車、高砂にて特急へ乗換。成田着時三十五分百人近くの参加者も無事全員到着。

資料が丁寧に読みやすく、事細かに解説をされているので一気に一読（現地に着いてから見学に、また説明を聞くことに役立ち一層の興味をそそられた）

仁王門の魚がしの大提灯が目に入る。江戸の名残りの魚がしの文字が大檀那を偲ぶ。本堂を拝礼、釈迦堂を一巡して五百羅漢の彫刻に体面、誰に似ているかを楽しみながら往時の彫刻師の技に感動。堂内の如来、菩薩に拝礼。額堂に奉納されている絵馬等に注目。往時の講中に信仰の深さを偲ぶ。各堂を拝礼して、平和大塔へ向う。登ったことがあるので今回は休息。眼下の噴水、落下する水を眺めながら、三重塔の彫りものは素晴らしいが色彩が派手なので白木の地味な方が奥ゆかしく感じると独り合点する。

仏教で五色のあの色が何かの意義があると教わったが思い出せない。十二時休憩所に向う。二時迄自由行動。

成田名物うなぎを昼食にとり、公園内を散策、右へ行けば梅林の方角になるが左の坂道を行く。誰にも会わず、唯一一人、お山の中だとは思えない静けさ。門前近くへ来た時、大日如

## 第一三五回 成田山・新勝寺

・日時 平成八年十一月四日（月）・記録 高山 はつ  
・参加者数 九五名  
・天候 晴

・案内 野村 勝八

この寺は元荒川が中川に合流する東岸に当り、最初の水神社より、ぐるりと一周した事になります。三時のバスにのり越谷へ帰りました。

この様に、近い所に由緒ある社寺が沢山ある事を初めて知り、意義のある楽しい秋の一日でした。

来の石像を中心に左、右、何体かのお地蔵様が赤頭巾、ヨダレ

掛をして並び幾重にも納札紙が貼られていた。人通りのない道

にこの様な巡礼をする信仰があるとは、不動尊（大日如來の化

身）に助力を願う子供の供養なのかと足を止める。かなりの急

坂、横道から本堂へ、本堂裏側へ廻り石段を上がる。大日如來、

聖徳太子など近々と拜礼、振返り向いの石垣の上に不動明王の

眷属、八大童子、三十六童子の像が立ち並び、不動明王のお使

いとしてお声が掛れば即座に飛び出せる様に身構えている。そ

れぞれの童子が信仰者の願望に応じて利益を与えてくれること

によつて不動信仰は盛んになって来たのだと思う。感謝合掌。

休憩所に戻り一休みしている処へ親しい仲間の方々が戻つて

来られたので、早速拝礼を勧める。荷物番をして待つ。皆さん、

気分がすっきりして身が軽く清々しくなつたと。私もうれしい。

二時休憩所出発、一切経堂に入りお經を廻して御功徳を得る。

開運地蔵に願を込めて参詣、門前道の土産物屋を横に眺めてJR

成田駅へ向う。

境内は、菊花展、七五三参りと秋らしい行事で賑わい、花壇

の香りが一段と爽やかに風に乗り、気分最高。

成田山に、あのような見所があるとは今まで知らなかつた、

今日は意義ある一日でしたと感動の言葉を聞く。また史料館が

休館のため見学不可で残念、見返りに開運招福のおしゃもじを

お土産にいただいて役員のお心遣いに感謝。JR成田始発我孫

子行乗車。千代田線我孫子始発乗車、新松戸で武蔵野線乗換南

越谷下車、四時十分帰着。ゆっくりと席に着き、疲れもとれ御

配感謝。

## 第二三六回 鎌倉

・日時 平成八年十二月一日(日)

・天候 晴

・参加者数 一一八名

・案内 宮川 進

・記録 古田 美雄



第236回 平成8年12月1日 鎌倉・十二所神社

「秋のおわりに鎌倉塩の道、古寺とお庭をめぐる」に参加する機会にめぐまれました。

「すわ鎌倉」・・醤油は野田、こんな馴熟落がありますがその鎌倉には過去何回か旅行した記憶がある。初めは小学校の遠足その後四十年程は御無沙汰して昭和五十三年代その頃は大仏には棚がなかった気がする。昭和六十年代に行った時は拝観料がいるようになっていた。会では過去数回鎌倉の史跡めぐりを実施していますが、所用と重なり不参加でした。今回は鎌倉の東側で、行つたことがないこと、紅葉がきっと美しいだろう、坂東三十三所観音の第一番札所杉本寺がありその寺の朱印がほしかった。朱印については何年か前に会で行つた栃木の十七番札所出流山満願寺に行った時ははじめて朱印帳に朱印を受けてその後に十一番の岩殿山安楽寺の朱印を受けてから第一番札所はどこだと調べたところ杉本寺とわかりかねてから予定していたと言う簡単な理由で参加した。

当日、〇八・〇〇南越谷駅前集合約一二〇名、いつもよりかなり多い、〇八・一五南越谷発の武蔵野線に乗る南浦和駅で京浜線に乗りかえ東京駅で東海道線に乗り戸塚駅にて横須賀線に乗りかえるためホームに降りたところ風あり帽子を飛ばされ一寸あわてる、右手に大船観音をながめて、しばらくして鎌倉駅につく、一〇・二〇。資料は、いつも現地につくまでに全部一応読み終えるようにしているが、今回は半分程残してしまったので地理及史実がのみ込めていません。

駅前にて小休止してから徒步で若宮大路に出て第二鳥居を少し北行してから右の小路に入りハゼカナカマドかよくわから

ないが見事に紅葉した木を愛でながら行くと突き当る宇津宮稲荷の脇にある「宇津宮辻子幕府旧蹟」の碑に出会う。此の地は北條政子が死んだ嘉祿元年（一二二五）に大藏にあつた幕府が宇津宮辻子に移つたと碑文にある。辻子とは大路と大路を結ぶ小路を言うと資料にあり、広辞苑にはなし。碑から左に折れて小路を行く、途中は住宅街のようで大佛次郎宅があり庭の紅葉が見頃であった。なほ進んで約二五〇メ位いった辻の一隅に「若宮大路幕府旧蹟」の碑がある、此の地に宇津宮辻子から嘉禎二年（一二三六）に移り元弘三年（一二三三）鎌倉幕府が新田義貞に攻められ滅亡するまで幕府があつたところ。そこより歩いて引き返し左に曲った処に妙隆寺があり。資料によると元中二年（南朝）至徳二年（北朝）（一二八五）日英上人を開山として創建第二祖日親上人は堂前の池で寒一〇〇日間行水の修行された。京都に上り將軍足利義教の政道を諫めようとしたが弾圧にあい舌端を切られたり焼き鍋をかむせられる極刑まで受けたが堪え忍び法華弘通につとめて、なべかむり日親の名を残したりとある。又境内には新劇の丸山定夫の碑がある、なんの縁でここにあるかは説明を聞き損じたのでわからないが弾圧とかかわりがあるのかも。

この寺から一度鎌倉駅に引きかえしバスに分乗する一一・一五バスは、一の鳥居を右に折れて朝比奈の切通口に向う。鎌倉は三方が山で一方が海に囲まれた要害で七ヶの出入口（切り通）がある。「西から極楽寺坂、大佛坂、化粧坂、亀ヶ谷坂、巨福呂坂、朝比奈、名越。」

道は少し登り約一五分後、十二所神社で下車。道に沿つて一

五〇米程歩き左側の小山を切りひらいたような平坦地の南面に二十段ほどの石段を登ると、石の明神鳥居があり正面に社殿右手に神楽殿あり境内はそれほど広くない、祭神は東京新宿にある十二社神社と同じで、天神七柱地神五柱の十二柱で前身は熊野社と言う。勧請年月日は未詳の由。ここにて昼食となり境内は風が通り寒く参加者は階段下の日溜りにて喫す。このあたり人家少し竹林多し、食後一二、二〇に此の地を出発して、もと來た金沢街道を引きかえし約四〇〇米歩き三叉路を左に曲り二〇〇米滑川にかかる光触寺橋を渡ると正面に素朴な山門あり石段を登りこれをぐぐり無数の石佛石塔が並ぶ参道を行くと左側に岩藏山光触寺本堂ありその右側に小さな祠に祀られている石地蔵菩薩あり、昔金沢街道を通って鎌倉へ向う六浦の塩売りが行きがけに初穂の塩を備えると帰る時にはその塩がなくなつていたという説話から塩嘗地蔵と呼ばれている。この寺はもと真言宗の寺で弘安二年（一二七九）に一遍上人を開山に迎え、時宗に改めたとされているが詳かではない由。本尊は阿弥陀如来立像で觀音菩薩勢至菩薩の両立像を脇侍に從える、この阿弥陀如来は俗に頬焼け阿弥陀と呼ばれる不思議な話が「頬焼阿弥陀縁起絵巻」に伝えられている。皆本堂に上がり本尊を拝す。本堂の左手に大きな紅葉二本あり日を受けて實に美しいので写真を撮る。次に訪れたのは、光触寺より四〇〇米駅に向って街道を歩き右手にある二ツ橋を渡つて一〇〇米位進むと冠木門ありその先に小山を背にして、飯盛山寛喜寺明王院五大堂のかやぶきの本堂がある。真言宗京都仁和寺末で嘉祐元年（一二三五）六月創建。開山は初代の別当は元鶴岡八幡宮の別當定蒙。開基

は藤原頼経。本尊は不動明王。弘安四年（一二八一）元寇にあたり異国降伏の祈禱が行われたことが知られている。本堂の右後背に大いなる銀杏ありその黄葉がすばらしかった、又境内に石灯籠がいくつかありめずらしく思った。

次に訪ねる淨妙寺に行く途中、街道に出て二〇〇米位歩いたところで右に一寸入った處に足利公方邸跡の碑が細い紅葉の木の下に立っている。そこから寺までは四〇〇米位街道を行き右に二〇〇米ほど入った處に山門あり現在修理中で、おおいがかけてあるので右に道を取ると、そこは真赤な紅葉の大樹が左右にあり実にすばらしい道であった。此の寺は鎌倉五山第五位に列する臨濟宗。文治四年（一一八八）足利義兼を開基として創建された。当初は極樂寺と称する密教系の寺院であつた由。のちに月峯了然が住職となつてから禪刹に改められ寺名も中興開基、足利基貞（尊氏の父）の法名淨妙寺殿をとつて稱荷山淨妙寺と改称された。正嘉年間（一二五七～五九）のことの由。足利義満の頃は足利氏の祈願所となつていて、七堂伽藍に二十三院の塔頭を備える大寺であつたが、たびたびの被災で、衰微して現在は、宝曆六年（一七五六）に再建された本堂、総門、客殿、庫裏、収蔵庫が残っている。本堂の左手には喜泉庵があり杉苔を主にした美しい枯山水の庭園がある遠景に所々に紅葉の借景あり。資料によると、「五山とは中国及び日本の禪宗の寺格で、五山、十刹、諸山とある三階級の最上位で、鎌倉幕府は禪宗が盛んになると建長、円覚等の寺に、この称号を与えましたが、京都五山と共に幾度かの組替えの後応永一七年（一四一〇）に現在のかたちにおさまった由。

五山之上、南禅寺、五山一位、建長寺、天竜寺、五山二位、円覚寺、相国寺、三位寿福寺、建仁寺、四位淨智寺、東福寺、五位淨妙寺方寿寺」。

淨妙寺を後にして街道に出でから一〇〇米ほど歩いて、左に華ノ橋を渡つて、とろとろ坂を一五〇米位い登つた右に一寺の山門あり、小振りだが確かりした造り、内に入ると銀杏の葉が黄色にしきつめたように散つてある。右手に本堂あり。功臣山報國寺と言う。

開山は、天岸慧広が建武元年（一三三四）に座禅堂を建立した。開基は足利家時（尊氏の祖父）と、言われている。この寺は竹の庭で有名で本堂左手より入ると、よく手入された庭があり、静かな竹林を歩ぐのもよいものでした。開基より約一〇〇年後に、永享の乱（一四三八）起り、室町幕府との争いに敗れた、第四代鎌倉公方足利持氏（四二才）は、永安寺で自刃。子義久（十一才）は、この寺で自刃している。竹の庭の奥に、その墓と言われるものあり。又鐘楼横に、供養塔と刻まれた五輪塔があり、その周囲に百基余りの小さな五輪塔群がある、鎌倉幕府滅亡の折の北條氏、新田氏が、由比ヶ浜で戦つたその時の、両軍の戦死者の遺骨を改葬したものと言われている。このような話や石塔群を見ていると栄誉栄華と人の命のはかなさに寂寥感におそれ、一句浮かぶ。

紅葉散る一期一会の風にのる

寺を出て、もとの金沢街道を西に二五〇米ほど歩いた、右手に今日最後の訪問地。大藏山杉本寺觀音院がある、大藏觀音、杉本觀音、とも言われている。天台宗である。もと宝戒寺末で、

現在は比叡山延暦寺末。天平六年（七三四）行基の創建、中興開山慈覚大師。鎌倉最古の仏跡と、言われている。坂東三十三観音の、第一番札所である。本尊は十一面觀音菩薩三体。本堂、弁天堂、仁王門、庫裏がある。重要文化財に、木造十一面觀音像（伝僧円仁作）木造十一面觀音立像（伝僧源信作）が指定されている由。

この寺の後の山は、いわゆる杉本城跡である。この寺は、街道からすぐに階段あり、平地、階段と登つて行くと途中、仁王門あり阿吽の二体の仁王が金網なしで立つて、階段は、狭く急であり、息を切らして本堂に至り、参加の第一目的の朱印を受けるために、受付に朱印帳を渡し待つていると、次から次と人来り、押されて後へさがるために、体重を後に移し、足を移動しようとしたが、足元に障害物あり移動出来ず体のみさがったため直後に仰向けに倒れてしまつたが、人が多く、ゆっくりと倒れたため無傷であったのが何よりであった。おかげで、こここの朱印は、思い出深いものになりました。

山を下り、目の前のバス停からバスに乗る。徒歩で駅に向つた人もいる、約二杆の道のりである。駅には、一五・〇〇には着く。帰りの電車までには一時間余りあり、それぞれ小町小路を散策し、お土産など求めて、一六・一六発のホリティー快速に乗車して、南越谷に一八・一六着で、全員無事に帰り解散。

一日を振りかえり、鎌倉について知識がないのに驚いた。が、すわ鎌倉と言う話になると鉢の木の話がすぐに出で来る不思議。

小学生で習つたからか。こんな句も浮んだ。

雪暮れて 梅松桜 いろいろの火

## 第一三七回 新宿七福神

・記録 池田

仁

・日時 平成九年一月三日（日）  
・天候 晴  
・参加者数 一一〇名  
・案内 山田 政信

新宿山ノ手・七福神めぐり

平成二年より実施されている七福神めぐりは、今年、八回目を迎えた。仏像や寺社の歴史に造詣の深い山田副会長が、毎回、案内役を勤めて下さっている。

午前九時、越谷駅前に集合。参加者一一〇名。天気晴朗にして穏やかな小春日和、絶好の巡拝日となつた。新年を迎え、どの方にも今年こそ、「良い年になるように」との願いが込められていた。谷岡会長のあいさつがあり、飯田橋駅に向って乗車。十時三十分、飯田橋駅西口に到着。牛込見付跡地で山田副会長より、七福神に関する前知識と見どころ等の説明を伺つた。

緑の小旗を先頭に、整然と長蛇の列が牛込橋を渡り、西方に歩く。神楽坂通り入口に、商店会が作成した「初詣は毘沙門天へ」、歓迎の横断幕が下っていた。商店街は正月で扉を降ろし、人通りもまばらで、静かに息を潜めていた。白・朱色のタイル造りの近代的な店構えに老舗店が混じり、新旧が織りなし、歴史の古さを感じる商店街に思えた。

道の左手に、江戸時代から参詣客で賑つていい善國寺が在る。本尊は甲冑具足に身をかためた勇姿の毘沙門天で、ろうそくの灯る堂内奥に立像。境内には、受験合格、結婚の祈願絵馬や、おみくじが花の如く枝に結びつけ、信仰の厚さが伝わってくる。左折して大久保通りを歩く。七福神めぐり案内の黄旗に従い石段を登る。正面に高層ビルを背景に小ぶりの経王寺が窮屈そうに建っている。度重なる火災にも焼け残った火ぶせの大黒天が祀られている。線香の煙がたちこめていた。

若松町交差点を左折して明治通りに向つて歩く。前方に林立



第237回 平成9年1月3日 新宿・太宗寺

する摩天楼が迫るように目にとび込む。抜井天前交差点、車

通の多い喧騒で狭い角地に、古くは源義家が後三年の役の戦勝祈願に立ち寄り、願いを達したので、お礼に厳島神社を建立し

たと伝えられる。その後何回か戦災に遭い、現在、氏子たちの

熱意によってか、ま新しい小社を再建し弁財天も祀られている。

左手に岩石で囲まれた小池が造られ、寒椿が咲き誇っていた。

大通りから住宅の多い閑静な通りを三分ほど歩くと、右側に法善寺、健康と長寿を授けてくれる寿老人が、そして、向い側に水福寺、福祿寺が祀られている。

目抜き通りの脇ついている商店街を横断した左側に、社域の広い鬼王神社が在る。鳥居をくぐると、神殿を警衛する一对の大きな狛犬、銅板葺の重厚な神殿が、何本かの巨木を背に鎮座し、薄暗さがより莊嚴さを増していた。左手に家内安全・商売繁盛を授けるといふえびす神を祀った小社が建っている。

明治通りを南下し、二十分ほど歩くと、結願の太宗寺に着く。

門の右手に江戸六地蔵の一つ、金銅つくりの地蔵尊が立像し優しく見守っている。その隣りに閻魔堂が建ち、堂内には都内最大の木造閻魔像と木造の脱衣婆の座像を安置。左手に重厚な本堂が建ち、布袋尊が祀られている。

全員、頑張って無事に結願を果たした。やすらぎと成就感が現われていた。巡拜のご利益があらんことを祈願します。山田副会長のまとめの話、谷岡会長の終りのあいさつがあり、午後一時、感謝の拍手で解散。歩数一万五千余（西田理事の万歩計）

## 第二三八回 川本町

鹿島古墳と畠山重忠墓

記録 佐々木一磨

日時 平成九年二月二三日（日）

天候 晴

参加者数 五一名  
案内 宮川 進



第238回 平成9年2月23日 鹿島古墳

電車とバスを乗り継ぎ、およそ二時間を費し、最初の訪問地である『史跡・鹿島古墳群』に到着した。多數の参加者に初参加の私など当初から感嘆した。熊谷駅前から東武バスに乗ったが、間もなく荒川大橋にさしかかった。水量こそ少なめであるが、荒川の上流と周辺の風光の素晴らしさにまたまた感嘆。平方で下車、日指す古墳群へと歩を進めた。街道より畠なかに入るところ、雜木林や麦畠が見えてくる。武藏野の面影が色濃く残る閑静なところであった。早速本日案内の宮川幹事さんから懇切丁寧な説明があった。

田墳は小型であるが一〇〇基以上もあったとのことで、大古墳群の名に適わしい。内部を覗き見ることはできなかったが、形状は恰も汁茶碗を伏せたようで、一見可愛らしい感じがした。円墳の頂上にはクヌギやナラなどの低木が十本前後茂っていた。ついで、『白鳥渡来地』として近年とみに著名になつた荒川右岸の河原に降りた。個体数は八十数羽と聞いていたので、ある程度の壯觀さ〔遊泳や飛翔の姿〕に期待していた。ところが白鳥たちは數種の鴨類を混じえて、水際の日だまりで、羽を休めているところだった。少々残念であった。それでも、さすがは白鳥、その純白さが眼に沁みるようであった。しかも、清冽な荒川の流れと相俟つて、その姿を眼前で見ることができたことは満足であった。大急ぎでカメラのシャッターを押し続けた。

美しい」と言えば、冠雪の『赤城山』と『秩父連山』が望して澄みわたった空の三づくめを背景に、赤城の雄峰と秩父の山なみが輝いているのが鮮やかだった。

白鳥たちと別れ、私たちは暫しの間、昼食と休憩をとつた。一時を過ぎた頃、最終の目的地である『畠山重忠公史跡公園』へ向け、勇躍として出発した。それほど遠くはあるまい、と予想していたが、案に相違し、かなりのキロ数であった。どなたかが話されていた。大勢の人と一緒に、飽きも退屈も疲れも憶えないんだね。私も同感であった。逆川まで徒步。そこからバスに乗り込んだ。私たちだけの団体貸し切り同様で終点の本畠に着いた。町なかを十分ほど歩き町はずれに出たところで、ようやく史跡公園に辿りついた。

公園は意外と小規模であった。周囲は巨木が並びたち、うつ若として、うす暗かつた。入口の右側には、かの有名な「重忠公の愛馬・三日月を背負う」銅像が建っていた。重忠公と一族ゆかりの石碑・墓石や加羅木それに館跡など、古色蒼然とした趣きに、鎌倉時代きての名将—そのうえ、我らが郷土の著名人に思いを馳せつつ、往時を偲ぶことができだようと思う。宮川さんから「重忠公の史話」を拝聴し、更に、由緒ある『鷺の瀬』に向う。

重忠公が荒川増水の折、鷺に導かれて浅瀬を教えられて渡つたといわれる地点は定かではないが、渡りの附近に標記があり寺院になっていた。萬福寺である。

最終コースは『井惊神社』である。延喜式にも記載されている吉田町・掠神社から勧請された古社のこと。掲額の文字も消えかかり、しかと読めなかった。

これで見学・學習の全コースを滞りなく巡り、帰路に着いた。荒川の右岸沿いに武川駅まで再び徒步で頑張った。参加者の

集団に遅れないよう歩調を整えては、本日の収穫について考えて

いた。しかも、折角の風景も見落したくない。そこで先ず念

頭に浮かんだことは、初心と原点にかえるということだった。  
歴史や民俗の学習・研究の第一歩は「歩く」ということに尽きる。必ずしも名勝地・旧蹟とは限らない。ひとつの旧家・ひとりの古老を訪ねることである。百聞一見に如かず、とは正に名言である。

筆をおくにあたり、今回の史跡めぐりについて、機会を与えてくださった郷土研究会の役員はじめ皆々様に感謝申し上げる次第である。



石鍋 隆子画

### 第二三三九回 博物館めぐりと上野の山

記録 谷岡 隆夫

・日時 平成九年三月一日（土）

・天候 晴一時小雨

・参加者数 四八名

・案内 小原勘三郎

今回は会員のみの史跡めぐりだが、参加者は予想を越え四八名。越谷駅頭の受付で、会への新入会員が二名あり、郷土研究会の会員数は丁度二〇〇名となり、会にとつては記念すべき一日となつた。

午前九時スタートし、當団上野駅下車。東京都美術館に入る。「毛利元就展」の国宝五点、重文七〇点を含む二一〇余点を拝観。NHK大河ドラマ放映中の影響もあり、大勢の入館者に混じっての拝観だが、毛利家の数多くの書状や文化財の遺物に固唾をのむ。次に国立博物館の「興福寺国宝展」。仏頭を始めとする国宝、重文など七〇点の展示を拝観。雄大な建築物であるこの博物館の入館と同時に、入口より始まる仏像群のしかかる威圧感と異次元の世界にしばし没頭。

昼食は博物館内精養軒で思いに・・・の積りが混雑で一部の会員にはご迷惑をおかけした。午後のコース、「上野の山」の史跡めぐりに入る矢先、あやしい黒雲。そして雨。しかし第一の目的地、両大師での現地説明が終れば雲は遠のき雨の心配はなくなる。

江戸時代、寛永寺は寺域三〇万坪、子院三六坊と山全体の膨大な寺地を有し、鉄道が開通するまでは、上野台地は東へならかに延びていたといふ。

寛永寺の墓地。この墓地には徳川將軍の吉宗公ほか五基があるが、最後の將軍慶喜公の墓は神式の事情でここに埋葬が許されず北の谷中靈園の一角に葬られている。徳川家の將軍の墓は日光で二基、この寛永寺で六基、芝増上寺で六基と同じ配分で、政治がらみ、情がらみ、今も昔も驅引は健在である。

寛永寺根本中堂の前で、小原理事のユーモアをまじえた幕末の江戸明け渡しの解説があり、一同拝聴。

芸術大学横を通り、京成線博物館動物園駅の前で、ストップ。この駅は六九年前ピラミットの議事堂の形に建てられたが、地下ホームの長さは七五メートル、四両の停車がやっとで、今年三月末で駅の営業が中止となる。

旧因州池田屋敷表門の説明を聞いた後、広場噴水脇の小森の中、ボーダーワン博士の胸像へ案内された。彼はオランダの軍医で、わが国最初の公園、上野公園を建議、上野戦争で荒廃した寛永寺境内の自然美を保護するよう維新政府に提言し、公園設置のきっかけを作った人物。次に小松宮彰仁親王の銅像と背後のグラント將軍の植樹碑に案内。アメリカの十八代・十九代と二期にわたって大統領を歴任したグラント將軍が、来日の際に夫人と二人で植樹されたヒノキとタイサンボクがみごとな大木に成長して、上野の高台に歴史の趣きと重みを添えている。

東照宮、お化け灯籠、時の鐘、五条天神、清水観音堂と見所は多い。京都の清水寺になぞらつた清水観音堂は寺は小振りな

がら似ている。不忍池は琵琶湖、弁天島は竹生島と西に模している。日頃、上野というと動物園と花見がメインで、裏通りの数々の名所といわれは熟知していないのが実状である。

西郷隆盛像の周辺は相変わらずの賑いだ。その隣の彰義隊の墓とお堂は今も彰義隊のゆかりの子孫が管理されているそうだ。上野戦争で彰義隊が敗れたあと慶應四年九月、元号が明治に改められ上野の山もこれを機に一変する。

彰義隊の墓で、今日の史跡めぐり終了の会長の挨拶があり、解散となる。解散時の参加者の満足の表情が、役員にとって何よりも貴重に感ずる一瞬なのである。



第239回 平成9年3月1日 上野寛永寺

写真提供 伊藤 靖二氏

# 文化祭展示出品リスト

展示場所越谷コミセン

回数	出品年月	出品作品名	出 品 者
第25回	平成5年11月	1) 越谷富士講中の寄進灯篭 2) 越谷に落ちた隕石 3) 旧平方村の石仏類 * 4) 明治天皇山植御覽の処 5) 仏像の理解と鑑賞 6) 旧出羽村の文化活動 7) 綾瀬川の源流 * 8) 市神神社 9) 一の網土橋架け替え願書	小原勘三郎 小島 誠 加藤幸一 鈴木秀俊 高橋 清 名倉さわ 宮川 進 山崎善司 吉田敏子 加藤幸一 小原勘三郎
第26回	平成6年11月	1) 桜井地区(平方を除く)の石仏類 2) 野島地蔵尊の江戸開帳 3) ご朱印状 * 4) 越谷吾山の碑 * 5) 長寿と健康の光頭会 6) 新川町で煙草醤油砂糖の使い始め 7) 観照院創建時の本尊発見について 8) 明治32年の流星群 9) 古利根川の源流	小島 誠 鈴木秀俊 高崎 力 高橋 清 名倉さわ 西田 茂 宮川 進 小原勘三郎 加藤幸一 小原勘三郎
第27回	平成7年11月	1) 芭蕉の句碑 2) 旧船渡 大松 大杉村の石仏 3) 越谷の道しるべ 4) 越ヶ谷駅の開業 5) 七左町の本山修驗宗三明院 6) 赤山陣屋と赤山街道 * 7) 消えた木造校舎 8) 越谷上空で散華した飛行兵 9) 昭和10年の越ヶ谷電話番号簿 10) 新方川(千間堀)の源流	加藤幸一 加治正則 小島 誠 鈴木秀俊 鈴木種雄 高崎 力 高橋 清 谷岡隆夫 宮川 進
第28回	平成8年11月	1) 旧川崎・向畑・大吉・弥十郎村の石仏 2) 地券(明治初年の土地所有証券) 3) 大沢の鎮守 香取神社 4) 明治初期の越ヶ谷の村落 * 5) 火消ポンプ 竜吐水 6) 東京周辺の飛行場群と 幻の越ヶ谷飛行場 7) 瘟病と鬼子母神 * 8) 大松の清淨院 9) 近藤勇 越ヶ谷宿にて逮捕 10) 越谷市内の火の見やぐら	加藤幸一 小島 誠 鈴木秀俊 菅波昌夫 谷岡隆夫 高橋 清 名倉さわ 西田 茂 堀切祥民 調査グループ 代表宮川進

\*印は市民祭にも展示

回数	実施年月日	行先	案内者
1	昭和41年 2月27日	大相模不動尊	
2	3月27日	野島 地蔵尊 浄山寺	
3	4月24日	大房 浄光寺	
4	5月29日	大泊 安国寺	
5	6月16日	増林 林泉寺 二十一仏板碑	
6	7月24日	蒲生 清蔵院 地蔵院 中野邸	
7	9月 4日	久伊豆神社	
8	10月 2日	四丁野 迎撰院	
9	10月23日	下間久里 獅子舞 袋山久伊豆神社	
10	11月20日	新方 清淨院 聖徳寺	
11	12月18日	天嶽寺 久伊豆神社	
12	昭和42年 3月26日	瓦曾根 照蓮院 見田方古代住居跡	
13	4月23日	平方 林西寺	
14	6月25日	末田 金剛院 大戸 第六天神社	
15	12月 3日	松伏 静栖寺 宝珠院	
16	昭和43年 3月31日	大川戸 光巖寺 杉浦家	本間清利
17	4月28日	武里 円福寺 稲荷神社	
18	6月23日	川口 赤山城跡 西福寺 新郷貝塚他	
19	7月28日	岩槻城跡 芳林寺 遠喬館 時の鐘他	
20	9月29日	草加 東福寺 松並木 札場河岸他	
21	10月27日	春日部 玉蔵院 最勝院 薬草園他	
22	11月24日	春日部 梅若塚 山口孝氏宅他	
23	昭和44年 1月26日	神田明神 將門首塚	岩井 茂
24	2月23日	慈恩寺 十三重の塔	大野伊右衛門
25	3月16日	浦和 埼玉会館 美術館 玉蔵院他	
26	4月27日	大相模不動尊	
27	6月22日	石川新太郎氏宅 熊野神社 定勝寺他	
28	7月27日	幸手 宝持寺 図書館 正福寺	
29	9月26日	久伊豆神社例大祭見学	
30	10月26日	八条社殿 和井田塚 清勝院他	
31	昭和45年 3月22日	五霞村 静御前の墓 栗橋城跡他	
32	4月26日	姫宮 宝生院 西光院 内牧薬師他	
33	6月28日	増林 林泉寺 二十一仏板碑	
34	7月26日	浦和 日光街道展 氷川女体神社	
35	9月27日	野島 浄山寺 金剛院	
36	10月11日	大泊 安国寺	

回数	実施年月日	行先	案内者
37	昭和45年11月29日	行田 埼玉古墳群 資料館 前玉神社	
38	昭和46年 2月28日	蒲生 清蔵院 地蔵院 照蓮院	
39	3月28日	吉川 道庭の百庚申塔 密蔵院他	
40	4月25日	大門 会田本陣 脇本陣 大門神社他	
41	6月27日	天嶽寺 久伊豆神社 有瀧アーチ	
42	7月25日	武里 東福寺 円福寺	岩井 茂
43	10月17日	久喜 戸賀鍊武場跡 甘袴院	三原善太郎
44	昭和47年11月28日	大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村	
45	2月27日	新方 聖徳寺 清淨院	
46	3月26日	増林 林泉寺 勝林寺 宝生院	
47	4月23日	平方 林西寺	
48	6月25日	大房 浄光寺 薬師堂 五智堂	
49	7月23日	古河 光了寺他	佐々木資郎
50	9月24日	金沢文庫 称名寺	岩井 茂
51	10月22日	蒲生 清蔵院 普請供養塔 藤助河岸	
52	11月26日	羽生城跡 田舎教師の墓	
53	昭和48年 2月25日	大泊 安国寺 上間久里地蔵尊他	
54	3月25日	平将門を訪ねて 国王神社 安念寺他	今井隆助
55	4月22日	行田 埼玉古墳 資料館	日置宗一 三原善
56	6月24日	野島 浄山寺 金剛院 第六天神社	
57	7月22日	大相模不動尊 見田方遺跡 宇田家	本間清利
58	9月16日	大松 清淨院 川崎聖徳寺	
59	10月21日	下総国府台城跡 真間の手児奈	山崎善司
60	11月18日	大房淨光寺 神明七左衛門の墓他	
61	昭和49年 3月24日	大宮県立博物館 楽天会館 寿能城跡	
62	4月28日	下総国府台城跡 手児奈 柴又帝釈天	
63	6月23日	騎西町周辺	山崎善司
64	7月28日	春日部小淵觀音 不二山 最勝院	
65	9月27日	野火止 平林寺	
66	10月21日	大相模見田方遺跡 南千疋二十一仏	日置宗一
67	昭和50年 3月30日	増林 林泉寺 勝林寺 増森二十一仏	
68	4月29日	野与党を訪ねて	山崎善司
69	6月22日	見沼通船堀 清泰寺 見性院の墓	日置宗一
70	7月27日	大宮県立博物館 浦和市立博物館	
71	10月27日	野島 浄山寺 金剛院 第六天神社	
72	昭和51年 2月22日	行田 埼玉古墳群 前玉神社	

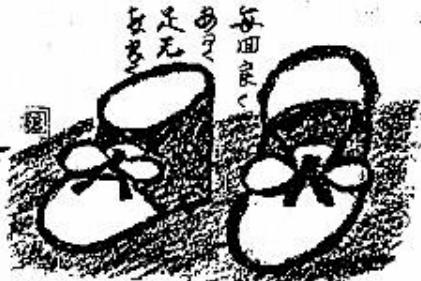
回数	実施 年 月 日	行 先	案 内 者
73	昭和51年 4月25日	将門を訪ねて 国王神社 安念寺他	
74	7月25日	川崎聖徳寺 大松清淨院 開山塚	
75	10月24日	取手方面 染野家 長禅寺 三仏堂他	
76	11月28日	朝霞方面 東円寺 本仙寺	
77	昭和52年 2月27日	竹の塚方面 炎天寺 桂昌院の墓他	
78	4月24日	野田博物館 金乗院 岩名洞窟	
79	6月26日	野島 浄山寺 金剛院 第六天神社	
80	7月24日	神明七左衛門の墓 迎撫院 浄光寺他	
81	9月18日	出羽観照院 大沼大明神 安行戸塚城	
82	10月23日	増林 林泉寺 勝林寺 増森二十一仏	
83	11月27日	岩槻城跡 净安寺 竜門寺 時の鐘他	
84	昭和53年 2月19日	県立埼玉会館 県立文書館	
85	3月19日	大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村	
86	4月30日	国府台城跡 真間の手児奈堂 帝釈天	
87	6月18日	川越方面 喜多院 川越城跡他	
88	7月23日	流山方面 東福寺 近藤勇陣屋跡他	
89	9月24日	行田 埼玉古墳 資料館 前玉神社	日置宗一
90	10月22日	関宿 実相寺 宗英寺 貢太郎記念館	木原徹也
91	11月26日	結城方面 称名寺 弘経寺 慈眼院	山崎善司
92	昭和54年 2月25日	国分寺方面 薬師堂 武藏国分寺跡他	日置宗一
93	3月25日	大相模不動尊 飯島八塚 觀音寺他	山崎善司
94	4月22日	鎌倉 賴朝の墓 八幡宮 錢洗弁天他	山崎善司
95	6月17日	新方 聖徳寺 清淨院 向畠陣屋他	石塚吉男
96	7月22日	東京 将門首塚 皇居東御苑	
97	9月23日	栗橋古河方面 静御前墓碑 公方館他	山崎善司
98	10月28日	吉川 千駄庚申塚 密嚴院 戸張家墓	中村忠夫 鈴木種雄
99	11月25日	西新井大師 中曾根城跡 関原不動院	
100	昭和55年 3月23日	日光街道千住宿 橋戸町 河原町他	山崎善司
101	4月29日	国府台城跡 真間の手児奈堂 帝釈天	日置宗一 山崎善司
102	6月29日	草加宿 大和屋跡 大川家 松並木他	
103	7月27日	天嶽寺 御殿跡 市神社 香取社他	石塚吉男
104	9月28日	春日部宿 山中觀音 浅間山 梅若塚	
105	10月19日	大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村	
106	11月16日	下妻方面 大宝八幡宮 多賀谷氏墓他	山崎善司
107	昭和56年 2月23日	杉戸宿 河原稻荷 本陣跡 来迎院他	石塚吉男
108	3月22日	目黒方面 正覚寺 祐天寺 大鳥神社	

回数	実施年月日	行先	案内者
109	昭和56年 4月29日	三浦半島 衣笠城跡 大善寺 油壺他	山崎善司
110	6月28日	栗橋 静御前の墓 宝治沼 光了寺他	中村忠夫
111	7月26日	岩槻 文化センター 遷喬館 時の鐘他	
112	9月27日	幸手方面 幸手城跡 宝持寺 浅間社	
113	11月29日	大袋方面 薬師堂 遠藤家 荒陽の墓	
114	昭和57年 2月28日	荻島地区 浄山寺 シバ利橋 玉泉院他	
115	3月28日	板橋地区 トヅキ地蔵 庚申塚 縁切榎	中村忠夫
116	4月29日	板橋地区 松月院 資料館 赤塚城跡	加藤幸一
117	6月27日	松戸 本土寺 東漸寺 一月寺跡他	
118	7月25日	新方地区 台風の為中止	
119	9月26日	日光今市地区 杉並木 東照宮他	山崎善司
120	10月17日	新方 川崎神社 聖徳寺 清淨院他	
121	昭和58年 2月27日	深川方面 八幡宮 不動尊 清澄園他	加藤幸一
122	3月27日	市川里見公園 矢切の渡 帝釈天他	
123	4月29日	佐倉城跡 臼井城跡 民俗博物館	山崎善司
124	6月26日	文京地区 湯島天神 小石川後楽園他	中村忠夫
125	7月24日	新座三芳地区 平林寺 多福寺他	丸田富夫 山田政信
126	9月25日	栃木大平山 塚田記念館 町並見物他	石塚吉男
127	10月23日	北鎌倉 円覚寺 東慶寺 建長寺他	山崎善司
128	11月27日	隅田川の辺り 浅草神社 待乳山聖天	山田政信
129	昭和59年 2月26日	目黒 不動尊 大鳥神社 祐天寺他	鈴木種雄
130	3月25日	川越 常楽寺 喜多院 東明寺他	丸田富夫
131	4月29日	東松山菅谷館跡 箭弓神社 吉見百穴	山崎善司
132	6月24日	草加松原松並木 一里塚 藤助河岸	木原徹也
133	7月22日	千葉市内 千葉寺 猪鼻城跡 来迎寺	中村忠夫
134	9月30日	大聖寺 天嶽寺	石塚吉男
135	11月11日	王子豊嶋氏の遺跡を訪ねて 飛鳥山他	山田政信
136	昭和60年 2月24日	野田愛宕神社 至徳泉 郷土博物館他	木原徹也
137	3月24日	上野東照宮 弁天堂 六義園他	丸田富夫
138	4月29日	鎌倉Ⅲ 宝戒寺 和田塚 北条政子墓	山崎善司
139	6月23日	千葉氏Ⅲ 勝胤寺 博物館 佐倉城跡	丸田富夫 中村忠夫
140	7月28日	都電荒川線沿線 回向院 鬼子母神他	山田政信
141	9月22日	銀座・日本橋方面 十軒店 炉灯碑他	加藤幸一
142	10月6日~7日	信州四賀村 (会田家のルーツ)	山崎善司
143	昭和61年 2月23日	川越街道 上板橋宿 安養院他	丸田富夫
144	4月29日	都内谷中方面 大名時計博物館他	加藤幸一

回数	実施 年 月 日	行 先	案 内 者
145	昭和61年 6月22日	練馬石神井地区豊島氏の遺跡を訪ねて	山田政信
146	7月27日	四谷方面 見附門跡 お岩稻荷他	加藤幸一
147	9月27日	都内志村城跡 小豆沢神社 一里塚他	丸田富夫
148	10月26日	三郷方面 石川氏宅 市立資料館他	中村舜朔
149	11月30日	草加 浅間神社 東福寺 札場河岸他	須賀源藏
150	昭和62年 1月 3日	隅田川七福神めぐり	山田政信
151	3月29日	吉川方面 定勝寺 密巖院 延命寺他	中村忠夫
152	4月26日	都下小金井方面 金蔵院 野川公園他	加藤幸一
153	5月24日	八幡山古墳 小見真觀寺古墳他	宮川進
154	7月26日	日光御成道を訪ねて(1)本郷地区	山田政信
155	9月23日	早稲田 目白台方面 高田馬場跡他	加藤幸一
156	10月25日	日光御成道を訪ねて(2)駒込 王子	山田政信
157	11月29日	都戸崎川村慈光寺を訪ねて	宮川進
158	昭和63年 3月27日	日光御成道を訪ねて(3)赤羽 岩淵	山田政信
159	4月24日	竹の塚伊興方面 東岳寺 氷川神社他	加藤幸一
160	5月22日	多摩川台古墳に古代武蔵の盟主を想う	宮川進
161	7月24日	日光御成道を訪ねて(4)川口鳩ヶ谷	山田政信 鈴木秀俊
162	10月30日	鉢形城跡 善導寺 正龍寺	丸田富夫
163	12月 4日	高麗方面 聖天院 高麗神社他	宮川進
164	平成元年 2月26日	古志賀谷館跡 太郎館跡 四郎館跡他	山崎善司
165	3月26日	日光御成道を訪ねて(5)大門 浦和	山田政信
166	4月30日	庄和町の文化財と牛島の藤	丸田富夫
167	5月28日	日光御成道を訪ねて(6)岩槻加倉	鈴木秀俊
168	7月23日	日光御成道を訪ねて(7)本郷	山田政信
169	9月24日	日光御成道を訪ねて(8)岩槻北部	鈴木秀俊
170	10月22日	江の島 西鎌倉方面	宮川進
171	12月 3日	日光御成道を訪ねて(9)和戸と鷺宮	鈴木秀俊
172	平成2年 2月25日	妻沼聖天 太田天神山古墳 朝子塚	宮川進
173	3月25日	日光御成道を訪ねて(10)幸手宿	鈴木秀俊
174	4月22日	都内新宿方面 歴史博物館 御苑他	山田政信
175	5月27日	日光方面 含満ヶ淵 東照宮 輪王寺	山田政信
176	7月22日	関宿 光岳寺 貫太郎記念館 城跡他	鈴木秀俊
177	9月30日	栗橋 静御前墓 宝治戸沼 本陣跡他	山崎善司
178	10月28日	柄木出流山満願寺 本堂 奥の院他	山田政信
179	12月 2日	大宮方面 盆栽村 漫画会館 博物館	鈴木秀俊
180	平成 3年 1月 3日	谷中七福神めぐり	山田政信

回数	実施 年 月 日	行 先	案 内 者
181	平成3年 3月24日	春日部 梅若塚 八幡神社 最勝院他	鈴木秀俊
182	4月28日	古河 古河公方館跡 歴史博物館他	山崎善司
183	5月26日	鎌倉 極楽寺 長谷寺 大仏他	宮川進
184	7月24日	古利根水郷と虫追いの川崎神社	鈴木秀俊
185	9月22日	騎西町 龍興寺 大福寺 私市城址他	山崎善司
186	10月27日	東海道品川宿を訪ねて(1) 東海寺他	山田政信
187	12月 1日	足利学校 鎌阿寺 館林茂林寺	鈴木秀俊
188	平成 4年 1月 3日	下谷七福神めぐり	山田政信
189	2月23日	東松山 黒岩横穴群 吉見観音他	宮川 進
190	3月29日	玉川上水	加藤幸一
191	4月26日	世良田 長樂寺 総持寺 東照宮	鈴木秀俊
192	5月24日	東海道品川宿を訪ねて(2) 品川寺他	山田政信
193	7月15日	桜井地区 安国寺 下間久里獅子舞	鈴木秀俊
194	9月27日	白岡久伊豆神社 興善寺 八幡宮	山崎善司
195	11月 1日	鎌倉 鶴岡八幡宮 净光明寺 海藏寺	宮川 進
196	12月 6日	野田 キッカワ工場 博物館 愛宕神社	鈴木秀俊
197	平成5年 1月 3日	深川七福神 富岡八幡宮 弁天堂他	山田政信
198	2月28日	野島 第六天 一乘院 済山寺	鈴木秀俊
199	3月28日	武藏国分寺 江戸東京たてもの園	宮川 進
200	4月25日	大相模 大聖寺 不動道の庚申塔	加藤幸一
201	5月23日	坂戸 住吉神社 資料館 休台寺他	小原勘三郎
202	7月25日	金沢称名寺 金沢文庫 戦艦三笠	宮川 進
203	9月26日	大森 西光寺 鹿島神社 大森貝塚他	小原勘三郎
204	10月31日	太田 内田郷土博物館 大光院他	鈴木秀俊
205	11月28日	鎌倉 賴朝墓 覚園寺 瑞泉寺他	宮川 進
206	平成6年 1月 3日	亀戸七福神 常光寺 亀戸天神他	山田政信
207	2月27日	高坂 諏訪山古墳 正法寺 資料館他	宮川 進
208	3月27日	与野 長伝寺 正円寺 圓乗院他	小原勘三郎
209	4月24日	古河西郡 宗願寺 雀神社 永井寺他	鈴木秀俊
210	5月22日	麻布 心光院 善福寺 泉岳寺他	山田政信
211	7月24日	隅田川川下り 葛西臨海公園 水族館	宮川 進
212	9月25日	流山 近藤勇陣屋跡 博物館 東福寺	鈴木秀俊
213	10月23日	和光市 東林寺 壱鑑寺 吹上観音他	小原勘三郎
214	11月27日	鎌倉 妙本寺 光明寺 安國論寺他	宮川 進
215	12月11日	忠臣蔵 内匠頭邸跡 吉良邸跡他	宮川 進
216	平成7年 1月 3日	日本橋七福神 小網神社 水天宮他	山田政信

回数	実施 年 月 日	行 先	案 内 者
217	平成7年 4月 9日	江南町・小川町 塩古墳 穴八幡古墳	宮川 進
218	4月 30日	川越市 時の鐘 本丸御殿 喜多院	西田 茂
219	5月 21日	市内平方地区の石仏めぐり	加藤幸一
220	5月 27日	日黒美術館と恵比寿ガーデンプレイス	宮川 進
221	7月 23日	宮代町 西光院 資料館 姫宮神社	鈴木秀俊
222	9月 24日	小川町 八宮神社 伝統工芸会館他	小原勘三郎
223	10月 8日	房総風土記の丘 岩屋古墳 龍角寺	宮川 進
224	10月 22日	三鷹市 禅林寺 深大寺 大国魂神社	野村勝八
225	12月 3日	北鎌倉 円覚寺 東慶寺 建長寺他	宮川 進
226	平成8年 1月 3日	北千住七福神めぐり 千住神社他	山田政信
227	2月 25日	東松山市・吉見町・大里町古墳めぐり	宮川 進
228	3月 24日	市川市 考古博物館 下総国分寺他	小原勘三郎
229	4月 7日	江古田 明治寺 哲学堂 新井薬師他	山田政信
230	4月 28日	岩槻市 芳林寺 資料館 遷喬館他	鈴木秀俊
231	5月 19日	市内大泊地区石仏めぐり 安国寺他	加藤幸一
232	7月 6日	赤坂サントリーホール 秀吉展	宮川 進
233	7月 28日	ゆりかもめ ベイエリア 船の科学館	宮川 進
234	10月 20日	市内東町から吉川市 金剛寺 清淨寺	池田仁 鈴木種雄
235	11月 4日	成田 新勝寺	野村勝八
236	12月 1日	鎌倉 十二所神社 净妙寺 杉本寺他	宮川 進
237	平成9年 1月 3日	新宿山の手七福神めぐり	山田政信
238	2月 23日	川本町 鹿島古墳群 嶋山重忠墓	宮川 進
239	3月 1日	興福寺展と毛利元就展 上野寛永寺他	小原勘三郎
240	3月 30日	田谷洞窟 大船觀音 龍宝寺 遊行寺	水上 清



石鍋 隆子画

回数	年 月 日	発表者	テーマ
1	昭和40年 4月24日	大野伊右衛門	方言について
2	5月14日	大野伊右衛門	越谷御殿について
3	6月27日	新井英彦	埼玉県東南部地区の古代人の住居
4	7月25日	本間清利	助郷の諸問題 新井家文書
5	9月11日	八島理事	鈴久について
6	10月30日	大野伊右衛門	越谷よもやま話
	"	木村信次	しらこばとについて
7	11月28日	本間清利	会田出羽と越谷
	"	大野伊右衛門	芭蕉と越谷
8	昭和41年 1月 8日	高崎 力	大相模の古代住居跡について
9	7月 5日	大野伊右衛門	こしがや由来 浄山寺縁起
10	昭和42年 1月 8日	高崎・金井先生	見田方古代住居跡について
11	2月26日	大野伊右衛門	久伊豆神社
	"	本間清利	村明細帳 七左衛門村
12	5月28日	会員	1) 産社祭礼帳 2) スライド鑑賞見田方遺跡
	"	北島正元	徳川家康と関東農村について
14	8月20日	会員	郷土研究会のあり方
15	10月 8日	三原善太郎	下間久里の獅子舞
16	12月17日	本間清利	会田家備忘録
17	昭和43年 1月14日	小沢先生	近世資料の整理と分類について
	"	本間清利	越谷御殿
18	2月25日	本間清利	産社祭礼帳近世編
	"	岩井 茂	金沢称名寺文庫を主体として越谷周辺の歴史を語る
19	5月28日	本間清利	越谷宿について
20	8月25日	三原善太郎	下間久里獅子舞の現地からみた発祥地考 8ミリ映写
21	12月22日	座談会	郷土越谷について
22	昭和44年 5月25日	会員	下間久里の獅子舞
23	10月10日	是沢恭三	越谷御獵場について
24	昭和45年 1月25日	会員	久伊豆神社の例大祭 テープ鑑賞
25	2月21日	本間清利	越谷市を中心とした河川沿革史
26	5月23日	会員	北川崎のオビシャ スライド鑑賞
27	8月23日	会員	郷上についての放談会

回数	年 月 日	発表者	テーマ
28	昭和46年 1月24日	三原善太郎	文化史観に立つ神話の見方
29	5月23日	本間清利	江戸時代の越谷の村方騒動
30	8月29日	会員	久伊豆神社の例大祭・下間久里の獅子舞 ビデオと8ミリ鑑賞
31	9月26日	高崎 力	越谷市の古代を探る(見田方遺跡)
32	昭和47年 1月23日	岩井 茂	岩槻城主太田氏代々について
33	5月28日	大村 進	大岡忠光と山県大式
34	8月27日	三原 石塚 山崎	越谷御殿はどこにあったか
35	昭和48年 1月28日	岩井 茂	金沢称名寺と越谷近郷の関係
36	5月27日	会員	下間久里の獅子舞
37	8月19日	岩井 茂	久伊豆神社の例大祭
38	昭和49年 1月27日	本間清利	野与党と私市党
39	2月24日	大村 進	会田七左衛門家
40	5月26日	岩井 茂	岩槻藩主大岡忠正
41	8月25日	山崎善司	中世東武における河川道路の推移
42	昭和50年 1月26日	岩井 茂	越谷氏について
43	2月23日	山崎善司	野与党について
44	5月25日	石塚吉男	白岡町周辺
45	8月31日	小島 誠	会田氏と越谷御殿
46	11月23日	本間清利	桜井地区における関東大震災の記録
47	昭和51年 1月25日	竹内 誠	日光道中の通行者
48	3月28日	峰岸都立大助教授	江戸と越谷
49	5月23日	大村 進	古銭と中世社会(浄光寺)
50	6月27日	島田 資料館副館長	豪族武蔵氏の活躍について
51	8月29日	三原善太郎	絵馬について
52	昭和52年 1月23日	山崎善司	我々の周辺にある古代史
53	3月27日	林 博物館学芸員	会田家について
54	5月22日	本間清利	越谷市の仏像について
55	8月28日	大村 進	関東郡代伊奈氏について
56	昭和53年 1月22日	石塚吉男	岩槻城主太田氏資の支配について
57	5月28日	石塚吉男	会田氏こぼれ話
58	8月27日	星野昌治	新方庄及び向畠の伝説(新方陣屋)
59	昭和54年 1月28日	木原徹也	埼玉県東部付近の民間信仰板碑
60	5月27日	本間清利	日光街道脇往還について
			地方自治の変遷と越谷

回数	年 月 日	発表者	テーマ
61	昭和54年 8月26日	三原善太郎	サキタマヒメと越ヶ谷：久伊豆神社
62	昭和55年 1月27日	星野昌治	山王二十一仏庚申板碑
63	2月24日	三原善太郎	入門のための古文書の読み方
64	5月25日	本間清利	関東郡代
65	8月24日	石塚吉男	越谷御殿地始末記
66	昭和56年 1月25日	木原徹也	一宿場町よりみた天保の貨幣改鑄
67	5月24日	中村忠夫	二郷半領駕籠訴事件について
68	8月23日	本間清利	東部低湿地における交通
69	昭和57年 1月24日	星野昌治	二十一仏板碑入門
70	5月23日	丸田富夫	新発見の恩間等覚院跡板碑に関する 仏像の見方スライド ふるさと越谷
71	8月22日	蜂谷敬啓	鎌倉街道を歩いて
72	11月 3日	丸田富夫	日光の建築
73	昭和58年 1月23日	木原徹也	二、三の実例より見た明治初期の 越ヶ谷
74	5月22日	本間清利	武藏田園簿と江戸初期の代官
75	8月28日	山田政信	境の神から道祖神
76	昭和59年 1月22日	木原徹也	日光街道沿いの一里塚・藤助河岸
77	5月27日	山崎善司	徳川家康と越谷
78	6月24日	本間清利	河川流路の沿革
79	9月30日	花房健次郎	梵鐘を訪ねて
80	昭和60年 1月27日	矢島 実	正月の民俗行事と信仰について
81	5月26日	蜂谷敬啓	坂東における豪族層の交替と 武藏七党の出現について
82	8月25日	山崎善司	越ヶ谷会田氏のルーツを探る
83	昭和61年 1月26日	山崎善司	同上ビデオにて
84	5月25日	矢島 実	武藏における農工社会の民俗行事
85	昭和61年 8月24日	木原徹也	草も木も若しくは我をしりたるや 一水野家と春日都市備後一
86	昭和62年 1月25日	本間清利	埼玉の街道 日光街道を中心として
87	2月22日	小島 誠	草創期の鉄道あれこれ 国鉄・私鉄・幻の鉄道
88	6月28日	山部直喜	越谷で見られる野鳥について
89	8月23日	飯山 実	岩槻について
90	昭和63年 1月24日	山崎善司	越ヶ谷言葉、方言と訛集について

回数	年 月 日	発表者	テーマ
91	昭和63年 2月28日	丸田富夫	日本の細部手法、墓股について
92	6月26日	高崎 力	越谷における中世の城館跡
93	8月28日	山崎善司	古志賀谷氏館跡思考(ビデオ併用)
94	平成元年 1月22日	林 貴史	岩槻宿について
95	6月25日	山崎善司	御殿番小杉藤左衛門尉景房の墓
96	8月27日	高橋一夫(県教育局)	ヤマト政権と古墳時代の東国
97	平成2年 1月28日	本間清利	瓦曾根溜井について
98	6月24日	加藤幸一	絵馬について
99	8月26日	宮川 進	縄文海進時における最高海水準について[海はどこまできていたか]
100	平成3年 1月27日	柳田俊司	埼玉の歴史より
101	2月24日	本間清利	日光道中について
102	6月30日	山崎善司	野与党諸氏拠点の考察
103	8月25日	加藤幸一	鳥文斎細田栄之の瓦曾根溜井図
104	平成4年 1月26日	高崎 力	検証・新方領耕地整理(1)
105	6月28日	山崎善司	野与党諸氏の拠点 白岡編
106	8月23日	加藤幸一	旧西方村に散在する庚申塔めぐり
107	平成5年 1月24日	高崎 力	検証・新方領耕地整理(2)
108	6月27日	有瀧龍雄	わが郷土こしがや
109	8月29日	高崎 力	太郎兵衛櫛
110	平成6年 1月15日	加藤幸一	旧平方村の石仏類
111	6月26日	高島英一	足立百不動尊
講座1	8月21日	山田政信	石仏の見方 -基礎知識-
112	平成7年 1月29日	加藤幸一	市内桜井地区の石仏
113	6月25日	小島 誠	社会の裏側あれこれ
114	8月27日 〃 〃	高橋一夫 森田 梢	[創立30周年記念歴史講演会] 初期ヤマト政権と東国 武藏・下総間の駅路
115	平成8年 1月28日	加藤幸一	旧舟渡・大松・大杉に散在する石仏
116	6月23日	鈴木秀俊	六ヶ村榮広山由緒著聞書を読む
117	8月25日 〃 〃	橋本充史 高崎 力	[見田方遺跡発掘30周年講演会] 見田方遺跡の時代 見田方遺跡の発掘
118	平成9年 1月26日	加藤幸一	旧川崎村・向畑村・大吉村・弥十郎村に散在する石仏類

## 越谷市郷土研究会 会員名簿 (市内1)

平成9年3月現在

	氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
1	会田 傑	343	越谷市神明町2-1 越ヶ谷中町8-26	(0489) 62-3300 62-2054
2	有瀧龍雄		袋山776-10~	77-8955
3	秋田 成		大林356-78	76-0558
4	青山栄吉		大間野町2-5-6	88-0744
5	青木泰英		赤山町3-29-5	62-9871
6	青木豊子		蒲生西町2-20-4	86-7150
7	新井徳有		越ヶ谷本町11-10	62-2986
8	浅見晴子		上間久里448-22	77-4147
9	荒瀬富美子		千間台西5-10-11	75-1802
10	安藤トモ子		越ヶ谷2-2-26	62-2604
11	石塚陳正		袋山604-13	75-5568
12	伊藤靖二		宮本町2-16	62-1039
13	井上すず		越ヶ谷1-9-9	65-9521
14	井上陽子		神明町1-102	65-3263
15	井上文子		恩間545-11	77-4403
16	和泉エツ		弥栄町1-172-6	78-0382
17	一色英子		相模町2-238-2	86-7765
18	池田 仁		蒲生旭町6-8	88-4815
19	岩沢 明		蒲生愛宕町7-13	87-5682
20	井田康雄		花田2-6-7	62-1328
21	石川辰三郎		神明町2-357-1 タン1-202	78-8339
22	磯谷知子		神明町1-150-1	66-8712
23	石鍋隆子		宮本町5-255-15	65-7278
24	石川美津江		大林469-3	76-0345
25	一安タミ子		神明町1-52	62-1414
26	稲垣和子		千間台西3番地2-2-808	75-1580
27	稲田玲子		伊原2-15-11	88-5691
28	岩瀬静江		神明町3-410	76-5754
29	宇田川正治		宮本町3-50	64-0005
30	小原勘三郎		花田3-5-8	62-3873
31	岡田和子		西新井1886-6	65-0259
32	人鶴シヅ子		袋山1105	74-7212
33	大熊弥平		宮本町4-5-4	65-6339
34	小川隆雄		登戸町36-26	86-6778
35	大河原初男		宮本町3-177	64-2723
36	太田つる		北越谷4-10-8	74-9466
37	荻野昌世		相模町7-184-2	86-7283
38	上村 透		御殿町4-30	64-3240
39	川田佐一郎		七左町5-185	86-0337
40	河上良吉		宮本町2-86	62-4878
41	加藤富士代		南荻島520-4	74-8310
42	加治正則			

	氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
43	川添ハルミ	343	越谷市赤山町2-238-3	(0489) 64-5548
44	加藤サイ子		北越谷1-21-2	75-8303
45	亀田すみ子		袋山1629-6	76-0331
46	片桐 薫		宮本町3-175-10	62-9648
47	上郷以満子		相模町3-132-2	88-6021
48	木村 実		恩間654	75-0872
49	木曾庶義		弥栄町1-172-31	76-5549
50	黒田陽一		宮前1-9-3	64-2920
51	黒田田男		花田4-18-1	64-7944
52	工藤さだ子		大林241-10	76-9680
53	工藤松四郎		花田733-21	66-0978
54	国枝昇三		蒲生3-11-13	88-9513
55	小島 誠		平方150	76-0647
56	小林秀男		東越谷9-34-3	62-3704
57	小林よしゑ		南越谷3-13-9	63-0346
58	小出美代子		神明町2-150-1	62-5873
59	近藤ユキ子		赤山町2-24	62-8305
60	斎藤友子		越ヶ谷1-3-29	62-8554
61	斎藤弘義		大房549	76-3066
62	佐々木君枝		赤山町3-126-7	64-7767
63	佐藤光夫		赤山町2-149	62-6544
64	坂本弘子		宮本町5-210-8	64-7394
65	桜井史枝		弥栄町4-1-188	77-3982
66	渋谷正芳		蒲生1-14-9	86-3146
67	渋谷澄子		川柳町1-211	88-2866
68	重田さと子		登戸町6-46	87-7537
69	鈴木種雄		赤山町2-170	62-2017
70	鈴木秀俊		宮本町2-117-6	64-1009
71	鈴木徳治		大沢3-14-2	76-6409
72	鈴木作之助		東大沢3-32-5	79-9400
73	鈴木和雄		越ヶ谷5-2-19	64-5450
74	鈴木茂信		千間台西5-23-13	78-3469
75	鈴木政子		増林3785	63-2005
76	鈴木タカネ		大沢1579-9	78-3969
77	鈴木千也子		神明町2-407	74-6258
78	鈴木和子		千間台西2-14-5	75-3665
79	鈴木千代		恩間1070	75-0976
80	菅波昌夫		南越谷1-3-18	86-0563
81	瀬尾辰子		七左町8-188	66-8383
82	須藤清人		新川町1-345-3	64-0393
83	須賀幸子		増林3322	65-9732
84	須貝一意		袋山2036-9	79-9873

## 越谷市郷土研究会 会員名簿 (市内3)

平成9年3月現在

	氏名	〒	住 所	電 話 番 号
85	関根綾子	343	越谷市大成町8-483-2	(0489) 89-1477
86	染谷政之助		宮前1-8-1	66-6997
87	染谷勇蔵		花田1-32-1	64-7940
88	染谷耕司		越ヶ谷2646	64-6321
89	谷岡隆夫		宮本町3-117-8	62-7527
90	高崎 力		平方1416-1	76-3987
91	高橋正輝		東柳田町10-31	62-5766
92	高橋 清		新川町1-366	87-9254
93	高橋正澄		蒲生西1-3-4	89-1617
94	高橋とき		大沢2-2-30	74-4492
95	田所義朗		東越谷5-4-8	65-3313
96	高谷良子		赤山町4-6-14	65-9760
97	高山はづ		大泊611-89 佐山方	75-6803
98	武井福三郎		東町5-23-2	89-5480
99	武田和枝		赤山町3-154-13	63-2038
100	立川武夫		元柳田町7-26	63-0630
101	竹谷フミ子		大林458-4	74-5679
102	田島絹代		大沢3-16-45	74-4072
103	千葉富久子		越ヶ谷2679-1-709	63-2581
104	堤竹宏吉		宮本町5-210-17	62-1542
105	照井春吉		赤山町2-228-3	66-4785
106	豊田 裕		南越谷1-6-75-106	87-4202
107	名倉さわ		新川町1-82	86-2558
108	中村建生		平方南町5-3	74-3785
109	名倉三津枝		新川町1-336	87-9945
110	成瀬 潔		川柳町4-245-1 朝日ラヂオ-デンゲイ122	87-5320
111	長瀬由木夫		下間久里522-4	75-1519
112	中村林也		増森1708	66-8917
113	中村律子		弥十郎37-10	74-8361
114	中道 康		南荻島596-3	77-4860
115	中田澄子		越ヶ谷2-4-36	63-1873
116	並木栄子		神明町2-380	74-0982
117	長峰栄子		蒲生4-15-40	89-4402
118	長野いつ		千間台西2-9-11	75-6094
119	成田マサ		谷中町2-98	62-2976
120	西田 茂		谷中町1-80	62-4537
121	西沢許女		越ヶ谷2236-B-301	64-9571
122	西村 功		下間久里 1168-1 ハヤA310	78-2927
123	新野吉男		千間台西2-19-1	77-6453
124	沼倉セツ		花田5-19-56	64-4045
125	野村勝八		弥十郎272-8	78-1133
126	長谷川鉄太郎		東越谷2-3-31	66-5237

	氏 名	〒	住 所	電 話 番 号
127	原田熊蔵	343	越谷市瓦曾根2-11-19	(0489) 62-1574
128	原田民自		弥十郎778-8	76-3710
129	原島 明		赤山町2-182-1-101	64-2614
130	橋本和雄		袋山436-6	79-9708
131	橋本民子		大房1005-4	79-1716
132	林 佳子		船渡367-11	74-2420
133	平井五六		神明町2-6-5	64-9887
134	平川陽三		七左町8-81-1	62-3885
135	平田博子		宮前1-17-14	64-1857
136	樋上貞子		千間台西4-8-68	77-8090
137	古田美雄		千間台西5-26-37	76-8161
138	古谷京子		伊原2-8-6	87-8033
139	藤井美子		上間久里47-2	77-8814
140	降田幸子		北越谷2-13-1	74-5522
141	本間清利		柳町3-23	62-0210
142	星野三郎		越ヶ谷本町3-4	64-0211
143	星野昭江		増林3557-2	66-0090
144	星野とめ		増林3581	64-1629
145	堀川静二		弥栄町3-43-82	75-7899
146	程塚澄江		七左町1-15	85-5844
147	松沢長次郎		花田3-19-4	62-7087
148	増岡武司		東越谷7-129-14	64-7386
149	宮川 進		千間台西2-17-16	75-9139
150	宮下孝雄		宮本町3-46-1	62-3220
151	宮内和代		三野宮1356	75-6848
152	水上 清		宮本町5-210-10	66-7391
153	武藤すみ子		下間久里886-9	75-2474
154	村上伸子		千間台西2-22-25	74-7128
155	森屋英龍		東大沢5-5-3	65-3390
156	森田三郎		大竹535-3	74-7730
157	最上みち子		袋山1503-50	75-0343
158	山崎政隆		袋山200-5	74-6401
159	山梨隆司		袋山494-1	77-6294
160	山口美津江		神明町3-219	66-9555
161	山本鉄也		千間台西 1-19-6-1-405	76-0492
162	吉田敏子		袋山192-5	74-3770
163	吉田育子		弥十郎636-4	76-7183
164	吉田元子		増林3559	64-4330
165	吉見美津恵		花田5-12-11	63-5995
166	横川静江		北越谷2-5-8	74-1285
167	米川ミオ		谷中町1-23-3	64-2949
168	吉沢吉子		北越谷2-12-9	76-3459

## 越谷市郷土研究会 会員名簿 (市内5)

平成9年3月現在

	氏名	〒	住 所	電 話 番 号
169	渡辺容子	343	越谷市谷中町2-274	(0489) 66-8230
170	渡部フミ		南荻島3814-15	75-1860
171	渡部テフ		南荻島3709-3	77-3294

## 越谷市郷土研究会 会員名簿 (市外1)

平成9年3月現在

	氏名	〒	住 所	電 話 番 号
172	山田政信	114	東京都北区桐ヶ丘1-21- W16-204	(03) 3906-0725
173	鈴木英武	131	〃 墨田区八広1-18-3	(03) 3616-3976
174	星野昌治	279	千葉県浦安市入船4-38-2	(0473) 51-0417
175	木原徹也	278	野田市中根140-174	(0471) 22-0654
176	木村信次	339	岩槻市本丸2-9-3	(048) 757-6095
177	加藤幸一	344	春日部市大枝859-5	(048) 738-4181
178	若松清一	344	〃 豊町3-7-47	(048) 736-5370
179	林 和江	344	〃 大枝812-5	(048) 738-3036
180	坂巻房子	344	〃 藤塚326-10	(048) 737-8978
181	村上祐乃	344	〃 備後東7-14-3	(048) 738-1656
182	石井ふさ	344	〃 備後東5-14-20	(048) 735-2520
183	川鍋しん	344	〃 備後東6-4-38	(048) 735-5849
184	鈴木みち	344	〃 備後東5-7-16	(048) 735-2526
185	檜山克子	344	〃 備後東7-30-16	(048) 733-0354
186	高島英一	336	浦和市太田窪5-16-3	(048) 882-6912
187	酒井達男	340	草加市旭町4-4-3	(0489) 41-9052
188	後藤千代子	340	〃 八幡町1223-13	(0489) 36-9880
189	瀬下さつき	340	〃 松原2-B71-405	(0489) 43-8355
190	鴨脚洋子	341	三郷市彦成4-3-7-106	(0489) 59-6256
191	新井登美栄	347	加須市大室131	(0480) 65-4476
192	斎藤重子	351-01	和光市新倉2-22-1	(048) 461-2378
193	野沢陽子	332	川口市朝日1-14-19 沢山A 503	(048) 224-3835
194	小林 登	332	〃 宮町8-28	(048) 252-6722
195	田中きく江	342	吉川市木壳2-11-1	(0489) 81-4052
196	林 知子	342	〃 平沼1-6-4	(0489) 82-5913
197	大滝尉子	343-01	北葛飾郡松伏町築比地235	(0489) 91-5776
198	正岡 勇	〃	〃 〃 235-12	(0489) 92-3856
199	台 実	349-11	〃 栗橋町北2-12-28	(0480) 52-2392
200	斎藤博道	345	南埼玉郡宮代町須賀 1218-14	(0480) 34-3926

## 越谷市郷土研究会 役員

平成9年3月

常任顧問 小島 誠

会長 谷岡隆夫

副会長 鈴木秀俊

理事	有滝龍雄	池田 仁	一色英子
	小原勘三郎	加藤幸一	木原徹也
	鈴木種雄	高崎 力	高山はつ
	名倉さわ	西田 茂	野村勝八
	林 和江	平川陽三	本間清利
	山田政信	山口美津江	

幹事 宮川 進 堤竹宏吉

監事 古田美雄 宇田川正治

越谷市文化連盟理事

谷岡隆夫 鈴木秀俊

越谷市文化連盟代議員

鈴木種雄 堤竹宏吉 名倉さわ

市民まつり及び市民文化祭実行委員（展示）

谷岡隆夫 鈴木秀俊 小原勘三郎

# 越谷市郷土研究会会則

## 第一章 総則

第一条 本会は越谷市郷土研究会と称する。

第二条 本会の事務所は幹事長に置く。

第三条 本会は市内の郷土研究者の連絡をはかり、郷土史料の調査研究を目的とする。

## 第二章 事業

第四条 本会は第三条の目的を達成するため左の事業を行なう。

一、郷土史研究の連絡とその啓発。

二、郷土文化財保存の協力。

三、機関誌の発行。

四、その他、本会の目的達成上、必要な事項。

## 第三章 会員

第五条 会員は本会の趣旨に賛同するものを以てする。

第六条 会員は会費として、毎年度初めに金五千元を納入する。

## 第四章 役員及び職員

第七条 本会に左の役員を置く。

会長 一名  
副会長 二名  
理事 若干名  
幹事長 一名  
幹事 二名  
監事 二名  
常任顧問 若干名  
顧問 若干名

第八条 会長は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

副会長は幹事長に置く。

理事は幹事長に置く。

幹事は幹事長に置く。

監事は幹事長に置く。

顧問は幹事長に置く。

常任顧問は幹事長に置く。

顧問は幹事長に置く。

理事が理事会を組織し、会務の執行に当たる。  
幹事は理事が組織し、会務の執行に当たる。  
幹事長は会務を総理し、会長を代表する。  
副会長は会長を補佐し、会長事故あるときこれに代わる。

理事は理事会を組織し、会務の執行に当たる。  
幹事長は会務を総理し、会長を代表する。  
幹事は幹事長に置く。

監事は幹事長に置く。

顧問は幹事長に置く。

幹事長は会務を総理し、会長を代表する。

幹事は幹事長に置く。

監事は幹事長に置く。

顧問は幹事長に置く。

幹事長は会務を総理し、会長を代表する。

幹事は幹事長に置く。

監事は幹事長に置く。

顧問は幹事長に置く。

幹事長は会務を総理し、会長を代表する。

幹事は幹事長に置く。

監事は幹事長に置く。

顧問は幹事長に置く。

幹事長は会務を総理し、会長を代表する。

幹事は幹事長に置く。

監事は幹事長に置く。

顧問は幹事長に置く。

幹事長は会務を総理し、会長を代表する。

幹事は幹事長に置く。

## 附則

- 1 本会の会則の変更は、総会の議決によるものとする。
- 2 本会施行のため必要な規定は、会長が別に定める。
- 3 本会則の施行は、昭和四十年一月二十七日とする。

改訂 昭和五一・五・二二

平成三・六・二〇

平成六・六・二六

## あとがき

副会長 鈴木秀俊

### 編集委員

会報第九号の発刊に当りましては、多くの方々からご寄稿をいただき有難うございました。生涯学習の時代を反映して投稿された方も多彩になり、お陰様で内容豊かな「古志賀谷」を発刊することが出来ました。

特集として企画された「谷中町書き書き」は、谷中町の今昔をわかり易く纏められています。話された方は土地の旧家の旦那方で、戦前から現在まで谷中町の移り変りを見守って来られた方々です。古くからの伝承や信仰、行事などを詳しく知る人は年々少なくなっていますので、貴重なお話でした。

もう一つの特集「子どもの頃の越谷」「越谷にきたころ」の思い出について、会員の方々からいただいたアンケートには、かっての越谷の自然豊かな田園風景や、それぞれの心に残るなつかしい思い出などが多く寄せられ、郷土越谷は「住めば都」の感を深くしました。また、市外の方からのご投稿には、郷土研究会という紹介を強く感じます。

今回、初めて史跡めぐり感想文を執筆された方には、まことに御苦労様でした。

終りに編集に当られた委員の方々に謝意を表し、会報第九号の発刊をお祝い申し上げます。

小原勘三郎	加藤幸一
鈴木秀俊	鈴木種雄
高山はつ	谷岡隆夫
堤竹宏吉	西田茂
宮川進	山口美津江

会報	九号	会員頒布
発行日	平成九年六月	
発行所	越谷市郷土研究会	
代表者	越谷市宮本町三の一七の八	
印刷所	谷岡隆夫	
三光堂印刷所		
越谷市大沢一の十五の十四		